
魔と生きる国

示右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔と生きる国

【Nコード】

N 6 6 3 2 P

【作者名】

示右

【あらすじ】

魔物ではない、魔族とともに生きる国、ミカド国。

召喚の儀、それが特に美形の姫様とくれば、勇者や英雄が呼ばれるのが世の常。

しかしその召喚は事故で失敗し、外見や能力が一般人と変わらない1人の男が現れた。

しかもちよつとお腹も出ている。

間違って呼ばれたが帰れない。それならばそれなりに生きていくしかない。

ダイスケの異世界での生活が始まる。

なお、登場人物に真女神転生からの引用がありますが、話の展開はオリジナル色が強くなっております。その点ご了承ください。

第1話 プロローグ

カポーンなんて形容詞、最近聞かなくなったなあ。
などと思いつつ湯舟につかる。

「今日も今日とて頑張りました。畜生あの上司、俺がいやだと言わない、いや言えないと思つて無茶な仕事振りやがつて。断れない性格は自分でも嫌いだ。今の所何とかできているからいいものの」

ここ数年彼女もいない身である一人暮らしの樹いつき 大介だいすけも独り言が多いようだ。弟はすでに遠方で家庭を持っている。

35にもなつて独り身とは周りの目もなかなか堪える。30を越えてから晩酌のビールで少しお腹が出てきたのも気になってきているためふとお腹に目をやってみる。

「あれ…？」

透明な湯の中に見えるはずの自分の四肢が見えない。湯の下にさうになぜか水面が見える。

「なんだこれ？……うわっ！」

……落ちた。落ちていくその刹那、水面の上に見えるきょとんとした自分の顔がやけに印象深かった…。

ざっぱん！

風呂から風呂へ落ちた。変な言い回しだがそれが一番しっくりする。

「うおっぷ！」

もう数年も水に潜るようなことをしてきていない頭がパニックを起こす。

それでもたかが数十センチの深さではおぼれたりせず顔を出すことができ、深い呼吸とともに心も落ち着いてくる。

落ちる直前に下に見えた水面がお湯でよかった。冷水だったらさぞかしパニックだっただろう。などと思い周りを見渡してみる。

「どこだここ！？」

広い……。どこかの温泉みたいだ。

石造りの天井や壁がなんともいえない雰囲気をかもし出している。そして視界に人らしき影が見えた。

「うおっ！？だれっ？！……あ、すみません」

別に自分が悪いわけでもないのに反射的に謝罪の言葉が出てしま

「あの？」

反応の無い人影にさらに声をかけてみる。相手もあわてていたのか、落ちてきたひょうしに出た盛大な湯気が収まる頃反応があった。

はっとする美人だった。自分が裸であることも忘れ、つい見とれてしまう。

20代位だろうか、日本的な顔に緑の髪というのも不思議だったが、それが彼女の魅力を際立たせているかのようだ。

だが、いまいち今の日本の雰囲気になじめない感じもしたので、反応のあったその女性にもう一度声をかけてみることにする。その周りにも男女数名いるようだが、反応が無いように見える。とつさに手につかんだままだったタオルを腰に巻き、口を開く。

それに俺はファンタジーが大好きだ。自分が経験できるのならばここは年の功でこんがらかりだしている頭を押さえ、紳士的にいくべきだ。

将来のためにも。

「あの、すみません。日本語分かりますか？…えっと、Can you speak japanese？」

「あ、はい、言っていることは分かります。ニホンゴというのと、その後の言葉はよく分かりませんけど。」

よかった。日本語で話しているのに日本語という語句の意味が通

しないことに疑問を持ったが、少なくとも会話はできそうだ。

「よかった。で、ここはどこですか？」

「ここは魔と生きる国、ミカド国城です。あなたはどの町から召喚に応じてくださったのですか？」

「召喚？応じたわけではないのですが、自分が先ほどまでいたのは日本の長野県です」

「ニホン？ナガノケン？そのような地名はウィルス国にも無いはずですが。それに召喚に応じていないのでしたらなぜここに…？」

あれ？かみ合っていない…。

「自分の知識ではミカド国やウィルス国といった地名は存在してませんでした。召喚という意味は分かりかねますが、落ちてきたというのが正しいと思います」

「そんなはずはありません。あなた様は私の夫として召還に応じてくれたはずです。そうでなくてはあなた様がここにいる理由が説明できません。わが友ティターニアが伺ったはず」

「いえ、会っておりません。どういう方なんですか、その妖精の有力者みたいな人は？」

と、その女性の足元に小さな女の子が現れる。

「ティターニア！どうしたのですか!？」

「その子がティターニアさん…?」

どう見ても某仲魔と会話契約合体させていくRPGの妖精種最高キャラだ。

現代社会に存在したのか? 俺が知らないだけだったのか? いや外でこんな話をしたら頭があれだと思われるしまう。

しかし世界中で自分以外は皆知っていることだとしたら……。

などと少し変な方向に考えが行きだが、その女の子と美人の問答で思考の無限ループから抜け出すことができた。

「姫、申し訳ありません。飛ぶ間際に何かの気配にぶつかってこの方の世界に飛ばされたようです。この方の世界、魔力がゼロの世界でした。よって体の構成物の半分以上を使い、魔力に変えて信号を姫の下に送ることで精一杯だったのです」

この人姫だったのか、あまりくだけた話し方をしなくてよかった。それに確かに自分の周りで魔力とか本気で言ったらどう思われるか……。

「そうでしたか、ティターニアからの魔力信号に危機の色が見えたので急いで呼び戻したのです」

「じゃあ、どうして自分まで…?」

つい口をはさんでしまった。しかたない、自分のことだ、切実である。

ティターニアと呼ばれた少女が、見かけに似合わない申し訳なさそうな表情で言う。

「世界に魔力が無いため私自身の存在を固められず、ただの魔力と

なつて拡散、消滅しかけた所、あなたの魔力に引き寄せられ重なつてしまったゆえに一緒にこちらに来てしまったものと」

「そうですか。今は消滅しなかったことを喜ぶことにしましょう。落ちてくる時にあちらの自分も見えたので、あちらの自分も何とか元気でしようし。…元気ですよね…？」

少女に聞いてみた。

「姫のとつさの行動は召喚というよりも私の魔力をたどり、体の成分でもある魔力の塊をこちらにたくり寄せるものでした。ですからあなたの魔力がこちらに来て形創っていると思います。あちらで魔力を利用し生きていたのであれば不自由になつてしまうかもしれません」

「そうですか。まあ、魔力なんてあちらでは御伽噺に近いものがありましたから大丈夫でしょう。ちなみになぜ自分は自我があるのでしょう？」

「そこまでは…。すみません。素質があつたとしか」

多少理解できた。魔力の無い世界だった現代の自分の魔力部分のみ飛ばされたと。まあ自我についても魔力で思考とかしているわけではないし、元の自分も今までどおりだろう。

じゃあ、こちらの俺はどうしたらいいのだろう。

と、そうだ、その前に聞いておかねばいけないことがあつたんだ。

「ちょっと聞きたいんですが…?」

姫と呼ばれた美人さんとティターニアと呼ばれた少女が同時にうなずくのを見て、なんとなく仲のいい姉妹みたいだと和む。

「えっと、自分のことは大介と呼んで下さい。^{だいすけ}で姫は先ほど夫と言っていました、召還とはどんなものなんです?」

姫がはにかみながら答える。

「ミカド国の婚姻にまつわる方法として、自らの魔力を用いた召喚により、自らにもっとも相性のよい人を選ぶことができます」

「容姿とか性格とかは?」

「それも含めての相性なのです。」

それはそれは。うらやましいなあ。

「そして普段ですと友魔が伺いをたて、まあ大抵は召喚は相手にとっても相性がいいことになるのでめったなことでは断りませんが、相手の了承を得た上で自らの元に相手の友魔が召喚され契約するのです。今回先ほどもティターニアが言ったとおり何かの妨害を受けたこと、友魔ではない大介さんが現れるというより落ちてきたことで禁忌にあたる行為があったと思われる」

またそれは無粋な。

「ユウマというのはティターニアさんみたいな人のことですか? 禁忌というのは?」

「ええ。魔族の友です。魔力の質と量にあわせ、生まれた時に契約がなされていると聞きます。禁為というのは例えば、自分との相性がよくても見栄や自己満足のためにより見かけのいい者や地位のある者を狙い召喚に割り込むことです」

「どこにでもいるんですね、そういう人。」

「ええ、ただ召喚の時間に合わせる必要もありますし、王族に割り込む人間は限られますからじきに分かるでしょう。ダイスケさんには申し訳なくおもいますが。」

「いえいえ、元の自分も大丈夫そうですし、他の人にはできない経験ができそうで楽しみな部分もありますよ？衣食住さえなんとかなれば」

来てしまったものは仕方ない。そしてもし元の世界に戻れるとしても魔力の無い世界では今の自分がどうなるか分からない。ここはひとつあまり危険なことはしないように過ごしていくしかないだろう。

「ダイスケさんの今後や禁忌のこともとりあえずお母様に相談するしかありません」

「自分はどうしたらいいでしょう。」

「申し訳ありませんが同席していただきたいのです。服はここに私も少し恥ずかしいですし」

いつの間にか服を持った女性が傍にいた。

「あ、ありがとうございます。」

少し薄暗い所でよかった。内容はともかく、久しぶりに美人さんと楽しい時間を過ごせた。何年ぶりだろう。

ただ、腰タオルのみてのはさすがに場にそぐわないと内心がっかりしていた。気づかなかった自分が恨めしい…。

第2話

今後

借りた服は甚平というか浴衣のようなものだった。

顔はともかく外国人風な人々に浴衣を差し出されるのははかなり違和感があったが、郷に入れば郷に従えということもあり、慣れるしかなさそうだ。周りはシャツとズボン姿であるだけに余計浮いてしまう。

さて、このお姫様、ユリカ様というそうだ。外国人風な人に…以下略。

友魔のティターニアさんは妖精族の中でもかなり上位らしい。例の召喚を邪魔した人の友魔もかなりの上位なんだろう。普通は下位の友魔では干渉すらできないらしい。一般的に友魔のランクを知るのは本人だけであり、ランク自体も普通の人は気にもとめないようだ。まあ生まれ付いての友人、親友といつていいだろう相手をランクつけるような人間は好かれないのだろう。大人になり友魔が離れてしまった人も中にはいるようだ。しかしその禁忌のことも含め、こつも色々自分に話してしまっているのだろうか。姫の後ろには従者さんのような人もいるのに。聞いてみたら、この従者さんたち、友魔がそれなりに力が強いこと、従者さんの本人の魔力の質などで、生まれ付いて友魔と視角や聴覚を共有しているため、友魔が情報を遮断してしまうと本人には伝わらないらしい。友魔も姫のティターニアさんの配下や友人らしく、ティターニアさんひいては姫の足元を掬うことを考えることはないそうだ。目や耳が少し不自由なことを考えると友魔も利点だけでは無いのかと言ってみると、それ以上に危機察知や言葉に出ない相手の感情等が分かる事があるのでそれ以上に利のあることらしい。友魔も従者さんもお互い助け合い惹かれあっているのでもいいのだ、と力説されてしまった。

そしてふと気が付くと、ティターニアさんは少女ではなくなっていた。この世界の魔力と姫自身の魔力により力が戻ったらしい。世界の魔力で自身の構成を、友魔として姫からの魔力でより高度な存在へとあがっているらしい。姫より背が高くなっただよに見えたが、よく見るとふわりと浮きながら姫の隣を移動していた。

そうこうしているうちにある部屋の前に着いた。客間と聞いた。

小綺麗な扉を開けると、見た感じ中世的な洋室だった。浴衣の自分がさらに浮く気がする。

部屋に入る時に空気の膜のようなものを感じたが、姫も特に変わらないようなので後について中に入る。

従者さんたちは中に入らず、外から扉を閉めたようだ。そこでテーブルの向こう側、ソファの隣に立つ人物に気がつく。事前に王妃と聞いていたので、失礼にあたらないといいなと思いつつ自己紹介を兼ねながら頭を下げる。姫とよく似た顔立ちの女性は笑みをたたえながら鷹揚にうなずくとソファにすすめてくれる。ありがたく座らせていただくと、テーブルの向かいのソファの空いた片方に座った姫がいきなり結構な勢いで話し始めた。多少くだけた言い方をするのは親子だからか。

……

……

…

一息ついたのだろう、従者さんがお茶を持ってきた。結構ないい男だ。ちよっとじろじろ見てしまったかと反省していると王妃から声

がかかった。

「ダイスケさんと言いましたわね、わたくしは王妃のツバキと申します。此度はユリカとティターニアを身を挺して助けていただいたそう。感謝の言葉ありません。」

ユリカ姫もソファの隣に浮かんでいるティターニアさんも頭を下げる。

「いえ、とんでもありません。事実自分が何かをしたというわけはありませんし。」

「それに今後を考えるともう少し深い話をしなくてはなりませんね。あ、オベロンお茶ありがとう。」

「オベロン…さん？ですか？またすごい名前が…。妖精王じゃなかったっけ？従者さんではなくて友魔だったわけか。」

「オベロンからの伝えで、王と皇太子、さらに彼らの友魔からの了承が出ましたのでお話します。この間には防音魔法がかかっているので安心してください。」

「あ、入る時に感じた空気の膜のようなものですか？」

「そうです。それが感じ取れるようなならなお好都合です。ダイスケさん、あなたには姫専属魔導師としてついてもらいます。」

「専属魔導師ですか。どんなことをするんでしょうか？」

「それを含めこれからお話します。個人的には姫の伴侶としての立

場もあつたんですが、友魔が現在いないこと、それから王や皇太子、彼らの友魔が泣きそうになつたらしくて。妥協してこの地位となりました。そして魔導師とは魔術師の上の職にあたり、より複雑な古代文字を使い人々を守る存在となります。」

古代文字？知らないけど大丈夫なんだろうか、化けの皮はげたりしないといいけど。そんな考えが顔に出ていたのか友魔が感じ取ったのか王妃が続ける。

「あなたがティターニアやオベロンに感じている感情、それをわたくしはオベロンから感じるができますが、あなたにはかれらについての知識があるように見受けられます。」

ゲームからですとはいえない雰囲気でちよつと困る。

それからと王妃が続けつつ傍らから紙と筆を出す。紙に火、風、水と拙い漢字を書き出した。違和感があるのは左手で文字を書き、書き順もばらばら、拳句に漢字の中の横線は右から左へ書いていたためだろう。

「こちらから、火、風、水と書いてあります。これが古代文字です。召喚の間であなたが言った二ホンゴという言葉、あの場を監視していたオベロンがどこかで聞いたことがあるということだったので、急ぎ古文書を調べたのです。自分たちの話している言葉の呼び方などこの言葉しか使っていない以上ありえませんし。そして見つけたのがこれです。」

古ぼけた本だ。表紙にかろうじて読めるひらがなが書いてある。

「えでわかるにほんご」

ああ、「絵でわかる日本語」か。

外国人旅行者向けか幼児向けの絵とひらがなのみで書いてある辞書風のものだ。しかし古い。

「これは原本です。中身は理解できるものだけを抜き出して現在の教育に使っております。」

壊れないように丁寧に中をしてみる。確かに日本語覚えてたての人向けかも。本の最後の方、出版の日付を探しながら問う。

「子供向けの本ですか。あ、この最後の日付はいつごろかわかりますか？」

「教育が子供のみとは限りません。普段生活する分なら古代文字は必要ありませんもの。そしてその日付は今から約5000年前の物と考えられております。」

「5000年前：。」

それ以上言葉が出ない。

異世界だと思っていた。日付が西暦2030年だったのも驚きだが、5000年も前とは。2030年とはもし自分がいたら50代になる。今の自分の感覚で未来の印刷物を5000年前のものとして見るという猛烈な違和感を感じた。5000年の間に何があったのだろう。人は減り、魔力と自然と魔族と魔物あふれるこの地球に何が原因でなったのだろう…。

恐ろしくもあり、面白そうでもある。幸い古代文字と呼ばれる漢字もわかることだし、また調べることができるかもしれない。

ここにいる自分が災害等に見舞われたわけではないので結構簡単に、歴史を読む感じで落ち着いてしまった。

「5000年といいますと、日が昇り、また朝に日が昇るまでを一日としてそれを365回繰り返したものを1年、さらにそれを5000回、でよろしいですか？」

「ええ、そのとおりです。研究の結果4年ほどに一度は366日と計算するようですが。」

うるう年もちゃんとあるのか。

「今のこの国の中で使う文字はどういったものなんですか？」

聞いて見ると王妃は紙にひらがなを書き出した。やはり書き順や線を引く向きが逆だったりと見ていておかしい。が、本人もいたってまじめなんだし黙っておこうと考えた。

「わたくしたちはこういった文字で育ってきました。古文書の中にはもっと複雑な古代文字もあるのですが読み解かれたものは先ほどの文字の他、まだごく少数なのが実情です。そして今、ダイスケさんとお話していても、王家の研究者なみの話が出てきています。専属、監視、職などの言葉はまだ一般の者は理解できない言葉なのです。」

ああ、中途半端で大人のようでもあり子供のようでもある言葉使いはそのせいか。

「古代文字については理解しました。自分に何かできるかわかりませんが何かの手助けができれば幸いです。」

理解したも何も、普段使っていたのだ。パソコン等の影響で、漢字がすぐに出てこないかもしれないが、古文書といわれるものの中に

辞書でもあればどうとでもなるだろう。辞書がない場合は多少困る。漢字は読めてもかけないことが多々あるからだ。だからあまり期待させないようにしておこう。王族でもひらがなレベルが普通らしいから王妃もそんなに期待していない感じもするし。

そしてふとこの国の歴史について聞いて見た。どうもこの5000年の間になにか起き、大人がいなくなった。そのときに魔族と呼ばれる者たちが魔力とともに現れて意思疎通ができた子供たちを守った。当然話はできて漢字は書けないだろうし、多少のかしこまった言葉遣いは魔族と呼ばれる者たちとの生活の中で徐々に浸透したものらしい。

そしてその後、魔力放出と詠唱、武器による人々の集まったウィルス国と、魔族と意思疎通ができ、魔力と抜群の相性で魔法の礎となった古代文字にて魔法が使える人々が集まったミカド国とを作り上げたという。

それからは案外お互いうまくやっていたようだが、あるときできた赤い月によって狂う人間や魔族がはじめ、魔物と化したという。国同士の戦争はないが、本能のみの野獣と化した魔物は現在も結構危険なものであるようだ。

姫や姫の従者、侍女さん方は守りの魔法特化であり友魔もやはり守りに長けたものが多いらしいので専属魔導師にちょうどいいようだ。それからオベロンさんや、ティターニアさんが言うには自分の魔力はそういった守護や火や水、風といった色というか特化の特性はなく、どうも原始魔力に近い、傍にいて気持ちのいいものらしい。自分が持つて生まれただけの能力ではあるがほめられるとうれしい。

そういつた魔力特性もあり友魔からの友好的感情を姫も王妃も感じたようにミカド国の歴史講義も和氣藹々とした雰囲気に進んだ。それからついでに知ったんだが、王族以外に苗字は持たず、苗字を指すものは役職が住んでいる地区らしい。

美人に囲まれて楽しい時間を過ごしている。従者侍女など専属系のお仕事の人は王族であろうとほとんど家族同然に扱われるらしく、お互いだいぶくだけた話し方になってきていた。従者が主の地位をかさに立てる犯罪もあるにはあるらしいのだが、そういう人を見抜く眼を持つことも主としての格なのだという。それはなかなか地位のある人にとっても難しいことなのだそうだ。

だが、格どうこうよりも。美人2人と美形の妖精にかわいらしく「よろしくね。」

などと言われようものなら「こちらこそ」と、問答無用で口に出しても不思議ではない。いや、美人のお伺いには逆らえないだろう、実のところ。

ついでに先ほど自分の部屋になるだろう所へ案内してもらった。先ほどの浴衣のようなものは現代で言う所のバスローブのようなものらしい。出してもらった服はありきたりなシャツとズボンだった。

と、扉の向こうからバタバタと走る音がしてきた。どうもこの防音魔法、中から外に防音し、外の音は聞こえるという優れものらしい。これは魔法が使えるようになっていたのかも。

バタン！

扉が開くとダンディーな紳士とイケ面な青年が息を切らせて入ってきた。2人はオベロンとティターニアの差し出したお茶を勢いよく飲み干し一息ついた。二人は異口同音に

「大丈夫だったか！？心配したぞ！」

ユリカさんは微笑んでうなずく。

「そうか、よかった。」

一人暮らしの長かった自分には盆と正月しかなかっただけで家族団らんだ。王族とはいえ、厳しいだけではないのだと思わされる。いや、王族で人々を守らねばならないからこそより家族を大事にするのかもしれない。

そんなことを考えつつふと何かを感じて扉に目をやる。何かでかいものがある。しかも2頭！

それらはのそりと部屋に入ってきた。ぶつぶつ言いながら。

「主、王族たるもの常に威厳を持たねばならぬよ。」

「そうとも。廊下を走るなどもっての他。姫の無事は先に伝えてあったのだから。」

最初に声を発したのは所々から銀色の炎が揺らめいている大きな虎。次は蒼いたてがみをもつライオンにも似た狼。

「もしかして白虎とケルベロス…？」

2頭がこちらを向く。不思議なことに恐怖はなくとても神聖な感じだった。

「いかにも、我は白虎。隣はケルベロス。我は王、ケルベロスは皇太子の友魔として共に歩むものである。」

「樹 大介です。」

ティターニアやオベロンの妖精族の人当たりのよさそうな感じと違い、2頭とも威厳がある。どちらがいいとか悪いというわけではない。性格もあるだろう。

「そうか、姫や王妃と誼^{よしみ}をむすんだからには我らも友となろう。今後ともよろしく。」

途中からいきなりくだけた言い方になったのはケルベロス。実際に見ると感慨深いセリフと共に口の端を上げる。白虎も隣でうなずいている。

受け入れられたってことでよいのかな。ありがたいことではある。きっかけはティターニアやオベロン、原始魔力に似た自分の魔力のおかげもあるだろうけど、こんな関係を壊さないよう仲良くしていけたらと思う。

そうこうしているうちに、ツバキ王妃に促された王と皇太子がこちらに向かい声をかける。

「ユリカを助けていただいたと聞いた。感謝する。余がミカド国王、サンカイである。」

「同じく皇太子シンと申します。姉のこと、ありがとうございます。た。」

字面ではわかり難いが、満面の笑みをたたえていて、とてもフレンドリーだ。よほど家族を大切にしているんだろう。姫の婿話がなくなったことで安堵しているのもあるだろうけど。

「いえ、たいしたことは。」

「そんなことはないぞ、ダイスケよ。ミカド国の全ての大人は友であり、全ての幼子是我が子である。魔物や作物不足、病気などで亡くす命もある中で、自分と血のつながった家族以外を助けてやるためにはそれだけの力がいるのだ。」

「そうですか…。体ひとつでこちらに落ちてきたのですが、こちらこそユリカ様とツバキ様、それに友魔方にも少なからずよくして頂いて本当にありがたいことだと思っております。」

王は笑みを深めつつ家族を見渡した後、口を開く。

「そうか、ユリカもおてんばだと思っていたがなかなか…。」
視界の端に頬を膨らませたユリカさんが見えた。

「まあ、余もシンも家族と思い気楽にして欲しい。余は仕事のせい

かこのような物言いしかできぬのが心苦しいが。公の場以外では様をつけるのもできればなくして欲しいものだ。家族で様付けはないだろう。」

「ありがとうございます。サンカイさん。シンさんもよろしく願います。」

「こちらこそダイスケさん！」

「じゃあそろそろお昼にしましょう。」

と、ツバキさんが言う。みんなそろそろと扉から出て廊下を歩いていく。食堂に向かうようだ。道中とりとめのない話をしていく。ふと魔法の話も出て、午後にはシン君が見せてくれるそうだ。何か自分が身を立てることができきっかけでもつかめたらいいなと考える。

通された食堂は20人ほどが入れるであろう、少し城には似合わないと感じるこじんまりとした所だった。聞けば城に住み込む人々、王族を含めた人たち専用とのことで納得する。国王一家が入ってきたことで中にいた人々も姿勢を正す。いくら家族同然とはいえ、きちんとけじめはつけているようだ。

王が所定の座に着く。話はすでに通っているらしく自分の席もあった。こっそり見渡して見れば召喚の折に近くにいたユリカさんの従者の方々も見受けられる。

「さて、食事の前に一言ある。知らなかったものもいるだろうが、

こつそりとユリカが召喚を行った。」

一斉に食堂がどよめく。中には早とちりしてこちらを殺気のこもった目でにらんでくる男もいる。召喚と言えば婚姻であるためだ。まあ、愛情の裏返しなのだろう。

「だが、どこで知られたのか妨害にあい、ティターニアを失いかねない所だった。」

とたんに皆の顔色が悪くなる。

「だが、ここにいるダイスケが妨害により飛ばされたティターニアを見つけ守り助け、なんとかティターニアは無事だった。」
皆が安堵のため息をもらす。

「そこでダイスケには今しばらくここにとどまってもらい、ユリカ専属魔導師としてつとめてもらうことになった。」

何人かがピクリと反応する。察するに王城の魔導師だろう。他の人と違い友魔がいないように見える。先ほど聞いた話では生まれついて友魔がいない人もおり、そういう人は総じて魔力が高い傾向にあるらしい。魔力が高いということは色々な方法で魔法を試すのに都合がいいようだ。魔法耐性も高く失敗、暴発しても怪我をしにくいんだとか。

「召喚の妨害を行った人間は禁忌に触れるため、なんとしてもとらえなくてはならん。何か心当たりのある者は知らせてほしい。」

全員が決意をこめた視線を王に送る。家族同然というのはあながち間違えではないらしい。

「では食事にしよう。いただきます!」

「「「「いただきます!」」」」

なんというか子供発祥文化ということをどこかで否定していた思いがきれいに霧散した感じだった。この国の人々は無垢なる故に魔族とも心を通わし、無垢なる故に他人でも家族たることができるんだろう。家族ですらいさかいを起こすすさんだ人もいた自分の元の世界に少し悲しさを感じると共に、このきれいな世界を守るために、あるかどうかも分からないちっぽけな自分の力をどう使っていったらいいのか、しっかり考えていかなくてはいけないと思った。

第3話 お昼と午後 必要最低限

昼食は大家族の団欒を見ているようだった。シン君は多少好き嫌いがあつらしく、周りから、

「シン坊や、これもちゃんと食べないと。」

といわれ、人参やピーマンなどがお皿に盛られている。

ユリカさんは20代になつてダイエットでもしているのかさつきからサラダしかつついていない。結局、

「お嬢、野菜ばかりじゃ胸は大きくならないよ！」

などといわれ牛乳のようなものをコクコクと飲んでいる。

自分も配膳物に少しずつ手をつけてみる。

ご飯、米だ。玄米っぽい。味噌汁、味噌が廃れてなくてよかった。子供文化でどうやって再現したんだろう。それに醤油も。何か外国人向けに作る方法が書いた資料でもあつたのだろうか。

ツバキさんに聞いて見るとどうもそうらしい。調味料は他にも塩、砂糖など、基本的なものはあるみたいだ。唯一牛乳に見えたものは豆乳だったっぽい。これで食事にはそんなに困らないですむと内心安堵する。酒は気になるが、味噌や醤油があるならそれなりに期待できるのではないかとも思う。そして心身ともに元気に生きていくうえでおいしい食事というのは重要だ。

もしかしたら一般人の食事はもっと味気ないのかもしれないが。ユリカさんに聞いて見るとそうでもないらしい。砂糖をふんだんに使

ったお菓子など、城から出た折の楽しみにもしているそうだ。そして食事に不満がなくなってくるとひとつ気になることが見えてきた。

箸の使い方がなっていないのだ。

これは気になる。自分が日本食の完璧な作法を知っているかと問われればそれは知らないといかないだろう。だが彼らはあまりにもお粗末過ぎた。握り箸はおろか左右で一本ずつ箸をもち食事をしていたりするのだ。こ

れはだめだ。王や王妃はかろうじて箸としての体裁を保っているが、ユリカさんやシン君などは幼稚園児の食事風景とかわらない。もしかしたら口うるさいと思われるかもしれない。しかしきれいに装飾の施された箸がいかにもかわいそうだろう。

意を決して王に言ってみる。

「王…、ちよつといいですか？」

「なんだ？かしこまって。」

「王妃様方もです。言にくいことですが、箸の使い方がなっておりません！」

「そうか？気にしたことはなかったが。」

「そうです！せっかく美しく作られた箸もそういう使い方ではないてしまいます！正しい持ち方はこうです！」

左手を掲げる。そう、自分は左利きなのだ。興奮しているのかだんだんと口調がかしこまらなくなつてゆく。

「俺は左利きなので左手ですが、鉛筆を持つように1本を持った後、人差し指の付け根にもう1本を置き薬指でささえ、親指と人差し指と中指で持った1本を動かし食べ物をつかむんです！」

内心ではピカーっと左手にスポットライトが当たっているイメージだ。だが王が茶々を入れる

「エンピツとは何だ？」

そうか、鉛筆は存在しないのか。ちよつとがっかりしつつ、前にツバキさんが古代語を書いて見せてくれたことを思い出す。

「筆のことですかいいません。」

そうか、とか、ふむ、と言ったことばがあちこちから聞こえ、皆手元で箸と格闘している。

さすが純粋な人たちだ、瞬く間にそれなりになつてゆく。ユリカさんやシン君などは若いためかすでに違和感のない使い方をしている。オベロンやティターニアをはじめとする人型の友魔も練習しているようでどこかほほえましい。というか友魔の食事はどうなっているんだろう。

すでにきれいな持ち方になつているシン君に聞いてみたところ、主との魔力のつながりさえあれば別に食事は必要ないらしい。魔力が世界を形作っているここでは友魔でないものは食事が必要になるが、木の実などで十分まかなえるらしい。ただ魔物は欲望のため他者を

虐げ、その時の苦痛や恐怖などの感情を喰らい生きているとの事。魔物とは魔族にとっても相容れない存在のようだ。

ひと悶着あった、というか起こしたが、楽しい時間だった。

昼食を終え、サンカイさんを除く3人が運動場のような場所に集まった。サンカイさんはまだ政務から離れられないらしい。ここに来て初めての屋外だ。城の向こうに見える、頂上すら全く目視できないほど高い山が目につく。フジサンというそうだ。

いやいや、富士山はあんなに高くないから。それに自分の記憶の中にある富士山と違い、裾野がほとんどない。山というより塔のようだ。また調べたいことが増えたと感じつつ、ついて来たツバキさんとユリカさんを見る。

ツバキさんもユリカさんも守りや回復系魔法を使う人たちだ。一般の魔術に近い攻撃や、状態変化系の魔法とは難度が格段に違うらしく、後回しとした。もし通常の魔法すら使えなかったら、上位のものを勉強しても使えないということになるし。しかしなぜここにいるかと問われれば、シン君がどれだけ上達したか見学のためらしい。

シン君の額に一筋の汗が流れる。

「では、ダイスケ兄ちゃんは魔力があることは分かっているので実際の使い方から説明するよ。」

昼食時に結構話ができたせいで呼び方がダイスケ兄ちゃんにかわっていた。箸のレクチャーをしたのもよかったのかもしれない。姉であるユリカさんになにかを教わる時では少しでもできないとすぐにゲンコツが飛んでくる、とユリカさんに聞こえないようにぼやいていた。ティターニアとケルベロスは苦笑していたが。

「えっと、指先から魔力をだして丸を描き、その中に古代文字を書く、そしてその丸を魔法を打ちたい方向に向かって突く。おわー」
終わり。といったかったのだろうその瞬間、ツバキさんとユリカさんから壮絶な視線が届きシン君を黙らせる。確かにわかるんだけどちよつと端折りすぎている気がする。

「シン、あなたねえ…。」

「もう一度老師のところにいれないとだめかしら。」

ユリカさんとツバキさんもガツカリ感全開で感想を言う。特にツバキさんの老師うんぬんのセリフはシン君も堪えたようだ。母親と姉VS弟の口喧嘩が始まりそうな勢いだ。

「まあまあ、ではシン君、ちよつとやってみてもらっていいかな？」
建設的でない3人のやり取りに割り込みつつ言ってみる。

「…わかった！じゃあやってみるね！」
2対1の絶望的な勝負に臨まねばならない状況がなくなってきたきつかけに飛びつき、元気に答え、左手人差し指から魔力を放出する。見えないかと思ったが、現在落ちてきた後魔力体となっているせい

か魔力の動きが見える。

シン君は魔力で15センチくらいの丸を描く。丸を描いた後、いったん魔力放出を止め、丸の中心付近に火の文字を描く。…なんとうかやはり書き順や文字の形が適当すぎる。左手だからだろうか。ちょっと気になる。

その後ちらりとこちらを見、確認をしたのだろう後に丸を拳で貫いた。

ボツ

1メートルくらいの火が出た。

「へえ、シンにしてはなかなかやるじゃない。」

ユリカさんから賞賛の声が上がる。普段のシン君は成功率が半々程度らしい。シン君はうれしそうにしていたが、傍らでケルベロスが10メートルに届きそうな炎を出すのを見せ付けられてしゅんとしていた。確かに戦いでは1メートルの火ではどうにもならないだろう。

俺はいくつか手順などの確認をしたかったので訊ねてみる。

「丸を描いた後と古代文字を書くまでの間は魔力は止めないといけないの?」

シン君はうなずく。つなげてしまうと古代文字の認識がうまくいかないらしい。一筆書きがあまり文字に見えないのと同じだろうか。

「丸や文字を書くときの魔力量を変えると何か変わる？」

威力が変わるかと聞いたら首を傾げられたので言い方をやさしくしてみた。変わらないらしい。いかに早く書くかが戦いで求められるようだ。

「では丸の大きさは？」

これが結構な問題で、自分自身に内包する魔力量より小さい分にはかまわないらしいが、限界近いと気を失うほど疲れ、それを越えると発動しないらしい。連発するなら小さめ、一気に決めるなら大きめ。ただ大きい分には多少描く時間もかかる。そしてそれに付随するもうひとつの注意点として、円を打ち抜く格好を保っている間は放出し続けるということ。自分の魔力量もそれなりに体で覚えていかなないと、結局気絶なんてこともあるようだ。

「じゃあ俺は魔力を出したり止めたりすることができるか試してみるね。」

シン君にとってはある意味最初の自分の生徒だろう、目をきらきらさせながら見守ってくれている。ツバキさんやユリカさんは興味深げだ。ユリカさんに仕事は？と聞いたら政治はお父様に任せておけばいいのよとあっけらかんに言ってくれた。友魔もいるんだし、よほどのことがない限り女性はお口出ししない方向らしい。その分シン君は皇太子として将来のための勉強に結構忙しいらしいが。

さて、魔力のオンオフを練習してみる。オンオフ自体は難しいことではなかったが、魔方陣、単に丸に漢字を書いたものをそう呼ぶのであればだが、それを描くための理想的な魔力量を把握するのは少

し時間がかかった。

「多過ぎですわ!」

「今度は少な過ぎますわよ。」

などと特に魔法の系統と発現方法が違うであろう女性陣からのお声が多い。どうしたものか。

さてそれでも何とか及第点をもらい、実際に試してみる。

やはり15センチくらいの円にしてみることにする。後で半分や倍のものも試してみないといけないう。

そして右手で円を描く。中には書き順も形も正しく火と書いてみる。さて発動と思いながら3人を見るとなぜか怪訝な表情だ。まあ後で聞けばいいかと思い拳で円を打ち抜く。

ポウッッ!

3メートルくらいの火が出た。初めてにしてはなかなかじゃないかと思ひながら3人を見るとなぜか固まっている。

「あれ?」

思わず首をかしげ聞いてしまう。

「ダイスケさんっ!なにをしたんですか!？」

ツバキさんのすごい表情に内心後ずさりしつつも質問に答える。

「特に何も...。」

「そんなはずはありません！火の文字でのあの大きさの丸の魔法であんな火が出るはずがありません！」

「どうやらすごいことらしい。ならば少し気になったことと、シン君のやり方と違いが出たことを説明してみる。」

「ええと、左手で文字を書くことは悪くはないのですが、もともと日本語、いえ古代語は右手で書くことを基本としています。文章も右からが多いですよね？」

ツバキさんは何かを考えながら答える。

「解読できた古文書は右から左へと書いたものがほとんどです。わたくしも手紙などはそう書きます。ただ墨の乾くのが遅いので左手で文字を書くのです。書きながらこすってしまうのは困ってしまうので。」

なるほど、ひらがなしか読めないなら横書きのものはとっつきにくいだろう。自然とひらがなの多い詩などの右から縦書きのものが多く解読できたのかもしれない。鉛筆も知らなかったことだし、墨が手につかないように文字を書くなら左手の方が楽なのかもしれない。すると自然と漢字やひらがなの横棒の書き方は力入れ具合から考えても右から左へとなるだろう。ならば左手であろうが魔力なら手は汚れないし、ちゃんとした書き順を教えた上でシン君に試してみよう。ちよつとシン君と相談する。

「ねえシン君、火の文字だけど、こういう風にかいてもう一度やってみてもらえる？」

「すぐ書きにくいけど何か違うのかな？形も何か違うし。」

「それも含めて試してみたいんだ。同じなら同じでいいし。」

「ん、わかった。やってみる。」

頭の上にいくつか疑問符を浮かべながらであったが先ほどと同じように魔方陣を描くシン君。多少形は崩れているようだが先ほどよりはよほどきれいだし書き順もあっている。

「えいつ。」

ボウッ！

先ほどの俺よりも多少小さいが、それでも2メートルを越える火が円から伸びている。

「わあっ！」

「おお！」

シン君が興奮した表情で俺を見、俺は微笑みで答える。母娘は固まっている。友魔はシン君の急成長に目を瞠っている。特にケルベロスは自分のことのようにうれしそうにしているように見える。

「わかってきたよ、シン君。少し魔法の質が見えてきたみたいだ。じゃあ少し試したいことができたからちよつと離れていてね。」

シン君、先ほどの些細な情報での自らの魔法の急激な成長を一番感じ取ったのか大して離れていない所で興味深々だ。なんとか立ち直った母娘もじつと見つめている。友魔は言わずもがな。

「よし、では火の系統で3つほど試すよ。」

円を描く。大きさは先ほどと変わらず。炎と書いてみる。そして打ち抜く。

ゴウ！

さつき見たケルベロスの炎並みだ。10メートル位の炎が出た。

「じゃあ、次。」

すでにユリカさんも興味深々だ。ツバキさんは今後や政治に絡めて考えているのだろう、少し難しい顔をして眺めている。

円を描く。今回は火炎だ。打ち抜く。

ゴーーーーー！

長い！いや炎の長さでなく放射時間が。てつきり火が大きくなるかと思ったが時間とは。打ち抜いている時間以外に魔法発動時間が変わるというのはちょっと面白いかもしれない。

「では最後。」

すでに3人とも興味深々だ。年長者になるほど興味を抱かせるためにより大きな事実が必要なのが見ていて面白い。

円を描く。焰と書いてみる。打ち抜く。

ドンッ！

火の玉がえらい勢いで飛んでいった。向こうの石壁で止まり数秒燃え続けた後消えた。これは確認しておくべきことがひとつ増えた。そう、連射が効くのかどうかだ。

「ごめん、もう一回。」

円を描く、焰と書く、円を打ち抜いたままにしてみる。

ドンッ！

同じように火の玉が飛んでいき石壁を焦がして消える。あれ、てつきり連射だと思ったのと思った直後に、

ドンッ！

2発目が飛んでいった。3発目まで見て、どうやら燃え尽きるまではきちんと魔力を消費していて、それが無くならないと次弾が出ない仕組みのようだ。水や氷相手なら炎が消えるまでの時間は短いだろうし、有効的かもしれないと感じつつ3人を振り返る。

「「すごい…。」」

ツバキさんとユリカさんの反応だ。シン君と言えば、

「ダイスケ兄ちゃん！僕にも教えてよ！」

まあ気持ちはわかるけど。ただ、抑える所はきちんと抑えておく必要がある。

「シン君、ツバキさんやユリカさんも。これは確かに強力です。俺に言わせればほんの些細な知識が簡単に今まで以上に強いものに変化してしまう。最低でも一般の方たちがこの力を守る技を身につけるまではこの力を広めるわけにはいきません。」

ただの火なら多少強くなってもやけど程度で済むかも知れませんが、それ以外は命にかかわってしまいます。ですのてただの俺の興味からこんなことをしてしまいました。しばらくは内緒でお願いしま

す。」

シン君ですらいくら若いといっても王族だ。これが防御策もないまま広まった場合の最悪の状態は想像がついたようだ。人が人を殺めてしまうことがより多くなってしまうだろう。3人とも少し硬い表情でうなずいた。

「まあ、いい方向に考えましょうよ。これだけ攻撃魔法が強くなるなら、守りや回復の魔法もよりよくなるかもしれません。そうすれば魔物相手に亡くなる人も怪我をする人も減るでしょうし、そう悪いわけではないと。」

「そうね。力を借りるわよ、ダイスケ君。」

「よろしくお願いします、ダイスケさん。早速明日からは私の回復魔法を勉強しましょう!」

「姉ちゃん、僕も!」

「シンは他にも勉強があるでしょ!」

「姉ちゃん、さっきはこんな顔してびっくりしてたくせに!」
ぼそっ

「何ですって?」ばかりっ

「イテッ。よくもやったなあ!」

「こらっ!あなたたちっ!」

「はあゝい、ごめんなさい。」

きやいきやいとはしゃぐ姉弟を見て和みつつ、自分がこの世界でできそうなことがあることを実感しながらゆっくりと日が暮れていた。

第4話 酒と団樂

辺りも薄暗くなり、城の通路を仕事で行きかう人々もランプのようなものを手に持ち移動している。基本この国の人々は暗くなれば眠る生活のようだ。

もちろん夜勤の門番や城下町の一角の夜の町や酒場のように夜こそ仕事時という人もいるという。またこの地に慣れてきたら食事どころや酒場めぐりもしてみたいなあ。

そしてお昼時と同じ食堂に着いた。これから夜勤であろうか装備を整えた兵士と彼らの友魔が、朝ごはんと言うのも語弊があるが食事の中だった。王もすでに軽い食事を始めており、そんな兵士たちに激励の言葉をかけている。

「あ、サンカイさん。お疲れ様です。」

「うむ。魔法はどうだったのだ？白虎からは怪我等もなくそれなりにうまくいったとしか聞いておらんのだ。」

「一般の町の皆や魔族の方たちに安全が確保できるようになれば本格的に力を入れるつもりです。」

「そうか、見てみたかった気もするのう。普段はこんなに忙しくないんだが、ユリカの件が解決しないことにはなんともものう。」

ユリカさんの顔が一瞬翳るが、ツバキさんとシン君の気遣わしげな視線と言葉を受けて多少落ち着いたようだ。

「そうですか。頑張ってくださいとしか言えないところに歯がゆさを感じますが頑張ってください。ユリカさんもティーターニアも無事だったんですし俺も魔法なんてすごいものが使えるようになりました。」

この世界もなかなかいいところだと思っ
ていますから気にしないで
ください。」

ユリカさんも明らかにホッとしていた。
どうも俺の心配をしてくれ
たようだ。ありがたいことです。

「さて、立ったままなのもなんだし、
お夕飯にしましょ。」

ツバキさんが明るい声で促してくれた。
席に着く。夕飯は昼食とは
違い、全員一緒って訳ではないようだ。
バイキング形式で夕飯くら
いは好きなものを好きなだけということ
みたいだ。今日も一日生き
て過ごせたことを喜び、明日も頑張
ろうということらしい。

ふと食事を取りにくい傍ら、ガタイの
いいニイちゃんの集まりのよ
うなところに目がいく。魔力を魔法の
練習により感じ取れるように
なったので魔力が高いのが見て取
れる、席について軽くつまみなが
らユリカさんに聞くと、

「彼らは魔導師です。友魔をつれて
いないでしょう。」

「なんで体格いいんだろう？」

「友魔に助けてもらうことができ
ませんからね。その分魔力が高い
のは当然として、友魔のいない人は
幼少より運動能力も高いのです。」

「差別とかいじめはないの？」

「友魔がそんなことは許しません
から。魔族にとっても友魔なしで
この世界を生きていける魔導師に
興味を持つらしいのです。」

「古文書とは別、私たちの祖先の
記録によりますと、召喚が始まる
より前、人型の魔族と子を成せる人
がいたそうです。そうして魔族
の血も人の血もだんだんと混ざり合
っていったそうです。私の緑の
髪も風の系統の魔族属性を帯びて
いるためだと考えられています。」

「へえ、じゃあ、ツバキさんとユ
リカさんは風の緑髪ってわけなん

だ。サンカイさんとシン君の紫髪はどんな系統なんだろう？」

「紫の髪はなぜか王家にしか出ない色らしく、歴代の王は紫の髪だったと聞いてます。」

ああ、日本の神聖色が紫だったこともあるからその影響もあるかも。続けて聞いてみる。

「風系だからツバキさんもユリカさんも友魔が妖精族なの？」

「自分の魔族系統と友魔の種族はあまり関係ないようです。事実侍女の友魔に妖精族でない方もいますし。わたしの友魔がティーターニアであるのは母様の友魔がオベロンであることが関係しているみたいです。それに友魔も人と子を成せる種族の方がより相性が良いのか人型が多いです。父様とシンの白虎とケルベロスはかなり珍しいみたいです。」

「そうなんだ。ところで魔導師さんは皆赤い髪だね。」

「はい、赤い髪は人の中でもより魔族に近いと出るようです。親から子というわけでもないようです。ただ魔族にしてみれば、昔の魔族と人の子と重なるようで、とても友好的なようです。」

「それで魔力や運動能力が高いのか。そういえば人や魔族って寿命は？」

「人の外見は20歳ほどまで成長し、後は何事もなければ200年ほどで寿命がきます。」

「すごいな。魔族の血かな。自分のところでは60過ぎたらもう老人の域に入っていたよ。魔族は？」

「外見は生まれたときから変わらず、魔力や力に応じ、数十年から数百年生きた後土に帰るそうです。その後眠りにて魔力を溜め、また変わらぬ姿で現れるとティーターニアやオベロンに聞きました。」

「もし召喚でティーターニアが消えてしまっていたらどうなっていたんだろう。……あ、ごめん。」

ユリカさんの表情から聞いてはいけなかったかと思ったが、つい口から出てしまった。言った直後に後悔した。これは独り言の癖も直

していかないといけない。

「大丈夫です。ティターニアも無事でしたから。」

ティターニアもうなずいて答える。

「ダイスケのおかげ。今生きているんだから気にしちゃだめよ。でももしあそこで消えてしまっていたら、ユリカの生きている間に戻ってくることはできたかは微妙ね。そしてダイスケの世界で消えてしまったとしたら、こちらで復活することはかなわなかったでしょうね。」

「うわ、結構ぎりぎりだったんですね。お互い今元気でよかったですねぇ。」

「そうね、ダイスケの魔力のおかげで助かったわ。それからさっき気がついたんだけど、ダイスケから香る魔力の質は私たちの父たる存在の魔力に似ているわ。」

オベロンや白虎、ケルベロスといった王族の友魔のほか、侍女さんたちの友魔もピクリと反応する。

「ほんの近くにいないとわからないかすかなものだけど。父様の匂いがする。」

少し離れているが

自分の腕の匂いをかいでみる。風呂から落ちてきてまだ一日たっていない。臭くはないはずだけど…。

と、気がつくともわりにわらわらと友魔が集まってきていた。侍女さんたちの友魔は白虎、ケルベロスから少し離れているが怖いのだろうか。まあナジャやネコマタ、リリムといった中級では仕方ないのかもしれない。でも俺が中級とか言っではいけないか。みんな家族なんだし。

…こちらの常識に合わせて反省することが多いな。

そんなことを考えていると白虎やケルベロスが俺の両太ももにあごを乗せて目を閉じている。オベロンも俺の肩に手を乗せている。リリムは翼で浮きながら俺の頭を抱えているし、腰の辺りに両側からくつついているのはナジャとネコマタか。ちよいメタボを気にしているので腹回りに手を回されると少し恥ずかしい。ま、子供っぽい外見に合わせ、子供のことだからとあまり気にしない方向でいくことにする。

みんななんとなくほんわかしている。俺には友魔はいないし、まだ友魔の感情を読むことはできないけれど、イメージとして縁側で日向ぼっこをしている感じた。

「うむ、父の傍らでゆっくりと穏やかに暮らしていたことを思い出す。」

「ええ、父がいるようです。」

白虎が言い、オベロンが追従する。

「父とはどなたなんです？」

誰ともなく聞いてみた。

「とーさまはおつきいんだよー。」

「とても暖かいんです。」

ナジャとリリムだ。

「ひざの上でお昼寝するのは最高にゃ。」

椅子に座った状態で太ももの上に大きな2頭の頭があるものだから

ひざに乗れないネコマタはちょっと残念そうだ。

ここまで口を開いていなかったケルベロスがゆっくりと話し出す。

「我が一番一緒にいて、世界を共に回ったのだ。力の弱い同属や友の魔族を守るため、邪竜や幽鬼、魔王と戦った。終わりの見えない戦いではあったが、父のため、友のために戦うのは悪くなかった。」

とたんに白虎とオベロン、ティターニアも口を挟む。

「何を言っておるのだケルベロス、お前なぞいつも父の後ろで震えておったではないか。」

「それに白虎や私、ティターニアやラクシュミ、聖龍もいたではないですか。」

「ケルベロスがいつも一番怪我してたよね、無茶するから。私やラクシュミも困ってたんだよ?」

ついつい笑いが出る。ケルベロスが抗議的な視線を向けてくるが、笑いの衝動がなかなか収まらない。

ケルベロスは咳払いをしてさらに話す。

「父はみな言うとおり、暖かく大きくやさしい太陽のような方だった。とある理由ではっきりと名を言えることはできないが、我らの父だったのだ。」

「すごい人だったんだね。今はどこに?」

聞いてみるとオベロンが口を開く。

「私がこの中では一番再構成の眠りにつくのが遅かったので少しだけ知っています。」

窓の外を指差しさらに続ける。

「窓の外、月が2つ見えるでしょう、半分ほどの小さな方が赤い月です。赤い月で狂ってしまう同属や友はその過程であの月がだんだんと赤くなって見えてくるそうなのです。魔族は完全に化する直前か死の間際の思念によって、人は日記などによってわかってきたことです。完全に自我をなくし魔物に堕ちると目も赤く染まります。そして父はその月の影響が無視できなくなり、魔族、人の区別なく友や配下が狂っていくことにとても心を痛め、彼ら全ての父として原因と対策を調べるためにどこかにこもったと聞きました。本当に詳しい話はフジサンに居を構え、父の後、魔族を束ねる聖龍をはじめとするの竜族に聞かないとわからないでしょうが。」

「へえ、竜かあ。一度見てみたいなあ。」

「いずれ行く機会もあるといいなあ。まだまだ自分を守る術すらできていないからだいたい先のことになるだろうけど。友魔たちとふんわりとした空間を作り、当時の笑い話などでほのぼのしてみる。先ほど自分たちが会話に上がり聞き耳を立てていた魔導師衆も、突然始まった当事者による歴史談義に耳を傾けていた。古語研究なら歴史にも造詣が深いのだろう。」

と、そんな友魔との団欒に乱入してきた影が2つ。

「ちょっと！ティターニア、いつもはあたしにお小言ばかりなのになんなの、その幸せそうな顔は！」

「そうだよ、ケルベロス！いつもはおつかないくせにほにやほにやしちゃってさ！」

見るとユリカさんとシン君が浮気現場を見つけた伴侶のような形相でにらんでいる。よくよくあたりを見てみれば、友魔の相方さんは苦笑しているか少しくやしそうな顔をしている。自分の友魔を取ら

れた感じがして、嫉妬してるんだろうか。

ユリカさんも地が出ているのかいつも以上に幼い感じがする。2人とも俺の感覚ではそれなりに大人に近く見えるのだが、どうもまだ子供のような感じがする。

苦笑しつつ少し俺と距離を距離を取る友魔たちに安堵と少しのさみしさをない交ぜにした感情が浮かんでくることに不思議な感じを受けつつ、さらに爆発しかけない2人をなだめにかかる。

「ちょ、ちよつとユリカさんもシン君も。もう長いこと会っていない大事な人に似たものを持つている人に会ったらそれは昔を思い出しても仕方ないじゃない、ね。」

「でも……。」

ユリカさんとシン君がぶーたれる。

「えっと、オベロン、その父さんと別れたのはどのくらい前？」

「約2000年、正確には2067年です。その間に私が再構成の睡眠に入ったのは2回。再構成時に夢を見ることがあるのですが、目が覚めたときに父がいなかったことにとても落胆したことを今でも覚えています。」

オベロンが間髪いれず答える。それを受けてさらになだめにかかる。

「ほら、父さんがどこかに言っちゃってしまつて、2000年もさみしい思いをしてるんだから。ちよつとは大目に見てあげてよ。」

2人は、

「うーん……。」

あまり納得できないようだ。と、そこにサンカイさんから一言入る。食事は終え、何か小さなコップを持ち、何か飲んでいる。

も、もしかして、酒か？酒に目のない俺は「ピキーン！」とひらめ

きが走った。サンカイさんの話を半分くらいしか聞いていなかったのは内緒だ。

「2人とも、もう幼子ではないのだからあまり困らせてはいかんぞ。いくら友魔とはいえ、ただ自分と共にあゆんでもらおうなどと考えるてはいかん。余たちに合わせてくれているが、友魔にも友魔の感情も記憶もあるのだ。シンも来年は大人の仲間に入り、ユリカも婚姻できる歳になったのだ。そろそろ大人の付き合いも覚えるべきかもしれないぞ?」

「はい。」

2人は神妙にうなずく。そういえば正確な歳を知らないな。聞いてもいいのだろうか。

「あの、シン君とユリカさんっていくつ?」

2人はそれぞれ答えた。

「僕は14歳だよ。」

「あたしは17になったわ。16を過ぎたら召喚の資格が得られるの。」

驚いた。シン君でこそ最近の言動で中学生くらいのイメージが定着してしまっているが俺の感覚で高校生くらいには見えるし、ユリカさんなど20代だとばかり思っていたのだ。

「ええっ?若っ!」

つい口をついてしまった。なんかユリカさんの方から刺すような視線を感じる。だから独り言を口に出すなどさつき反省したばかりだろ、何やってんだ、俺。

視線の強さを変えずユリカさんが聞いてくる。

「ダイスケさんはっ、あたしのことっ、いくつだっ、思ったんですかっ!？」

かなり怒っていて怖い…。言葉の途切れ途切れの合間にテーブルをたたくかの勢いでぶんぶん腕を振っている。そのせいで余計幼く見えてしまうが、女性に歳の話はご法度であることはどこの世界でも変わらないようだ。

「すみません、20代だと…。ついでにシン君は17〜8に見えました…。」

「あたしまだぴちぴちの10代ですっ!」

ぴちぴちなんて向こうでは死語だと思ったがさすがに口に出すわけにはいかない。つい周りを見渡してしまいツバキさんと目が合った。笑顔だったが目が笑っていなかった。

向こうの世界を思い出す。当時27の女性と付き合っていた折、誕生日間近で「30までまた近くなる…。」などと言っていたが、それに対して「大丈夫、女性は25過ぎたら誕生日がなくなるから歳を取らなくなるんだよ。」と言って一瞬うれしがられ、その後の「だから誕生日プレゼントもなしね。」と言ったらひっぱたかれたいやな思い出がよぎる…。歳は取りたくないけど誕生日プレゼントは必要とかなり理不尽だと思ったものだ。

「じゃあダイスケ兄ちゃんは？」

こちらは背伸びしたい年頃であろう少し気をよくしたシン君が聞いてくる。

「35になりました…。」

まだユリカさんの視線がおっかないままなのでぼそりと言う。

「『『『『ええーっ！？』』』』」
「え？え？」

ものすごくびっくりされた。ついでにまくし立てられる。とくに女性から。

「なぜ、そんなに若い外見なんですか？」
ユリカさんだ。

「ダイスケ君、是非秘訣を教えて頂戴！」
これはツバキさん。

「『ありえないですわ。』」
そして侍女さん方。

その勢いに、

「必ず研究しますっ！そして必ずものにしますっ！……その魔導師さんと一緒に。」

部屋の一角で半分ニヤついていた魔導師さん方も巻き込む。俺同様女性陣から脅されてちよつと青い顔になってコクコクうなずいていた。どつちみち古代文字などは彼らと共同研究にするつもりだし、いいよね。苦労はみんなで分け合わなくちゃ。幸せもね。

そして恨めしそうな視線を向けてくる魔導師さんたちも巻き込んでちよつと有意義な古代文字談義でもしよう。それならプラマイゼロで見えてくれるだろう。と、その前に、と。

「サンカイさん、それ、酒ですか？」

そうだ、この場所が一番気になっていたものだ。

「そうだ、ダイスケもやるか？ここでは30歳を越えないと酒は飲めないことになっておるのだが、ダイスケは30を越えておるよう

だしいいだろう。そこを見てみる色々あるぞ。余はこの米から作ったものが好きでな。」

「わたくしはブドウ酒が好きですよ。」
ツバキさんもいける口らしい。

「じゃ、お言葉にあまえて。」

酒の棚に行ってみると食堂のお姉さんが色々教えてくれる。日本酒、ワイン、麦焼酎、芋焼酎など結構ある。そのなかで一番目を引いたのが麦酒と言われたものだ。お姉さんのしゅわしゅわという表現でピンときた。これはビールだと！

早速それを大きな目のコップに注いでもらい席に戻り一口。

「ぬるい…。だが深い…。」

ビールというよりエールなんだろうか。ビールとエールの違いなど知らないのが適当だ。だが味わい深くてうまい。サンカイさんが飲み仲間を見つけたからかうれしそうに話しかけてくる。

「ほう、麦酒が好みか。まあ若い男に人気があるな。女性にはその苦さが少し敬遠されるようだが。」

「とてもおいしいです、…ただ、言っているのか…。」

ここの所発言での失敗を重ねてしまったため少し躊躇する。

「かまわん、言ってみろ。」

「それなら…。これだけうまい、麦酒ですか、飲んだのは初めてですが、もう少し冷やして風呂上りにぐいっといければもっとうまいかなと。」

とたんにまわりから「ゴクツ」と喉をならす音が聞こえる。サンカイさんも、

「ほう。確かにうまそうだ。瓶を泉にて冷やして明日あたり試して

みよう。」

乗り気だった。酒をただ飲むだけでなく楽しむ人に悪い人はいない。サンカイさんは残った酒をくいと飲み干すと、

「これで明日の楽しみもできた。民のための政治とわかつているが肩がこるのはどうしようもない。政治をないがしろにするわけではないが。明日の麦酒、楽しみにしているぞ。」

と前半は俺にこっそりと、後半は食堂のお姉さんに向けて声をかけ、白虎と共に出て行った。

「まだ少し仕事があるのよ。」

ツバキさんが言う。飲んで仕事していいのかとも思ったが、城下の有力者と話するのに酒が出、話の内容によつては酒もますぐなるそうなのでここでも少しでも楽しい酒を。ということらしい。うん、よくわかる。

さてと、早速2杯目の麦酒をもらいシン君を連れて魔導師の方たちの席に近づく。俺が近づくときさっきの件での恨めしそうな目を向けてくるが、文句を言われる前にこちらから話題を振ってみる。

「古代文字について少し相談があるんだけどいい？」

怪訝な表情をしていた3人だったが、年の功か結構な壮年に見える男性が表情を引き締め答えた。

「酒が入っていてもかまわぬ程度なのか？」
それに答える。

「多少は聞いているでしょう、俺はかなり遠い所から飛ばされてきました、もう帰られないほどの。いえ、そんな顔をしていたただかなくとも大丈夫ですよ。」

やはり根はいい人たちだ、氣遣わしげな表情を浮かべている。そして続ける。

「今日、シン君の火の魔法が、かなり成長しました。な、シン君？」
「うん、これくらいだったのがこんなになったんだ！」
手を広げアピールしている。

「そんなことが……。」

壮年の男性が驚いている。シン君は得意気だ。

「間違いありませんわ、老師。」

ツバキさんが援護してくれる。この壮年の男性がシン君の魔法の師匠なのか。そりゃあシン君も得意気になるのもわかる。

「ではその秘密を教えてくださいませんか？」

きつめだがなかなか整った顔立ちをしているが、大きすぎる丸めがねでなんとなく残念な印象を受ける青年が聞いてくる。

「それはありがたいですね。ここ数年は少し行き詰った感じもありましたし……。」

丸顔のおっとりした青年は笑顔で言っていた。

「やっぱり1人で出来る事にも限界がありますし。ただ、人々に対する防御策ができるまではあまり外に触れないようにお願いしたいのです。」

やはり問題は提示しておかないとね。

壮年の男性は納得したように頷くと、

「もつともですな。わかりました。ですが、その前に我らの紹介を。わしはジンと申すものです。」

「私はエン。」

これは丸めがね君だ。

「僕はフウです。」

こちらは丸顔おっとり君。

友魔のいない魔導師、みんな赤髪なので髪の色等で覚えられないが、わかりやすい特徴でよかった。こちらも自己紹介しておく。

「ダイスケです。よろしくお願いします。」

「じゃあ、早速聞かせてほしい。」

エンさんがせかす、結構せっかちなのかこの人は。

「その前に火の系統以外で使用している古代文字を教えてください。」

火以外は知らないからなあ。

わかったと言いつつジンさんが傍らから紙と筆を出す。やっぱり研究者ってどんな時でも大概筆記用具持つてるんだなと変に感心してしまう。

そして紙に描かれたのは水と風。結局火を含めたこの3文字しかまだ効果を発現できていないらしい。

シン君が何か言いたそうに口を開こうとしているが、ちらりとケルベロスに目をやればケルベロスは頷いてシン君を諭してくれる。先ほど俺が火の魔法を色々試したことを言いたかったのだろう。こういうとき人とながっている友魔はありがたい。口をふさいだり、小声で言わなくてすむ。あまりかんぐられたくないし。

文字もわかったことだし、紙と筆を借りて文字を大きめに書き数字を入れる。数字はアラビア数字だ。大人がいた頃、漢数字よりも先

に子供に教えていたようだ。後の算数のためにもアラビア数字の方がやりやすかったのだろう。

そして文字と共に入れたのは書き順だ。シン君はまだ幼い為に文字の形もいまいちだったが、さすがは魔導師、文字の形はこれといって違和感はなかった。

「これだけです。」

紙を返す。

「その数字は書き順といます。文字を書く順序です。こんな程度かと思われかたかもしれませんが、実際シン君にとっても効果が出ました。一度研究して欲しいんです。」

「うむ、わかった。明日から研究してみよう。」

さすがにジンさんだ。些細な変化でもツボにはまればすごいことをよくわかっている。

「ええ、お願いします。ただ、さっきシン君が言いましたように効果が飛躍的に上がるかもしれません。普段の実験の3倍の距離、広さで行ってください。」

「それほどか？」

「すごいわよ、きつと驚くわ!」

今度の援護はユリカさんだ。

「ユリカさんもああ言っていることですし、安全だけは注意してください。」

「わかった。」

ジンさんと共にエンさんもフウさんも真剣な顔で頷く。

「うむ、今日はよい日であった。姫やティターニア殿も無事であったし、魔法発展の機会も得ることができた。また近いうちに話し合いの場を持ってもらえるか？」

ジンさんが立ち上がりながら言う。俺も立ち上がりながら、

「こちらこそ。明日はユリカさんから回復魔法を教わることになってますので助言をいただけるとありがたいです。」
軽く会釈する。

ジンさんはそれを受けて、

「ならばサクラもつれてこよう。回復系なら彼女が一番だ。」
視界の端でユリカさんがちよつといやそうな顔をする。数時間前シン君がツバキさんに老師のところにもう一度入れると言われた時の顔によく似ていたのが可笑しい。

「そうですか、それではまた明日にでも。」

3人に声をかける。ジンさんは背中越しに手を上げ、エンさんとフウさんは軽く会釈をして出て行った。さ、これならプラマイゼロになったかな。

ふと見るとシン君は眠そうだ。ツバキさんが「お風呂に入らないと。」とやさしく声をかけている。シン君も「んゝゝ。」と言いながらのそりと立ち上がる。ユリカさんがシン君に、

「ダイスケさんをお風呂に案内してあげて。その後はお部屋にも。」
さっきのすごい剣幕のお子様モードから少しおてんばお嬢様モードに戻ったようだ。朝のことを考えるに、さらにメツキははげやすいがおしとやかお嬢様モードがあるんだろう。シン君にも最初に会ったころのように皇太子モードがあるようだし。大人ならまだしも、子供の頃からこれとは王族もなかなか大変なのだろうなと思う。この新しくできた、妹や弟のような2人も守っていけたならさらにい

いと思った。

ふらふらしているシン君を半ば背中に乗せ、俺を案内してくれるのはほとんどケルベロスがしてくれた。フジサンの麓、温泉も出ると思うことで、ここの人々は風呂には困らないらしい。さすがに個人の風呂を持つ人はおらず、大衆浴場形式だ。

そして風呂につくと、ひらがなでおとこ、おんなと書かれた2つの入り口があった。男の方に入り、服を入れる場所なども教わる。中に入れば結構な広さでゆっくり浸かれそうだ。おけもある。

ただ問題は石鹸に類するものがないのだ。体をお湯で流し、布で汚れを拭い、またお湯で体を流す。これだけだ。

ふむ、美容第一弾は石鹸からかな。作り方わからんけど。

まあ向こうの世界と違い空気はきれいだし、この程度でも困ってないのかもしれないな。一緒に入ってきたシン君の護衛さんはシン君に聞こえないよう小声で、向こう世界で言う垢すりみたいなものがあり、きれいな女性が色々気持ちよくしてくれると少し扱いが危険な情報も教えてくれた。ふむふむ、覚えておこう。

風呂をあがり、結局眠ってしまったシン君をケルベロスの背に乗せ、風呂から部屋までの道順を案内してもらう。ケルベロスとシン君の護衛さんにもお礼を言ってまた明日、と別れる。ちょうど水差しがあつたので水を1杯いただいてからベッドに入る。

「色々ありすぎだったなあ。でも元の世界の俺には悪いけど面白そうだ。俺にもできそうなことがあるようだし。今日も今日とて頑張

りました。明日もがんばろ…う…。」
独り言すら最後まで言えずに眠りについたのであった。

第5話 社会の勉強

パタパタパタ……、コンコン、…コンッコンッ、…ゴン！ゴン！…
ドンドンドコドコチャカポコチャカポコ！ジャーン！

「んー？」

さすがに音が気になり軽く目を開ける。

幼児のお遊戯の音楽会のような、寝ぼけているんだろう。きっと。
いくらなんでもノックの音でジャーン！はないだろう。ちやかぽこ
ちやかぽこ。

そのうち「ダイスケー！」などと聞こえてくる。

ようやく目が覚めて、頭が冴えてくると、自分がどこにいるか思い
出した。ちやかぽこ。

「はーい！」

とりあえず返事をしてベッドから起きる。外の人も返事が聞こえた
のだろう、ボタンと扉を開けバタバタと入ってくる。

ナジャとリリムとネコマタだ。昨日の一件から仲良くしてくれてい
る。

彼女らの父のような人と似た魔力を含んでいるらしい俺のことを最
初は父、父と言っていたが、父親になった経験などないし、子供な
くて盆と正月に会う甥と姪が、友人同僚の子供くらいだ。

正直父は勘弁して欲しいと言うと、それならとティーターニアを真似
て「ダイスケ」と呼ぶようになってくれた。おじちゃんとか言われ
ないだけいいだろう、うん。

「ダイスケ、ご飯だよー！みんな集まってるよー！」

リリムがまくし立てる。昨日は俺の感覚で一日働いた後の夜の風呂から朝の風呂へ落ち、さらに一日過ごしたのだ。色々ありすぎたので時差ぼけのようなことは起きなかったが、多少寝過ごしても仕方のないところだと思う。

けれど朝食も皆一緒ということならば急がなくてはと部屋を後にする。着替えの場所もわからないし、仕方ない。

食堂に近づくとなにやら話し声が聞こえる。主にユリカさんとユリカさんの侍女さんでもめているようだ。

というよりユリカさんが駄々をこね、侍女さんとティターニアが抑えようとしているらしい。

「あたしが呼んだようなものだから、あたしがお世話するの！それが筋つてもんでしょ！」

ユリカさん筋とか難しい言葉をよく知っているなあ。お子様モードなのに。

昨日歳を聞いて、自分の半分ほどの年齢だと知ってから、扱いとつか感情が完全に妹に対するそれになっている。

侍女さんの1人が声を出す。

「姫様、筋云々はかまいませんが、きちんと姫らしくして欲しいのです。」

正攻法で抑えられなくなったのかな？搦め手っぽく痛い所についておとなしくさせようとする侍女さん。

リリムが、「あれはわたしの主でカリンよ。姫の教育もしているの。」とささやいてきた。なるほど教育係としては言わざるを得ない、言わなくてはならない一言だろうなあ。

もう一人の侍女さんはナジヤの主でセイさんというそうだ。自分たちが姫を抑えている間に俺を起こしてきて欲しいとお願ひされたい。ネコマタの主はシン君の護衛のガクさんという。まあ、実際はケルベロスもいることだし護衛など必要ないそうだが、ガクさんもシン君の教育係を兼ねているらしい。

昨晚の風呂であんな情報を教えてくれた人が教育係とかどうなんだろうと一瞬思ったが、決める所さえきちんとしているのなら大丈夫なんだろう。四六時中お堅い人では子供には好かれにくいしね。

まああまり侍女さんを困らせるのもなんだし、挨拶しながら食堂に入っていく。

「おはようございます。遅くなってすみません。」

「あ……。ダイスケさん。おはようございますすわ。」

無理にお嬢様モードに戻そうとしたんだろうか、うまくいっていない。ほほえましいが。

サンカイさんが声をかけてくれる。

「うむ、おはよう。よくねむれたかね。」

「ありがとうございます。おかげでぐっすりでした。」

「昨日ダイスケがこちらに来た折、ダイスケのところでは夜だったのだろう？まだ寝ていてもよかったんだが、ユリカがな……。」

ツバキさんも、

「わたくしも起こすのはもう少し後でも良いと思ったんですが、ユリカが……。」

と、半分からかいを含んだ表情で言っていた。

当のユリカさんと言えば、赤くなりながら

「……家族みたいなの……だから……今日は……約束が……。」

とかいまいち聞き取れなかったがぼそぼそと何か言っていた。その

後もなにか理由のようなものを言っていたようだったが聞き取れず、いつの間にか隣に来ていたシン君が小声で「姉ちゃん、何かの本を読んで、最初に裸を見た人と結婚するって言い張ってたことがあったね。まだ召喚知らなかったらしくて本気でそう思ってた時があったみたいなんだ。」と事情を説明してくれた。

耳聴く聞かれていたようでユリカさんにポカリとやられていた。

「いてッ！でも姉ちゃんにはまだ早すぎるんだって。大体父様や母様だって一緒になったのは父様が80、母様がろ…。」

ゴン！神速で近づいたツバキさんに殴られていた。ろ…？ろっ？！60のことか？じゃあ今はユリカさんの歳からしても…。しかしどう見ても30代。サンカイさんは40代にしか見えないぞ…。そこまで考えてしまったとき、ツバキさんからものすごいプレッシャーがきた。これは地雷だ…。最大規模の。

見えないところで盛大な冷や汗が出てきた。猛烈にヤバイと感じ、話題の変化を試みる。

「いや、ホント、遅れてすみません。俺はどこに座ればいいですかね？」

フォローになっているかわからないが一応入れている。

「ツバキさんはどこをどう見ても30代ですよ。お若くて美人です。サンカイさんがうらやましいです。」

やっぱり根は純粋な人たちだ、とっさの一言だったがツバキさんは気をよくしたようで俺の手を引き席まで連れて行ってくれた。オベロンが感心したような顔をしていたのが印象的だった。

「…いただきます！」「」

途中ユリカさんと

「結婚なんてこんな腹の出てきた歳の倍も離れているおっさんとしやなくてもよからうに。」

「そんなことはありません、テイターニアにも好かれてますし、お腹なんてシンの訓練と一緒にすればすぐですわ。歳だってもう10年もたてば釣り合いが取れます！」などと自虐的かつ余計面倒な事になりそうな会話もあったがつつがなく朝食も終わった。

朝食をいただきながら、いまだに鼻歌のひとつも出てきそうな感じのツバキさんにたずねてみる。

「そついえば召喚というのは、友魔同士が契約すると聞きましたけど、友魔のいない人とかどうするんです？」

「皆が皆召喚するわけではないわ。お互いが好きな相手同士なら問題はなし、いくら相性が良くても遠い将来のことはわからないということは召喚も変わりないですもの。相性が良いとはいえ、友魔がいなかったり、ウィルス国の人であった場合は契約のやりようもないし。それに相手が幼子だったりしても問題でしょう？50才くらいになって相手のいない人が召喚をおこなってみるとというのが今は一般的かしら。ちなみにサンカイは30の頃一度やってみた所、わたくしが10才だったから一度あきらめたみたいね。ただ地位のある人は簡単に恋愛で結婚できない側面もあるから召喚というのは王族や有力者にはきちんと受け継がれているような。面白い話では、ガクのように自分と友魔の性別が違う人がたまにいるのだけれど、結婚相手が見つからずに結局召喚を試みたら自分の友魔だったといったこともあったそうよ。」

「そうなんですか。で、どうしてまた姫は17で召喚しようとしたんです？」

ユリカさんはなにか言いたげだったがそれより先にツバキさんが口を開く。

「好奇心なんでしょうね。ついこの間まではサンカイと結婚するなんて言っていましたし、本などの影響で少し夢見がちがところがあるようですわ。」

なるほど、17にしては少し幼い感じがするのは恋愛小説みたいなものの影響か。まあそうでもなければ倍も年の離れた自分に惹かれるとか普通は考えられないよね。

少しおいてさらにツバキさんが言う。

「どんなことにも必ず利点と欠点があるわ。そして欠点だけを見てその全てを否定してしまうことが赤い月、魔物への第1歩といわれているわ。」

さて、最初はどうなるかと思ったが、なんとか朝食も終わり、守り回復魔法の勉強と思ったが、少し問題が発生してしまった。

回復系魔導師さんのサクラさんが忙しすぎるということらしいのだ。ユリカさんはどうしてもということで午前中は治療のお手伝いに行くことになった。

お手伝いというが、もともとユリカさんは病院の治療師で2日ばかりお休みをもらっていたらしいのだ。

サクラさんを含め回復魔法の講義をいただくには午前中はユリカさ

んの手伝いが必須というわけだった。

ユリカさんがお手伝いに行くときに見せた遠距離恋愛の恋人がまた帰ってしまうときのような顔を見て少し冷静な話し合いを早急にすべきだと思った。

とにかく午前中が空いてしまったわけだが、この国の地理等、社会的なことを知っておかなくてはならないということになり、シン君の勉強も兼ねてちょうどいいとばかりに社会の講義とあいなった。自分としても色々聞きたいことがあったのでこちらからの質問形式とさせてもらった。ツバキさん、シン君、ジンさん、エンさん、フウさんといった面々だ。

講義の場に行きすがら、ジンさんが昨日の魔法の改良結果を教えてくれた。昨日話をした後、どうしても待ちきれなくなり夜更かしして試してみたんだそう。結構な結果が上がったらしく、今日の回復系魔法も楽しみにしているとうれしそうに語っていた。

「この国の人口、町や村の所在、通貨、それから魔物のことも教えて欲しいです。」

基本的なことを聞いてみる。

この国の人口は約20万、ミカド城下に10万、西の海辺のミナトという町に7万、ミカド国領の真ん中あたりにあるイクサという町

に3万。城下の10万は主、友魔とも戦闘能力のあまり高くないものが多い。他の町で子供が生まれると城下で文字や簡単な算数の勉強を教わるために城下に来るようだ。その間戦闘能力のある者は城下の守備、力のある者は農業や工業、知のある者は教師といった職についたりする。大人であつても城下で勉強した後商人などになつて他の町をまわつたりするものもいるらしい。城の守備にしても、城と言うよりは農業従事者を不意に襲つてくる魔物から守る意味合いが強い。城は大丈夫かという質問にはケルベロスが『われらを倒せるものなど魔物にはおらぬ。』と言つていた。オベロンなどもうなづいていたからそのとおりなんだろう。

ミナトは漁業とウィルス国との貿易により生計を立てている人が多いそう。

イクサはいわゆる戦闘好きの者の町。ミカド国領の南は基本的に人や魔族の集落はなく、魔物が多いため実質イクサはミカド国を守る要の町として存在する。血気盛んなものたちを抑えるため賭け試合のようなものもあるらしい。そしてなぜか地下にて家畜の繁殖に成功しているという。『地下で…?』と不思議に思ったが、他の町もそのうちいく事ができ自分で確認できるだろう。

ちなみにミカド城の北のフジサンの中腹にアマの町というものがあり、これは魔族の集落のようだ。ミカド城との交流があるという。そこからさらに北にも大地はあるのだが、魔物が多く人や魔族はあまり近づかないらしい。

通貨といえば、ミカド城、ミナト、イクサそれぞれに鉱山があり、金や銀を産出する。それぞれの町の長が管理し通貨として使ってい

るようだ。ただ金は詠唱系魔法の威力を上げる消費型の媒体として、銀は対魔物の結界や魔よけに効果を発揮するらしく、ウィルス国やアマの町との品物の売買に利用されている。

最後に魔物について。魔物とは赤い月にて自我を失った人や魔族、動物の成れの果てだという。

もともと魔力と高い知性を持つ人や魔族はそれほど魔物にはならないようだが、虫や動物はそれなりに多く畜産の動物も魔物化する。イクサの畜産も近くに武に覚えのある者が多いからこそ何とかやっていけているようだ。

魔物単体もそれほど力の強いものはおらず群れを成すこともないため、注意するのは巨大化した蛇や、熊。それから毒を持ったものらしい。友魔がいるため1対1になることはほぼないので、それなりに武に覚えがありちゃんとした装備ならそれほど苦戦はしないようだ。

魔物の絵付きの本は城地下に、実体験ならば城下町の守り手に聞けば詳しいことがわかるだろうと聞いた。これは図書館があるのか知らないけど図書館めぐりをしてみなくてはいけないだろう。歴史も詳しく知りたいし、文字の関係上辞書はどうしても必要になるはずだ。

魔物以外に人に脅威はないのか聞いてみた。犯罪や病気だ。

犯罪とは何だと逆に聞かれてしまったので、姫の召喚の際に邪魔したような人に害を与える行為だと説明した。

そっという人はそんなに間をおかず赤い月に惹かれてしまうらしい。友魔も悪意に敏感なものが多いで酔っ払いの喧嘩ですらそんなに危ないことにはならないという。平和で結構なことだと思う。

病気もいっそ毒草を食して毒に犯されるほうが多いという。まれに風邪をこじらせて亡くなる人もいるらしいが、熱と咳が全て風邪と

定義されてしまうここでは自分のいた現代のほとんどの病気は風邪になってしまっただろう。西洋的な手術等がなく、魔法のみの治療なら仕方ないことだ。

ここまででひとつ疑問が生まれた。

総人口20万、半数は他の町で町ごとの自治。人々はほとんど自給自足のようなこの国、城にもあまり人がいないように思える。自分がここに来てまだ2日なのに家族のような対応をされることにも、聞きにくいんだけど、と聞いてみた。

「王の仕事とは何でしょう。」

さすがに王がいる意味とは聞けなかった。王に関する質問だったからか、それまで勉強の復習代わりにと周りの訂正やつっこみを受けつつ答えていたシン君ではなくツバキさんが答えてくれた。

「王という言い方自体はウィルス国に対するものと言った方が良いでしょう。ウィルス国王がいるからミカドも、と言う意味合いしかありません。魔族にしても王とはオベロンたちが言う父という存在をさします。この城にしても人が作ったものではなく、魔族が古代の建物の上に作ったに過ぎません。地下の書物や遠い昔の品を守り、魔物や過酷な自然から当時は子供であった人を守る城として作ったようなのです。国としてはサンカイ王と各町の長のかわりのものが大臣として、この城下の長もあわせて4人で話し合いながら決めています。本当の王がおられる以上、わたくしたちの呼び方も考えなくてはいけないでしょうけどいい案は浮かんでこないよね。この間もそんな会議で丸々3日も使っていましたわ。」

「なるほど。だいたいわかってきました。細かいことはおいま
たお聞きますのでよろしく願います。ちなみに魔族の方たち
は古代文字を理解しているのでしょうか？」
オベロンが答える。

「魔族はもとも言葉を発しなくてもお互いが理解できる。魔力で
物に意思をこめることもできる。なので私たちには文字を書いて残
すという行動が存在しない。ただ人と触れ合うため言葉を発してい
るに過ぎない。最近の手紙というものに興味を持つ魔族も増えてき
たので文字はあるが、人のものを使っている。」

では、と『王』と『皇』という漢字を紙に書きながら、
「今、ふと思ったんですが、人の王は『王』、全ての父という方に
は『皇』としたらどうでしょう。どちらも『おう』と読みますよ。
文字にすると『皇』の方が偉そうにみえるでしょう。」

皆で紙を覗き込みながら、『ふむ』とか『ほう』とか言っている。

ツバキさんが

「面白そうですね。サンカイにも言ってみましょう。」
と言っていた。

ジンさんは

「他にも文字を見せてくれんかね。」

と言ってきたので、サンカイさん、ツバキさんやら人の名前、地名
などや会話に出るだろう覚えうる限りの漢字を意味を添えながら紙
に書いてみた。

サンカイさんは山海、ツバキさんはまんま椿。シン君はどうやら森
林から取ったらしく森、ジンさんは老師ということで魔方阵の陣か
ら。エンさんとフウさんは得意魔法から炎と風。エンさんにはその

古代文字はたぶん魔法として発動できるが昨日の火の実験よりさらに気をつけて欲しいと伝えた。フウさんは知っている漢字だったせいか少しがっかりだ。

ツバキさんはミカド国のミカドが帝という文字だったのを知り、ちよつと恐れ多いなどと言っていた。王妃がそんなことを言っているのかとも思ったので、昔は皇がいたから帝国ミカドだったのでは？と適当なことを言ってみたら納得してしまった。

久しぶりに漢字をたくさん書いた気がする。現代ではPCでタイピングだったし。これは早急に辞書を見つけないと下手に間違った文字を書きそうで怖い。

午後は回復系魔法ということで行くつか使えそうな文字を思い出そうとしてみる。

治、解毒、回復、はい。治癒が書けなかった。まずいなあ。

本当に辞書が必須になりそうだ。できたら書き順の載っている漢和辞典。

結局時間の大半は古代文字教室になってしまい、お昼にしようと一緒に来たユリカさんとサクラさんがそろって残念そうな顔をしていた。

第6話

守りと回復の魔法（前書き）

怪我人の描写がでできます。苦手な方はご注意ください。

第6話 守りと回復の魔法

お昼を終え、一行はサクラさんの研究室についた。ちなみにサクラさんは妙齡の女性だ。年は聞けない。それからシン君はサンカイさんに呼ばれてケルベロスと一緒に行ってしまった。

黒板のようなものを使いサクラさんに説明してもらう。

「攻撃系の魔法と基本は変わらないわ。ただ、攻撃系なら最初に描く円を筒や球にすることくらいしか違いはないわ。」
「はいつつ手で魔力の立体を作り出す。」

「この中の魔力の量で強さ、回復の早さが決まるわ。ただ単に魔力で塊を作るのが障壁と呼ばれる守りの魔法になるのね。作る際に自分や守りたい人を入れた筒や球を作ることになるのよ。」

サクラさんの作った障壁をこつつと叩いてみる。

手で叩いたくらいでは障壁自体の強さはわからないがさわった感じではガラスのような硬質感じがする。

続いて立体の縁というか表面、壁に当たるところに『治』と魔力で書き込む。

「これで回復魔法もすべてよ。」

「回復系や守り系の古代文字がほかにあればおしえてください。」

「『治』の他には『解毒』ね。守りの障壁は張る強さに応じて風をしのぐ程度から防音、魔法障壁、物理障壁の順に強くなっていくわ。ただ注意することは魔法かけた人が眠ったり気を失ったりすると障壁は解けてしまうことね。銀を周りに配置しておけば2、3日は持つようになるけど。他に質問はあるかしら？」

後は実際にやってみないとわからないだろう。

障壁が展開出来次第サクラさんの診療所にお手伝いに行くことを決

定させられてここで魔力障壁の練習と相成った。

まだ患者さんがいるからという理由でユリカさんはサクラさんに引きずられていった。

ツバキさんとジンさんが先生となり教えてくれた。

エンさんフウさんは自分ができたときの感じやきっかけなどを教えてくれた。

「最初は目を閉じてもいいけど魔力の広がりを確認する為にもあまり目を閉じない方がいいわ。」

「もつと均一に魔力を込めるんじゃ。」

「手のひらからふわっと広げる感じはどうです？」

「そうですね。ふわっともわっと広げてぴしっと形にするんです。」

「

………

………

…

正直エンさんとフウさんの言葉は理解できなかったが、なんとかいびつではあるものの魔力の立体を形成する事ができた。

じゃあ実際にやってみないとね。とのツバキさんの言葉に従いサクラさんの診療所に向かう。

城から出るのは初めてだったので正直市場やら酒場が気になったが今は我慢と思いツバキさんとオベロンについていく。魔導師3人衆は午前中に聞いた『炎』の古代文字を早速試してみるとのことで城

内練習場にむかっていった。

ツバキさんも気さくな人なので会話もしやすい。

「ユリカに好かれていた様だけどうなの？ 実際？」

「こつちに来て2日ですからね。それどころではないというのが心情でしょうか。何かあったときに自分自身も守れないようではどうにもなりませんし。」

「ユリカもなにか切羽詰った感じもするのよね。ティターニアにそれとなく聞いてみるのも必要かもしれません。」

「しかしあの年頃って難しくないですか？」

「だからティターニアなのですよ。親にいけないことでも友魔になら言えるということもあるでしょうし。」

「なるほど。わかったらこつそり教えてください。」

「いいわ。あとこれを。」

もし帰りがユリカさんと一緒になるのなら何か買ってあげたらとお小遣いまでいただいでしまった。

「それよりもこつちの世界はどうかしら。」

「まだなんとも。城の人たちは皆純粹ですばらしいとは思いましたが。」

「ダイスケのいたところは違うのかしら？」

「あちらには魔族も魔物もいないですからね。友魔を介して相手の感情がある程度分かる、ということがないので純粹ないい人が結局損をするということが多々ありましたね。ずるく口の回る人間や人をだましていい目を見るような人間が人を指導する側にすら多く存在することもありました。その点だけでもこちらにきてよかったと思っくらいです。」

「そうなの…。ウィルス国が少しそんな感じね。詠唱法にわたくしたちの知らない言葉を使ったりするのだけど、それに加えて赤い月

の影響が出にくい人種でもあるわ。ウイルスと商売している人がずるがしこくてやりにくい人がいると愚痴を言っていたのを覚えているわ。当時の書物にある魔導師が『私たちはこの国にとってウイルスになる可能性がある。その者たちとともに新しい地で別れて暮らした方がいいと判断した。自虐をこめ国名はウイルスと名付け、この国に負けないようなすばらしい国を作る。』といったことが書かれてあったわ。ウイルスとは何を意味しているかはわかっていないけれど、当時年の上の方の子供が多く旅立ったと。」

ウイルスとは英語まで習いだした子達だったのだろうか。高校生、下手したら中学のあたりからずるがしこくなる子はいるだろうか。その辺りの者と旅立ったんだろう。当時の様子を知る由もないがそんな所ではないだろうか。

「そうですね、明日あたりは書を見せてくれるとうれしいです。あ、その前に自分の身を守る方法が先ですかね。そうしないとこの国を旅できませんし。そういえば鎧なんか魔法で守りの力を与えたりできないんですか？」

「よく聞いてくれたわ！わたくしが研究しているのが正にそれなのよ。」

「ツバキさんですか？王妃様なのには？」

「王妃だからよ。王族だからといって何もしなくても食べていけるわけではないわ。城の裏には畑もあるし、狩もする。仕事ができるものはするのが当然でしょう？魔導師は特に自分の研究成果を教え、広めることが職だからここ何年も進展のないあの3人衆は内心ではかなり切羽詰っているんじゃないかしら。」

「やっぱり魔導師はそれなりの結果を出さないといけないって訳ですね。」

「ダイスケには期待してるわ。ジンさんあたりの研究がダイスケの

知識で何十年分も飛躍したと言っていたから。」

「風呂のあとの麦酒のために頑張ります。」

「ふふふ、よろしくね。」

ちょうどその時、『カンカンカン…』とどこかで鐘を乱打している音が聞こえてきた。

「この音なんですか？」

ツバキさんに聞いてみるも硬直してすぐには話しにならないようだ。オベロンにも同じく聞いてみる。

「魔物が来たみたいです。特に1人では対応できないものが。」

「まずいんじゃないのそれ。」

「かなり。ただ襲われるという意味ではなく怪我の治療の関係で。」

「治療で？」

「ええ、鐘が鳴る前に近くのものや襲われた本人が狼煙などの方法で救援を求めているはずです。そして人数が集まれば魔物を撃退することもそれほど難しいことはありません。あの鐘は重病者がいる場合に使用するものです。」

「じゃあ…。」

「ええ、何ができるかわかりませんが鐘の鳴る方向の門に向かうべきでしょう。」

急いで現場に向かう。門の傍の広場にはすでに結構な怪我人がいる。回復魔法の使えないものや幼い子も湯や消毒用の酒を運んだり患者の世話などしている。結構な速さで走ったにもかかわらずツバキさんは平気そうだ。羽で飛んでいたオベロンは言わずもがな。俺一人『ぜーぜー』とこれ以上ないくらい息を切らしている。運動などほとんどしてないから仕方ない。折角魔力体になった異世界なのに

そういうところは融通を利かせてくれてもいいと思った。ぜーぜー。

サクラさんやユリカさんもすでに来ている。普段年相応の顔を見せるユリカさんがまじめな顔をして治療にあたっているのに年甲斐もなくドキツとしてしまう。今はそれ所じゃない、気を入れる。

「なにか手伝うことは？」

サクラさんに声を掛ける。

「回復できる？」

「なんとか。」

「じゃ、手当りしだいできる限りお願い。」

「はい、できる範囲で。」

大怪我の人はお任せしてあまり生死にかかわらない程度の怪我を治していく。習ったことを試しているようである意味申し訳ない。

ただ、ここで分かったことで回復系魔法は、魔力量が足りないと時間掛けても回復せずに魔力の立方体が消える、魔力量が多いと完治後結局魔力が空中に分散してしまい自分が損をする。

治るのであれば後者の方がいいのは確かだが、怪我人が多い場合は自分の魔力量の関係上治せない人が出てしまう。慣れないとむずかしい。怪我人が必要であるという観点からすれば慣れるのが良いのかはわからないが。

治療をしながら聞いてみると、畑仕事中に熊と猪の魔物が出たそう。だ。熊も猪も子連れだったらしい。『魔物が子連れって…』と正直思ったが本能で生きているやつらからしてみれば目に映る人は攻撃対象でしかなく、子育ての時期もあいまってかなり凶暴に暴れまわったらしい。普段なら障壁で攻撃が効かないとなると少しすれば飽きて森に帰ったりするそうだが、子育て時期だったせいで友魔ともども魔力障壁用の魔力が尽きるまで、尽きても攻撃をやめなかった

らしい。何とか救援を送ったが助けに行った人も結構苦戦したようだ。以前城下町の怪我人用の鐘が鳴ったのが10年以上前と聞けば先ほどツバキさんが硬直していた意味もわかるうというもの。

ティターニアやオベロンは城にいたため古代文字が使える。そのティターニアやオベロンはもちろんツバキさんまで回復にあたる状況が続いた。

彼女らの魔力がかなり減ってきた頃重病者が運ばれてきた。彼女らもまだ手一杯だ。

自分が向かうしかない。患者を見る、出血が半端じゃない。特に背中がひどい。背骨は何とか鎧で守られていたが、猪の突進でも受けたのか、背中にあいた傷からとめどなく血が流れてくる。

『くそっ！』現代のネット氾濫世界で時折見られるこういう系画像は平気だったのに実際の怪我を目の当たりにしてひざが笑いだす。それでも何とか現在ある自分の中にある魔力のほぼ全てを使い魔力の立体をつくり上げることができた。

震える手で『治』と書き込む。

だめだ、傷がふさがるより出血の方が早い。まずい。それを見る周りの人にも『これだけの傷では仕方ない』という雰囲気漂いだす。彼の友魔は魔力枯渇の失神からは回復したものの体が意識についていかないらしくぶるぶると震える手を必死に主に伸

ばしている。

『なんとかできないのか！昨日この国の人たちを守りたいと思ったのではなかったか！』俺の心のどこかで叱責する声が聞こえる。同時に『俺みたいな一般人にできることなんてもうない。』と自分の心があきらめに似た声も聞こえる。

ふと自分でも良くわからない考えがよぎる。ツバキさんの先ほどの言葉、『ふふふ、よろしくね。』ティターニアをはじめとした友達達の『父に似た魔力を感じる。』そしてユリカさんの『お腹なんてシンの訓練と一緒にすればすぐですわ。歳だってもう10年もたてば釣り合いが取れます！』

特にユリカさんの言葉については俺自身も意味不明だったが、なんとか氣力がわいてきた。

…これならどうだ！立体魔力の『治』の前に『完』と入れてみる。
『完治』だ。

だめだ、これは結果だ。結果完治するだけで速度が出るわけじゃない。

ならば…

『完治』の前に『瞬間』と入れてみた。

目も開けられないほどのまぶしい光が魔力の立体を満たし、それが消えた時に先ほどまでとどめなく噴出していた血が止まっていたことだけはかろうじて確認できたとき、俺は意識を失った…。

「ダイスケ…」

やさしい声が聞こえた気がする。半分寝ていてもにやけてしまうくらいにやさしい呼びかけだ。こんな声をかけられるのはいつ以来だろうか。

が、

「…つつつるさ〜いつ!」
台無しだ…。かすかにどこかで聞こえる、ちやかばこちやかばこと
いうBGMと共に意識が覚醒する。

「あつ、ダイスケ!おきた?だいじょぶ?げんき?」
ドアップのリリムとナジャだ。

「ああ、うん。大丈夫。」

傍からユリカさんの声が聞こえる。

「なにかリリムとナジャがこうすれば起きるとか言つてそこらのも
のをパコパコたたき出して。朝もこれで起きたよとかいつて。」

いや、起きたのはあなたの怒声です。とは言えずあいまいな返事を
しておいた。

「大丈夫そうなら少し聞いていいか?」
サクラさんだ。

「はい、答えられる範囲なら。」

「倒れる前、あれは何をしたんだ?」

美人にすぐまれるとかなり怖いんだと再認識…。近いつ、顔が近い
ですよサクラさん!

なんとか表面上平静を保ち、顔を引きながら答える。

「文字を足しました。というかあの人どうなったんです?」
さらに顔を近づけながらサクラさんがまくし立てる。

「無事だ、というか痛かった歯やら関節、肩こりまで治ったそうだ
!どういうことだ!なにをしたんだ!文字とはどれだ!どんな文字
だ!」

近い近いマジ近い！ここに誰もおらずサクラさんが恋人だったらキスしてしまいそうだ。いや、だれかいても関係なくキスしてしまいそうなくらいマズイ。なんかいい香りもするし。ああ……。

『ダイスケはなんとか煩惱を振り払った！』どこかのレベルアップの音が聞こえてきそうな感じでサクラさんの肩に手を置き少し顔を離す。葛藤していた時の表情をユリカさんが見ていたのか、ユリカさんの突き刺すような視線に恐怖したのは内緒だ。

それでサクラさんも我に帰ったのか咳払いをしながら姿勢を正す。
「で？」

まだこちらはドキドキだ。少しどもりながらも『瞬間』と『完治』という文字を使ったと説明する。

「『瞬間完治』か。それならば納得だ。攻撃系は威力を上げること、効果を上げることが求められるが、回復はいかに早く治すかということが求められているからな。これならば回復系はかなりの進歩を上げることになる。」

「書き順も今書いた通りですよ。というかサクラさん、なんか男言葉になってますけど？」

「これが地なんだ。下らん理由と些細な怪我でわざわざ私とユリカの回復魔法を受けようとする阿呆を怒鳴っているうちにこんな感じにな。気になるか？」

「いえ。サクラさんの魅力はそれ以上ですからね。……同じく美人のユリカさんもいるし俺も少しの怪我でも診療所に行きたいと思い

ますよ。」

ユリカさんの表情がというかティターニアの『なんとかしろ』的な表情を受けて少し言葉を変えて言うことに。サクラさんの表情は微妙だったけど、とりあえずユリカさんの機嫌が直ったようだからいいか。

サクラさんはさらに言う。

「もう少し検証してみないとわからんが、あの時ダイスケの作った魔力量以上に回復には魔力が必要だったと思う。ただあの文字を入れた瞬間、傍にいた友魔はまた失神、周りにいた者も魔力が吸われた感じを受けたと言っていたから、あの文字はその後続く文字の魔法を完成させるために周りからも魔力を吸収したと考えられる。もしそうなら回復魔法が使えない者でも傍にいたことにより怪我人を助けられるということができるかもしれないのだ。これはすごいことなのだよ。」

「そうなんです、まあ役に立ってよかったです。」

「ふふふ、あまりしでかしたことが理解できていないのかな。最初はただ召喚の失敗で呼ばれた者をユリカの失敗を隠すために魔導師などとしたのかと思っていたが……。なかなか見所のある者のようだな。」

「ありがとうございます。」

サクラさんの言葉にふくれつつらになったユリカさんを片目にお礼を言う。

「ただ、自分自身はいまいち体を守る術がないので、ツバキさんとも相談してそういった防具が作れないか考えることも視野に入れていますよ。後は城の地下の古代文字の書物を調べることでしょうか。」

「ほう。ならば私としては防具からお願いしたい所だな。怪我人が

減ることになれば私の研究に時間が取れる。ユリカもそれがいいだろ？ ダイスケと一緒にいる時間がふえるぞ？」

さっきのふくれっつらもきっちりサクラさんにばれていたようだ。ユリカさんもしきりに『そうしましょう。お手伝いします！』などといっている。

「サクラさんと話し合う時間も増えそうので楽しみですけど？」

とたんにサクラさんとユリカさんの顔が真っ赤になる。理由は真逆だろうが。

あれ、サクラさんってあんまりすれてないのかな？ 下手なこと言っただけな。ユリカさんをからかうくらいだし、この位の女性なら案外冗句で流してくれそうだったのに。

結局サクラさんは赤い顔のまま、

「おかげで今日は助かったよ。普段はユリカと一緒にここにいるから。後はきちんと動けるようになったら城までユリカと一緒に帰るな。」

と、そそくさと出て行った。

後はユリカさんの機嫌を戻すのに必死だった。今後の食事は必ず隣で取ることを条件に許してくれた。なんか条件も子供っぽい。夜は一緒に寝るとかだったらかなりまずい状況になるのは想像に難くない。助かった。

なんとか体も元通りに動くようになり城まで帰る。

ふと手をつないでみたら顔を真っ赤にして子供のようなはしゃぎよ

うだ。まじめな話、なぜだろうと思う。ツバキさんの言ったとおり、テイターニアとも話をしてみる必要があるのかもしれない。

そのテイターニアはふわふわ浮きながら俺の頭をその胸にかき抱いている状態なんだが。『この間はリリムにこの場所取られたから』らしい。テイターニアも顔の作りとしてもかなり美人の部類に入る。そんな人に抱きつかれて気持ちいいのもあるのだが、そこまで思いを寄せる、彼らが『父』と呼ばれる人にも会ってみなくてはいけないだろう。結局彼ら友魔が好意をよせるの俺の持つ『父』の魔力の色であり、俺ではないのだ。嫌われるよりよっぽどいいことではあるが、なんとなく虎の威を借りる狐のようで申し訳ない。

城への道すがらそんなことを考えつつ、時折顔を覗き込んでくるユリカさんに笑顔を向け、『この店はこれがおいしい。』『あの店はあれがオススメ』などと会話しながら歩く。

テイターニアも体を維持するための方法とは別に嗜好品として食事というものをすることがあるらしく会話に加わってくる。

しかし酒好きの俺にとっては特に酒場の情報が聞きたいんだが。

「酒場なんて行っちゃだめです！その後女性の所で遊ぶのが目に見えてますっ！」

ひどいな。決め付けてはだめだと思う。『じゃあ今度一緒に酒場に行く？酒じゃない飲み物だってあるだろうし。』と言えはうんと考え込んでしまった。

「ツバキさんと防具が開発できれば回復魔法の人たちも少し余裕ができるんじゃないかな。そしたら町のことも色々教えてよ。」

「仕方ないですね。ならお母様と一緒に研究することを許してあげます！」

なんでユリカさんに許しを得ないといけないのだろう？ ……なんて質問は命が惜しければだれもしない。死後の世界に希望の持てる人間などいないのだからここはおとなしくうなずいておく。

『お酒のどこがいいんですか？』なんて質問にも『それは飲めるようになればわかる』としか言いようがない。自分の限界というか、適量さえ判断できるのであれば、酒は人類の友だ。

周りの店などをふらふらと見渡しながら歩いていると『がいこくや』なる店を見つけた。一般の人たちが使う文字はほとんどがひらがなという世界であるから『外国屋』なのだろうか。何を扱っているかよく知らないとユリカさんも言ったので、気になって覗いてみると陽気そうなおじさんが「いらっしやい」と寄ってきたので聞いてみる。

「この店は何を売ってるの？」

「これはこれは姫様もご一緒で。と、そうそう、ウィルスでしか扱ってないものを置いているよ。生きていくうえで必要なものではないかもしれないけど良かったら見ていつてよ。」

『ふ〜ん、そうなんだ』と適当に相槌を打ちながら商品の説明を聞く。

ふと何かを紙で巻いた細い棒状のものが目に付く。10センチほどのそれを眺め、匂いなどかいでみる。

タバコじゃないかこれ！常習性は大麻以上といわれ大人は自己責任だが、子供には甚大な害が出るというアレ。

店の旦那も『ウィルスではこれに火をつけて煙を吸うんだとさ。』
しが』とかゆうとったぞ。いまいち理解できない趣味だと思ったが
面白そうかと思って仕入れてみた。向こうの人間はよくわからんな
あ』などといいながら説明してくれた。

「よし、買おう。」

「あんちゃん、いいのかい？ 買ってくれるのはありがたいがよくわ
からんものだぞ？」

「ははは。」

よくわからんなら仕入れるなよそんなもの。でもタバコがすえるな
ら店の旦那に感謝かなあ。10本ほど頼む。ついでに一緒ににおいて
あったハツカだかミントだかの小さい結晶も購入。さらに面白いも
のがないか色々物色してみる。ほとんどはミカド国でも使うが過剰
な装飾だったりする方向の面白さの商品が多いようだ。

そして…。

なにかプラスチックのような材質で直径20センチほどのアルファ
ベットのCに似た薄いわっかが目に留まる。

「旦那、これは？」

「知らん。」

なんで仕入れた…。

「何かの樹液に染料と宝石くずを混ぜて固めた物だが、何に使うか
はわからん。面白そうだったから仕入れた。」

面白そうならなんでもいいのかこの旦那は。

手に取ってみると多少弾力がある。いじくりまわしている間にも旦那

那と会話する。

「この『しが』ってこっちの言葉だと『タバコ』になると思うよ。」

「『たばこ』ねえ。」

「他にタバコやこのわっかを扱ってる所はあるの？」

「城下町にやあないな。ミナトにもあるかどうか。この町でもミナトでも下らんものをウィルスから買い付けるなどと言われとるわ。」

「かみさんにももうあきらまれておるな。だがそういったものが好きでな。普段は畑をやっておるが何日かおきにこうして店のようなものをやとる。やっぱり何人か面白いものが好きな人がおつてな。たまに何か売れることもある。」

「そうか。タバコはまた買うかもしれないからまた頼むよ。それからタバコは子供には絶対売らないようにしたほうがいいと思う。大人はまだいいが成長しきっていない子供には害があるといわれているからね。」

「そういえば仕入れる時にもそんなことを言われたな。わかったそうしよう。」

「あとこのわっかだけど、これはたぶん『カチユーシャ』。髪留めみたいなものだと思うよ。」

「『かちゅーしゃ』ねえ。で、どうやって髪を結ぶんだ？」

「結ぶ？ いや結ぶものじゃないよ。」

「しかし、たいがい髪の長い人は編んだり紐や織物の布でしばったりしとるぞ？」

「言われてみればそうだねえ。あ、そうだユリカさんちょっと来て。」

「ティターニアは飽きもせず俺にくっついていて文句も出なさそうだったが、ユリカさんは飽きてきたのかかまってもらえないからか少し不機嫌そうだった。だが呼ばれたことで一気に機嫌が直ったようであつた。」

「ちょっとここに立ってて。」

ユリカさんの後ろに回り首の所で髪をまとめてあった紐を解く。商品はまずいかと思ったがまあ姫だしいかと勝手に考え傍にあった櫛で髪をストレートに梳く。旦那に『商品を申し訳ない。』と形だけ謝ってみたが、旦那は商品に思わぬ付加価値がついたと逆に喜んでいた。

ユリカさんの正面に立ち、カチューシャをつけてあげてみる。痛いようならはずしてね、と言ってから旦那と2人一通り眺め、ユリカさんにも鏡で見てもらう。

「紫がかった青と宝石のかけらの輝きがきれいな緑髪に映えていいね。」

純粋な賞賛の言葉が出る。旦那も隣でうんうんと頷いている。ユリカさんは

「何か恥ずかしいです。」ともじもじしている。

「他の人がやっていないからねえ。最初はちよつと奇抜に見えるかもしれないけれど、似合ってるし大丈夫だよ。旦那、これまた仕入れに行ったらどう？ 姫様経由ではやるかもしれないよ？」

「そうだな、また仕入れてみよう。」

「それから他に使い方のよくわからないものがあつたらまた見せてよ。知らないだけでなにか猛烈にいいものもあるかもしれないし。」

「うむ、腕が鳴るな。」

じゃあよろしくといいながら支払いを終え、いまだ恥ずかしそうなユリカさんを連れて城への帰途につく。

道中で物珍しそうな視線もあつたがおおむね好評だった。

城の皆も似合っていると口々にほめていた。サンカイさんは最初なにかかなり落ち込んでいた風に見えたが、なんとか持ち直したよう
で目じりを下げていた。

「ユリカ、ちょっとわたくしにも貸してもらえない？」

「私にも！」

「私も！」

「だめですつ。私の宝物なんですつ。」

ユリカさんは友魔を交えた女性陣にもみくちやにされながらも力チ
ューシャを必死に守っているようだ。雰囲気からしてもまわりはか
らかっているだけと分かるが本人はいたってまじめだ。

そんなほえましい光景に和みつつも先ほどサンカイさんが見せて
いた表情が気になったのでたずねてみた。

酒とつまみを前に聞く話ではない感じを受けたが杯を傾けつつ話を
聞いた。

それは例の召喚の禁忌の顛末だった…

第6話

守りと回復の魔法（後書き）

まだ説明回から抜け出せません…。多少の戦いとほのぼのの普段の生活をかけるのはいつになるのでしょうか…。

12人の方がお気に入りに入れてくださいました。ありがとうございます。

これから精進いたします。

第7話

禁忌の顛末（前書き）

前回王が話し始めた所で切ってしまったので急いで続き投稿です。
少し暗い話です。

第7話

禁忌の顛末

サンカイさんは少量の酒でわずかに唇を湿らせ、ゆっくりと話し始めた…。

ミカド国には城下とミナトとイクサの町の長とは別に各代表が1人ずつ、王と合わせ4人で大きなことが決められる。

と言ってもミカド国民ほとんどが自給自足に近い生活をしているため、決めることなど一部作物の不作で食べていくのが厳しい者に援助したり、魔物の被害にあった人や荒らされた畑をどうするかなど、平時であれば特に会議を開く必要もない程度のものだ。

だが昨日のユリカ姫による召喚の儀を妨害した者に関しては再犯を防ぐため、最大限の早さで細心の注意を持って解決しなくてはいけない事柄だった。

ことの起ころいは昨日。

急がなくてはいけなかったり深刻な議題がなくても月に一度は会議が開かれる。いつもならほとんどなにもないので結局優雅にお茶をしながらの世間話で終わってしまうのだが。今日もそうだった。目下の議題が『王』という表現を魔族の『王』と区別するためどうするかなどと言った至って平和なものだった。

3人の代表のうち、城下の代表が具合が悪いと欠席する以外は。

その代表の名はシュウ。友魔はインプ。主の具合が悪いということ
でインプが代わりに会議というお茶会に参加した。

こういうこと自体は別に珍しくもなく、友魔もほとんど主と一緒に
いるため話を通じないこともない。

王と白虎、ミナトの代表、クラさんと友魔のマツハ、イクサの代表、
ユキさんと友魔のヴェスタとともに穏やかな時間を過ごしたのだっ
た。

特に問題もない会議の後、ユリカ姫が召喚を行い誰かに妨害され、
得体の知れない男が現れたと報告を受け、勉強中だったシンを連れ
部屋に急いだのだ。

その報告の直前、

「インプからほんの少し異質な魔力を感じる。」と白虎から言われ
たがその後のどたばたで忘れてしまったのだ。

翌日、なにかどうしても胸騒ぎのおさまらない白虎は王の執務中に一応の護衛をガクに任せシユウの家に向かった。彼らの『父』と魔物の討伐をしていたときにも、白虎の勘はかなりの高確率で危険を察知していた。そのせいもあり確かめてみようと思ったのだ。危険がなければ問題ない。もし何か危険なことが起こりそうな場合、放っておいたのでは危険を察知した意味がない。

町に降りるのは久しぶりだ。子供が怖れを見せずに駆け寄ってきた。皆笑顔だ。

相変わらずこの世界の人々はいい。遙か昔、己は人間の畏怖する対象だったのだ。

子供をいやがりもせずにかまってやりながらシユウの家の前に着く。やはり微妙におかしな魔力を感じる。

間違いではなかった。間違いであってほしいと切に願っていた。

シユウは王の幼なじみだ。よってインプとの関わりも長い。

友をこの手につけなくてはいけないかもしれないことに、いく人より何倍も強力な魔族とはいえ心が冷えた…。

なんとかそんな感情は表に出さずに子供をかまっている。
が、子供とは敏感なもので。

「びやつこゝ？だいじょゝぶ？」

かわいらしい女の子に問いかけられた。

己もまだまだだな、とある意味獣ではあるが人なつつこい笑顔を作り
「我は強いのでな。大丈夫だ。」と答えておいた。

子供をかまっていれば当然親も来る。

「白虎様」などと呼ばば

「魔族と人は友なのだ。様などと呼ぶのではない。」

とかえって余計に「様」をつけたくなるような威圧感を持って言い返す。

これは普段も見かけるある意味人と魔族の親愛のやりとりだった。

町人からここ2、3日シウウの姿を見ていないと聞いた。

妻や子を持たないシウウは、普段の買い物の時などインプと連れだ
って歩いているのが常だったのだ。

「おかげであまりいたずらされない」と町人は苦笑いしていたが。
白虎の勘に引つかかったので聞いてみた。「いたずら」とは何なの
かと。インプがそんなことをしていたとは知らなかったのだ。いか
に最近城下にでていなかったのかと、己の不明を恥じる。

どうもインプは惑わしの魔法だか術のようなものが使えるようにな
ったらしい。「声をかけたがそこにはいなかった」とか「触れたは
ずだが手がすり抜けた」と言った話を聞いた。ひどい人では腰をぬ
かして倒れ込み、体を痛めた人までいたそうだ。

これはまずい。

人をだましたり怪我をするまでからかってその後謝罪や治療をしない。これは赤い月に惹かれたとみて間違いないだろう。

王に相談することに決め、城に戻ることにした。

子供たちの名残惜しそうな視線と、『また遊んで』という声を背に挨拶がわりにしつぱを振らせながら城へと戻った。

ちょうど昼を終えたサンカイ王に町人の証言をを伝え、己の考えを加える。

「魔物化か…。」

「是。末期かと。」

「禁忌は？」

「そこまではまだわからぬ…。」

「本人に会うしかないか。」

「さらに手を下す覚悟も。」

「白虎はどうだ。大丈夫か？」

「遙か昔より友だったものも数多くいた。覚悟はもうできておるし、そうしなくては力のないものを守ることはできぬと考える。我が我であるためにもここは放っておけぬ。」

「そうか。ではわしも覚悟を決めねばな。…行くか。」

「待たれよ。シンも連れていくべきだ。」

「シンにか？まだ子供だぞ？」

「ケルベロスのやつも必要になるかもしれぬし、シンも知らなくてはいけなことがあるはずであろう。最初が自分の友人であったり

したならさらによくないことは明白だ。」

「…そうか、そう…かもしれんな。ではシンにガクを護衛につける。」

「

2人は鬼気迫る表情で部屋を出る。

よくわかっていないシンを連れ、ガクを伴いシュウの家に向かう。

シンは久しぶりの父親とお出かけに少し浮かれているようだ。サンカイはこの後を考えると胸が痛む。

ガクはサンカイの表情でなにかを察し、ケルベロスとネコマタには白虎からのつながりで説明しておく。

シュウの家までもう少しというところで『カンカンカンカン…』と鐘が鳴った。

シンは身構え、サンカイに『行かなくていいの?』と聞く。

サンカイはこれでなにかあっても大げさにせず、にすむかもしれないと内心安堵しつつシンに説明する。

『シュウが魔物になったかもしれぬ。』と短くはあったが。

シンはその言葉に逆にのけ者にされずに関わらせてくれたんだと理解した。

そして邪魔をせずきちんと最後まで見守ることが王子としての役目だとガクに聞かされた。

シュウの家の前だ。ひっそりとしている。

サンカイがノックをする。インプが扉を開けた。

「これは王、わざわざお出にならなくてもこちらからお伺いいたしましたのに。」

「うむ。シュウを見舞おうと思ってな。」

サンカイは違和感を感じた。インプはどうしてこんな物言いをするのだろうと。

シュウとは幼なじみ、インプとも生まれたときからの付き合いだ。

『サンカイが王になろうと言葉遣いなんか変えられねえよ』などと言っていたではないか。

「ネコマタツ！障壁！」

「ケルベロス！」

同時に声がかかった。

ネコマタの障壁はサンカイを攻撃しようとしたインプの爪をぎりぎりはじいていた。そこにケルベロスがかみつく。

インプは腕をもがれよろよろと家の奥の部屋へと向かっていった。ケルベロスにもがれた腕はきらきらと光の粒子をまとい消えていっ

た…。

インプの魔物化も確定した。

魔物には血液など存在しない。生命活動をやめた魔物は光の粒子となり消えるのだ。

白虎を先頭に奥の部屋に進む。

そこにはサンカイが見とれるほどの見事な礼をとったシュウがいた。

「王、いやサンカイ。来てくれてありがとう。友として最後の頼みだ。インプ共々我らを滅してほしい。もう時間がないのだ。我らは赤い月に……」

「きしゃああああああ！」

最後まで言うことはできずインプとともに飛びかかってきた。

それをなんとかかわし対峙する。

シュウとサンカイ、インプと白虎。

ガクとネコマタはシンを含めた障壁を。

ケルベロスはいつでも加勢できる体勢をとっている。

すぐに加勢しないのは友に決着をつけてほしいと、シュウやインプの消えかかっている理性が告げているためだ。

すでに覚悟のできている白虎とそうではないサンカイ。

どちらがより動けるかなど自明の理だろう。

白虎は飛びかかりつつ氷の息を吐く。対象を凍らせた後の一撃は必殺だとわかっているからだ。遅れてサンカイもシュウに向け切りかかる。

が、インプは凍らないし攻撃も通らない。シュウもだ。町人の言っていた幻惑の術なんだろう。

ケルベロスにもしもの為にサンカイの守りを頼む。

そしてある程度広い室内ではあるが、己の勘と親友であるといえるインプの性格を鑑みてある一点に爪を立てる。

面と向かって親友などと言う気はないが。

ぞぶり。

手応えがあった。

その刹那、シュウ共々幻影が消え、姿が見えるようになる。シュウに向かっていったサンカイを後目にインプに目を向け問いかける。

「いつからだ？」

「一月ほどだ。」

「きっかけはわからぬか？」

「すまない。」

「そうか。誰かに伝えることはあるか？」

「シュウに。『楽しかった』と。」

「わかった。安らかに眠れ、友よ。」

「ふふふ、おまえに友と呼ばれるとはな。また逢おう。」

「ああ。」

「」

「」

きらきらとかがつて友だったものが消えていく。
最後に残った虹色の小さな玉を器用にしまい、サンカイとつばぜり
合いをしているシュウに目を向ける。

サンカイはまだ心のどこかで迷っていた。
武ならシュウに負けはしない。だが少しの迷いが剣を鈍らせていた。

「サンカイ！なにをしておる！」
白虎の叱責に瞬く間に心を定め、シュウとのつばぜり合いをはじき
とばし切りかかる。

刹那、シュウは抵抗しようとはせず、穏やかな、どこかうれしそう
な表情でサンカイの剣を受け入れた…。

シュウの体は徐々に光の粒子に変わっていく。

その間、シュウはサンカイにその身の変化の過程と行ってしまった行為についての謝罪をしていた。

「すまないな、サンカイ。インプが幻惑の魔法を覚えたと言った時に気がつくべきだったのだ。そのときインプを切れず、流されて結局自分も赤い月に惹かれ禁忌を犯してしまった。」

「だれも傷つかなかったのだ。大丈夫だ。」

「サンカイ！それはだめだ！シン！見ているか。禁忌は厳罰をもって処されるのが定めなのだ。こう甘い王では先が思いやられるぞ。シン、頼んだぞ。」

「…はい、シュウおじさん。」

「そういうことだサンカイ。これが友として最後にできることだ。ミカド国を頼む。」

「…わかった。」

「インプが『楽しかった』と。確かに伝えたぞ。」

「白虎か。これからもサンカイを頼む。」

「承知。」

「うむ。サンカイも。元気でな…。ツバキさんを大事にしろよ？」

「ふっ…さらばだ、友よ。」

「…」

「…」

インプと同じく虹色の小さな玉を残しシュウであつたものは光の粒子となり消えていった。

サンカイの独白にも似た話は終わった。
瞳からはとめどなく涙があふれている。

友、特に親友を切らねばならなかつた心情とはいかほどだろう。いつの間にか話を聞いていた周りの人も沈痛な表情だ。サンカイさんの近くに座つてた人の落ち込みようは特にひどかつた。話にあつたクラさんとユキさんか。

軽く彼らと自己紹介をし、クラさんからもユキさんからもシュウさんは尊敬に値する人物だとわかつた。

俺はことさら大きな音を立て席を立つ。

案の定皆の視線が集中した。

「シュウさんがお亡くなりなっただけです。皆さんの言葉からでもすばらしい人だったことが理解できました。追悼の意を込め、少しの間目を閉じシュウさんの心が安らぐようにお祈りしたいと思います！黙祷です！」

黙祷という言葉の意味は分からずとも皆俺を見て同じようにしてくれた。

彼は禁忌により罰を受けたのだ。決して魔物として討伐されたのではない。

というのが皆の心情だった。

極刑の禁忌であろうが、魔物として討伐されるよりはいい。

「そして、シュウさんの活躍を祈り乾杯です！」

「ダイスケは死後の世界を知っているのか？」

「知りません。死んだことないですから。ただ今回俺がこちらの世界に来たことで俺も違う世界が存在するのを知りました。もしかしたらシュウさんは違う世界では英雄になっているかもしれません。そちらで人々を統べているかもしれません。聞いただけでもすごい人だと思いましたから。そうではありませんか？」

「そうかもしれないな。」

「では改めて。シュウさんの活躍を祈って、乾杯！」

「『乾杯！』『乾杯！』『乾杯！』『乾杯！』『乾杯！』」

サンカイさんに昔話をせがむシン君。茶々を入れるツバキさん。なぜか俺の隣から離れず、それでもシン君につっこみを入れるユリカさん。

食堂のベランダから夜空を眺めている白虎とそれを慰めるように集まる友魔たち。

ミカド国の禁忌にまつわる話が解決した日はこうしてふけていった。

第8話

地下探索と父と母と祖父と孫

昨日の夜は早速防音の魔法を試してみることにした。これも勉強だし。

部屋の4隅に銀貨を置き、部屋の大きさがぎりぎりの弱い魔力の立体を作り出して寝たのだ。

ボタン！

大きな音を立てて扉が開く。部屋の外と中を隔てる防音であるからして、部屋の中での音は聞こえる。

「ディスクェツ！」

「わあっ！」

びっくりして飛び起きた。

「…なに…？」

「なにじゃありません！朝ですよ！」
ユリ力さんだ。

「そうですか。」

「ご飯です！」

「そうですか。」

「早くしないと！みんな待ってますよ！」

「ふわわ〜あああ。」

むにゃむにゃぶつぶつと独り言か文句のようなものをつぶやいてい
るとユリカさんの容赦のないきつい視線が飛んでくる。仕方なく着
替えて食堂に急ぐ。最後は小走りだ。

腹の肉がたぶたぶいう。魔力体で作られた体がどういう原理で肉体
を構成しているかわからないが、もし痩せないのなら運動しようが
一生このままかな？など考える。少しくらい体力もつけないとこの
世界ではきついことを考えれば、どうしたらいいか調べなくては
いけない。体を鍛えようとして運動しましたが効果が全くでません、
では無駄すぎる。

ユリカさんは全く平気な顔をしている隣でやはり『はあはあ』と息
を切らせている俺。何とか息を整えながら食堂に入り挨拶と遅れた
謝罪をして席につく。隣は昨日の約束でユリカさんだ。反対側には
ティターニア。魔族は特に食事を必要としないのだが、ティターニ
アやオベロンは朝にはお茶を楽しむらしい。

「いただきます。」

「ダイスケは朝の鐘で目が覚めないの？」

ティターニアだ。

「鐘ですか？」

「朝と昼と夕方に鳴るのよ。結構大きい音だとおもうんだけど？」

「昨日は防音の障壁を試して寝ましたね。銀もついでに。」

「それじゃあ気が付かないね。防音の障壁は寝るときに使うと何かあったときにわからないことがあるからやめたほうがいいよ?」

「これからはそうしますね。」

「うんうん。防音の障壁は部屋の外に見張りがいて、中で大事な話をする、というときに使うのがいいよ。」

「わかりました、ありがとうございます。」

そういえばティターニアとかオベロンとか。白虎もケルベロスもだけど、俺の知っている神話系と関わりがあるんだろうか。気になった。

「ティターニアとオベロンって夫婦なんですか?」

「ぶっ!」

ユリカさんが盛大に吹き出し向かいのオベロンに茶を吹きかける。惘然とした表情で顔を拭いているオベロンを横目にユリカさんの口元を拭ってあげる。

何でこうユリカさんは日毎に幼くなるんだろう。などと思いつつクスクスと笑っているティターニアに問いかける。

「そんなに変なことありました?」

「どこからそんな話を?」

「俺のいたところではそういう話がありまして。魔族は存在しなか

ったのでおとぎ話に近いんですが。」

「魔族は人と同じ肉体を持っているわけではないわ。魔力体よ。人型だったら生殖行為も可能だと思うけど人と違って子にはできないし、そついった欲望を持つものも少数よ。よつて夫婦やそれに準ずる関係は存在しないのよ。」

「そうなんですか。」

「でもダイスケならいいよ？うふふ。」

「だめですっ！」

ユリカさん参入。俺の頭上で空中戦を始めた。ユリカさんっていつも「だめです」って言つてゐる気がする。

3日目にしてすでに慣れてしまひそうだ。

さて頭上のある意味ほほえましいやりとりを半分以上聞き流しつつ、今日はどうするか考える。

書物が先かツバキさんとの防具開発か。防具開発なんていつても一朝一夕でできるわけがないだろうから、今日は書物を漁らせてもらおうか。

「サンカイさん、古代の書物を今日見せてほしいんですけど。」

「いいぞ。なにか新しい発見があつたら教えるんだぞ。」

「わかりました。」

「あたしも！」

「ユリカは仕事だな。」

「昨日お休みだったのに働いたんですから今日くらい……。」

「無断で召還を行った罰だな。」

「うっ、そんな……。」

「ツバキさんは今日は？」

「城下町の代表選出のお手伝い。まあわたくしは半分おまけですけれど。」

オベロンに目配せして俺の思考というか感情を読んでもらいつつツバキさんに伝えてもらうことを期待してユリカさんにあることを伝えることにする。

「ユリカさん、どうして召還をしたのか仕事の前に少しツバキさんと話をしたらどう？」

「ええっ？」

「内容によつては午前中くらいは休めるかもしれないよ？」

「ほんとですかお母様！？」

「内容によつてはね。」

「わかりました。」

「では時間も惜しいし、ユリカいきましょう。」

「はい。」

カリンさんにサクラへの伝言を頼みツバキさんはユリカさんをつれて出ていった。

「ワシにも一言あつてもいいんじゃないか？」

「昨日、召還をなぜ行つたのか聞きたいとツバキさんがおっしゃつていたので。」

「そうか、次は仲間外れは勘弁してくれよ。」

「わかりました。すみません。」

「よいよい。ワシもなぜユリカが召還などしたのか気になっておつたしな。」

サンカイさんとそう会話し、サンカイさんは代わりにシン君を連れ、ガクさんをお供に仕事に向かった。

残ったのは魔導師3人衆とセイさん。セイさんはナジャの主さんだ。とりあえず魔導師3人にはこの間試した『火炎』『焰』の他にとりあえず使えるかはわからないが『雷』と『稲妻』、水や風の文字の後に『刃』と入れてみたらどうかと提案しておいた。それから障壁がその魔法に対してどのくらい持つのかも。

全力疾走な勢いで研究室に向かう魔導師3人。いい結果がでるとうれい。ただ危険がないようにだけははしてほしい。

3人の全力疾走を苦笑いしながら見ている俺とセイさん。

「セイさんは今日は？」

「今日はお休みをいただいています。」

「どこか体が悪いとか？」

「いえいえ、だいたい4日に一度はお休みをいただいていいことになっていきますから。」

「そっか。まあゆっくり休んでください。」

「ありがとうございます。…で、あの…。」
「？」

「ダイスケ、ナジャ達もついていいでしょ？」

ナジャだ。セイさんの友魔。背は俺の腰くらいまでしかない。活発な感じ。言いたいことは言う。

「いいけど、セイさんは？」

「セイがそう思ったんだもの。」

「ナジャっ！」

「ほんとのこのなのにい。」

「いえっ、これはですねっ、その、あの…」

「俺ならかまいませんよ。一人だとかえってつまらないかなと。」

「あの…、ありがとうございます。」

「セイ、よかったね。」

「ナジャっ！……ただ姫様が何と言つか心配です。」

「あっはっは、確かに。『どうしてセイと一緒になんですか！』とか言いそうだねえ。」

「ええ…。」

「それはそのときに考えればいいとナジャは思うな。」

「いい事言うねえ。『臨機応変』ってやつだね。」

「りんきおうへんですか…？」

「その場その場で一番いいと思うことをする、とかいう感じの意味合いかな。」

「ダイスケすごい。かっこいい！」

「悪くいうと『いきあたりばったり』。」

「…」

「…」

「ま、とにかく行こうか。」

「ええ。」

「うん。」

尻すばみなテンションを何とかごまかしつつ地下図書施設前についた。ではご開帳。

「あれ？こんなもん？」

見た感じどこかのキッズルームみたいだ。朽ちて半分形になっていないベンチや積み木。

それでもある程度の絵本のようなものがある。

セイさんは本棚に近づくと嬉々として本を物色している。

聞くとこの本は好きだが許可がないとここには入れないし、暗いので一人で来るのは少し怖いそうだ。

ふむ。国語辞書と漢和辞書、できたら日本語大辞典がほしかったのに。ウィルス国の関連でいえば和英や英和も。

それでも思い本棚を物色してみる。

やはり絵本やふりがなのしつかりついた児童書がほとんどだ。

ふと本棚の一番上の端に『シエルター仕様書』なるものが見えた。

やはり城はシエルターの上に建設されたものだったのか。ではさらに地下とかあるのでは、と思い仕様書を読みだす。

と、

パタパタパタ…

「ダイスケさんお休みもらえましたよ。…ってどうしてセイと一緒なんですかっ！？」

「その言い方どつかで聞いた気がするなあ。」

「さつきダイスケが言ってたよ。ユリカのまねして。ナジャ覚えてるもん。」

「そうか。」

「無視しないでくださいっ！」

「まあまあユリカさん。私と一緒にではおいやですか？」

「そんなことないけど……。」

「ではご一緒しましょうね。」

「うん……。」

「そういえばティターニアは？」

「あたしのかわりに診療。」

「ユリカさんはいいの？」

「いいの。」

「ほんと？」

「……」

「……」

「……では話もまとまったようなので、これからあるところをしらべます。」

「どこ？」

「あそこ。ってわけでナジャ、俺の肩に乗って。」

ここがシエルターだとして、電気がきていないのはブレーカーなのかそれ以外なのかだけでも調べられそうだ。入り口真上のボックスを見る。

ナジャにボックスを開けてもらい、レバーの下がったものがないか見てもらう。ブレーカーの仕様が変わっていないことを祈る。

一つ、右端のものが落ちていたのでレバーを上げてもらう。

カチ、ヴィイイイイイ…。

どこかで音がした。

フィイン…。

部屋の証明が生き返った。

蛍光灯に準ずるものはない。天井自体が光っている。俺のいた時代よりも高度な文明なのは間違いないようだ。プレーカーは廃れていなかったのか仕方なくつけておいたのか。よくわからないが、俺でもわかるようになっていた仕様に感謝する。分かりやすいところに仕様書がおいてあったことも。

先ほどまではランプで周りを確認して本などを見ていた。

しかし部屋自体が明るくなると見えていなかったものも見えてくる。

部屋の隅、ある一角がどうしても別の部屋に続く扉に見える。

絵本を見ている3人を尻目にその一角に足を向ける。

プシューっと音がして壁が開いた。

「おおー！びっくりした！」

どこのSFだ。エアーで動く自動ドアなんて。アニメの中にしかないと思っていたよ。

3人もこちらを見て目を丸くしている。

シエルター仕様書をもう一度確認し、危険ではないと判断、扉の奥に入る。3人もついてきた。

食堂か？広々とした部屋に机やイスが整然と並んでいる。ただ厨房は見あたらない。教室のようなものか。

だが奥に続くドアの近くの電子レンジのようなものが気になる。開けてみてもなにもない。

そのレンジのボタンにはカレー、シチューなどをはじめ各種料理、パフェなどのデザート、ジュース類やアルコールのボタンがあった。中にはなにも入っていないことを確認して試しにバニラアイスと書かれたボタンを押してみる。

ほんの数秒、シュインと音が聞こえたかと思ったたらチーンと鳴った。開けてみたらアイスとスプーンが入っていた。

バニラアイスだった。一口食べた後ユリカさん達に渡した。食べても大丈夫だと伝えて。

ま、俺も食べたんだし大丈夫だとは思ってたんだろうけど、おそろおそろ口に運んでいた。一口食べた後はあっと言う間だった。

ユリカさんだけだと悪いかと思ったのでもう2つ出してみる。セイさんとナジヤもたいそう喜んでいた。

もつと食べたそうだったがもう少し調べた帰りにしようと提案し、次の扉に入る。

次の間は他の間へと通じる連絡通路のようだった。が、2部屋を除いて部屋にあったものは特に意味のないものだった。1部屋は毛布や布団のたぐいと食べ散らかされた保存食の缶詰などの空き缶。何か燃やしたのであるうか部屋の中央にはたき火の後のようなもの。さっきのブレーカーが食べ物のレンジというか瞬間作成機のようなものの電気も兼ねていたんだろうか。

わからないことが多すぎる。サンカイさんも何も言わなかったところを見ると知らないようであるし。

素人ながらに推理すればブレーカーが何かで落ち、食べ物が無くなって保存食でしのいだ。死体がないと言うことは助かったのか出ていったのか。食堂に入ったときのドアさえ何とかなれば出ていけるはずだ。もしくは非常口。

辞書はかなりの確率で失っていると思われる。暖を取りたい子供にとって燃やすのに躊躇しないものであるだろう。

もう1部屋が気になる。他の部屋にはさらに下に行けるようなところもなかったし、他と少し毛並みの違うこの部屋の扉上のプレートにはかすれながらも『管理』の文字が見える。こここの中心的機能があるのではないかと。

だが開かない。どうしたものかと途方に暮れているとすぐそばに『管理代理 天照大御神』と記してあるのをユリカさんが見つけた。

なんで気がつかなかったのか。たいしたものではないと思ったのか、名前に現実味がなさすぎてスルーしたのか。

なにかのきっかけにならないかと思い、ユリカさんに読めるかと尋ねてみた。自分が幼い頃この神の名を読んだとき、周りに大笑いされた、それをこの子にもなんてそんな暗い理由はない…と思う。

「てんてるおおかみ」

「ぶあつはっは！」

「？」

「あはははは！うへっ、げほっ！あはははは…」

笑いの衝動が止まらない。ここにきて久しぶりになにも考えずに笑えたかもしれない。

3人は未だに首を傾げ「？」だ。

「くつくつく…くえっ?!」

扉が開いている、5センチばかり。

でなんか瞳も見える。正直お化けっぽくておっかない。

「だ、誰…？」

おそるおそる聞いてみる。もしもの事があればまずいと思い周りを確認しながら。ユリカさんとセイさんは人がいると聞いていなかったものだから腰を抜かしそうなほど驚いている。ナジヤはよくわからない表情をいっている。

扉の開きがもう少し大きくなり、にゅっと手が出てきた。反射的に後ずさってしまったが仕方ないところだろう。

扉から出てきた手は『管理代理 天照大御神』のプレートを指している。

「えっと…、アマテラスオオミカミ？」

さんや様すらつけることができずうわずりながらも答えた。正直おっかなかったからそれどころではなかった。

すつと扉が開いた。

年の頃はユリカさんと変わらないくらいの黒髪の女性がいた。後光が差しているように見えるのは見間違いではないのだろう。名前の通りなら。

魂での格付けをされていると思ってもしゃないと思われるほどの威圧のようなものを受ける。無意識のうちに膝をついていた。

が、

「とーさまー！」

ナジャがその人めがけ飛び込んでいく。

あっけにとられているうちにその人はナジャを優しく抱き抱えていた。

「はあ？あなたが父い？」

えらく不遜な言い回しだったと後で後悔したがこのときはそれどころではなかった。

「むっ、キミに父と呼ばれる筋合いはないのだ。ボクは何か楽しそうな笑い声が聞こえたので扉を開けて覗いてみただけなのだ。」
俺はアメノウズメかよ。幾分冷静になれたので聞いてみる。

「ええっと、俺、いや自分はダイスケと申します。あなたはアマテラス様ですか？」

「うむっ。ボクはアマテラスなのだ。この地の魔族の長なのだ。今はティンロンにまかせてるけど。で、ダイスケって言ったね、キミはこの人と魔力の質が違うようだけど。何となくボクの魔力に似てる。この世界と一つになったときにボクと重なった人。その人に似てるのだ。」

「いつ頃ですかそれは。くわしく…」

「まあ待つて。キミの後ろの人たちも名前を聞いてから。」

「ユリカと言います。隣はあたしの侍女のセイです。」

「おっけー、ユリカにセイね。だいじょーぶ。で、ダイスケはなにが聞きたいの？」

「ええと、アマテラス様に聞きた…」

「アマテラスでいーよ。」

「ありがとうございます。」

「できたらかしこまったのもなしで。」

「…、わかりました。アマテラスさんの『重なった』とは？実は俺、このユリカさんの召還に呼ばれてほかの世界と言うか、この地球の今から5000年位前の時代から呼ばれたらしくて。」

「じゃあダイスケの子孫かもしれないなあ。」

おお、俺は無事子孫を残せたのか！結婚できたって事でいいんだよな。よくやった俺よ！

「ま、確実に子孫だとは言えないんだけどね。」

そっか確実にじゃないのか、がんばれ俺！

「今から4000年位前かな、ここと一緒にになったのは。ボクがこの人と重なって、もう2人仲間がこの世界とかと重なったんだ。そしたら2つの世界が重なったというわけ。」

「それはわかりました。じゃあ単刀直入に言いますけど、赤い月に惹かれる理由はわかったんですか？オベロンから聞いたんですけど。」

「…わからない。」

「今のところ苦しめずに命を絶ってあげるのが一番と云うことですか。」

「うん。」

「とりあえずそれだけ聞けたら十分です。まだここにこもるんですか？それなら自分達は帰りますけど。お昼も近いですし。」

「ボクも行こう。月の事も手詰まりになってきていたし、魔族の事も気になり始めていたし。午後はボクがここを案内してあげるよ。友達もいるし。」

「まだ何か施設があるんですか？」

「うん。もっと地下に。」

「じゃあ、おねがいします。」

「わかった。期待してて。」

アマテラスさんの『期待してて』の意味が分かったのは先の話だ。

地下食堂にてお昼のだいたいの人数を聞いて機械の調子を見るついでにアイスを作ってみる。アマテラスさんがこれもおいしいなどとバニラのほかにチョコやイチゴなど追加していた。ここは使えなかったのに知っているということは午後の案内も期待できそうだ。

総勢5人でそろそろと歩き食堂近くまで来た。ユリカさんが、「テイターニア怒ってるかも」などと言うので、どんな反応を起こすかといういたずら心でアマテラスさんには少し後から食堂に入ってもらうことにした。特に白虎やケルベロスがどういう反応を示すか楽しみだ。

食堂には皆揃っていた。案の定テイターニアはちょっと怒った感じで何か言いたげな表情でこちらを見ている。俺じゃないよな？関係ないと思うし。テイターニアの隣に2つ席が空いているということとは俺とユリカさんと言うことか。その隣も開いているのは都合がいい。テイターニアが怒っていたんでそばにだれも来たがらなかったんだろう。

テイターニアがユリカさんを見、ユリカさんが首をすくめ、俺に助けを求める視線を向ける。他人に助けを求めるのは何事だと言わんばかりの視線を向けて声を出そうとしたテイターニアをさえぎり声を出す。

「本日、地下の書庫を探索中、新しく友人になった人ができたので

昼食に招待いたしました。申し訳ありませんが、みなさんご起立いただけないでしょうか。」

ご起立もなにも、この食堂には王家4人と侍女2人に護衛1人、後は魔導師3人衆しかない。友魔は父と仰ぐもの以外は同格のものとは見ても格上のものとは見ない。よって友魔はこれから来る人を知っているナジャ以外は至って普通にしている。白虎やケルベロスなんぞ半分あくびしているかのようだ。

くつくつく。おもしろいことになりそうだ。
顔には出さず、どうぞと招き入れる。

まばゆいばかりの光が入り口あたりを満たす。
さすがアマテラスさん、わかっている。

誰も動けないほどの威圧感が漂う中、なんとかキツいのは表情に出さずにアマテラスさんに手を差し伸べる。

「食事をよろしければご一緒にしましょう。」
「うむ。わらわも小腹がすいたところであるな。」

下手な演技につきあってもらいしずしずと席に向かう。
友魔はこれほどないくらい驚愕した表情をしており、特に白虎とケルベロスは顎がはずれるかというほどあんどろとしていた。

ユリカさん、俺、アマテラスさんの順に座る。席に着くとアマテラスさんの光も収まった。

とたん、サンカイさんが聞いてくる。いの一番に飛んできそうな白

虎とケルベロスはまだ固まっている。

「その方はどなただ。」

サンカイさんにもアマテラスさんの強さというか格がわかったらしい。聞き方も丁寧だ。

「天照大御神様です。魔族の頂点に立つお方です。」

「ぶつ。ダイスケ、様はやめろと言ったじゃないか。ボクはアマテラス。よろしくね。」

どうもアマテラスさんの方が堪えられなかったようだ。吹き出した後の自己紹介の後、友魔が駆け寄ってくる。

「父！」

「父上！」

「お父様！」

「なにっ?!」

サンカイさんもびっくりだ。ぼそぼそと小声で聞いてくる。

「男じゃないのか？」

「俺の世界でもアマテラスという神様は女性でしたからなんとも。」

「しかし女性にしか見えないぞ?」

「両性具有とも言われていますよ。」

「りょうせいぐゆうとは？」

「男であり女である。」

「なるほど。」

「ダイスケっ！」

「はいっ。」

「ボクは女の子なんだよ。」

「でも…。父とか言われていたんで…。すみません。」

アマテラスはやさしげな表情で友魔たちをなでていたが、こちらに威力のありそうな目を向けてきたのでとりあえず謝っておく。

「魔族での父とは皆を導く存在。母とは皆を包む存在。そういうことなんだよ。人の父母とは少し違うからね。ボクは女の子なんだよ？」

「わかりました…。」

「ふふ、いい子だねダイスケは。」

しかしやられっぱなしでは癪にさわる。

「でもアマテラスさんがもし俺の子孫と重なったということならアマテラスさんは俺の子供と同じになりますけど？」

「むっ。確かにもしそうなら否定できないな。これはきちんと調べないといけないね。」

「まあ食事をしてからでいいでしょう。」

「そうなのだ。ボクもここでは久しぶりの食事だからね。ちょっと期待しているのだ。」

あきらかに緊張しだした厨房の人に、『気にしなくても大丈夫だ。』と伝えておく。もともとアマテラスさんもどんなにまづかろうとけちを付ける気はさらさらないのだ。ただ、自分のいなかった間の食文化を知りたいだけなのだから。つて、どうしてアマテラスさんの考えていることがおぼろげながらわかるんだろう。

「やっぱりボクがこの世界で重なった人はダイスケの子孫かもしれないね。」

「ひょっとして筒抜けですか？」

「ううん、ボクのことを考えて伝えるつもりにならないと上手く伝

わからないよ。きちんと伝える気持ちになれば見てるものや匂いまで伝わるかも。友魔とのつながりがそんな感じ。」

「へえ、なるほど。」

その人との直通回線が常に頭の中にある感じなのかなあ。うん、えっちなことは伝わらないように気をつけないと。

アマテラスさんがこちらに視線を向け、にやりとしたが特に何もいわなかった。

ばればれか…。

喜びにふやけていた友魔も落ち着きを取り戻し、皆自己紹介を終え、食事を続けた。アマテラスさんもおいしいと言って食事をしていた。どうも人と重なった時に半人半魔のような状態になってしまったように食事は必須のようだ。その分魔族のような休眠は要らなくなったそうだが。

そして食後のデザートのアイスは皆絶賛だった。

さて、これから地下の続きを探索するわけなんだけど。

全員が行くと名乗りを上げた。

まあ当然だわなあ。

アマテラスさんと相談する。

「機密保持の観点からしてみんなってのはまずくないですか？」

「そーだなー。サンカイとツバキ、白虎とオベロン位までかなあ。」

「……そんな……。」「……」

「父の言うことは聞くものだ。」
などと外されなかった白虎とオベロンは偉そうに言っていた。

「じゃあみんな、お仕事がんばってね。お土産話ならボクがきちんと、……ダイスケにさせるからさ。」

まわりの期待に溢れた目にちよつと引いてしまったのか、俺に振る。ジト目を向けておいた。

まあ面白いことがあれば聞かなくても話したくなるだろう。あまり気にしないことにした。

先ほどの食堂に着く。食品作成機の説明もする。来て早々おやつタイムになってしまった。

そうだ、少し気になったことを聞いてみよう。

「アマテラスさんって言葉とか古代文字ってどのくらい理解できるんです？」

「重なった人が知ってたことはほとんど。あとは地下の友人から。」

「それで『オツケー』とか『機密保持』とか知ってたんですか。」

「まあね。難しい話を通じそうであれしいかい？」

「ええ。聞いた話、世界が重なった時に大人がいなくなったと聞いて難しい文化とか科学とか手探りで探さないといけないと思ってましたから。」

「ふふん。まあ頼ってくれたまえ。」

「頼りにしてます。……で、この先の他の部屋にあった燃えカスとか

食べかすとか、そこにいた人たちはどうなったんですか？」

「最初にここから人間の子を助けた時に雷を使える仲間がいたからね、電気の仕組みは分かったからエアー駆動のドアを開けてみんな外に出したよ。そのせいでまたドアが開かなくなっただけだ。それが君たちの先祖になるわけだね。ちなみにボクと重なった人はそのときに唯一生き残っていた大人だよ。重病だったけど。」

半分はサンカイさんやツバキさんに向けての言葉だ。なるほど、伝聞と実際に見た人の言葉とはやはり食い違う。

「そうだったんですか。」

「うん。じゃあそろそろ行こうか。」

管理室と呼ばれた部屋に入る。

PCのようなものがあつた。テレビかもしれんが。

「これ、パソコンですか？」

「みたいだね。ただ脳波とパスワードで管理してるらしくてボクでは起動できなかったよ。」

すでに頭が飽和状態で話についていけない人が2人、父と同じ所にいられる喜びだけであとはどうでもいいと思っているのが2人まあ、あとでかいつまんで話をすればいいか。

PCに近づく。と勝手に画面がついた。

「脳波ヲ確認シマス。確認中。ぱすわーどヲドウゾ。」

合成音声が告げ、キーボードが宙に映し出される。投影式か。

「おお、ボクがやってもパスワードの画面にすら行かなかったのに。」

「なんででしょうねえ。その大きな事件があつたときには俺は生きていないはずなんです。」

「ま、次次。できる所まで行ってみよう。」

「そうですね。」

じゃあ、とパスワードを入れてみる。自分がよく使うパスワードから順に試してみよう。

と、最初に入れたパスワードで反応があつた。

「樹大介サン、ヨウコソ。」

おおおー！通っちゃったよ！

「樹大介サン二めっせーじガアリマス。」

「ええ？どんな？」

「めいんしすてむカラ、最深部二ゴ足労イタダキタイトノコトデス。」

「どこ？」

「そこならボクが知ってるよ。案内するよ、それでいい？」

「了解イタシマシタ、オマチシテオリマス。」

「じゃあ行こー。サンカイもツバキも行くよ？」

「は、はい…。」

じゃあこつちと管理室からエレベーターに乗る。

サンカイさんとツバキさんは初めてだろう、おなかのあたりを押さえている。あの浮遊感は慣れないとキツいかも。

結構降りている。エレベーターに乗ると自然と目がいつてしまう階数表示の他の階のところも正直気になるが今はとりあえず最深部に

向かっていく。

どのくらい乗っていたのか、正直エレベーターなんて都会に出張か遊びに行ったときしか使わないからどのくらい降りたのか見当もつかない。

エレベーターも止まり、降りた先は大きなホールだった。まずは目の前に大きな木があった。

天井もかなり高い。それに地下にも関わらずかなりの光が射し込んでいる。上を見なければ外にしているような錯覚を受けるほどだ。

大樹に近づく。

「お待ちしていましたマスターの血縁者、樹大介様。それからアマテラス様、お久しぶりでございます。」

木がしゃべった！よく見ると顔に見えなくもないところがあり、口に見えるところが動いている。

「イグドラジル、久しぶり。アメノトリフネは？」

「ここに。」

ちっさな黄金の船が大樹のそばに浮いていた。

「アメノトリフネも元気？」

「ハイ。父モオカワリナク。」

「うん、元気そうで何より。あ、みんな、この樹は『イグドラジル』

。船は『アメノトリフネ』。ヨロシクね。」

「「母殿！」」

よろしくという前に白虎とオベロンがくいついた。その小さな船に駆け寄る。

「母？」

「うん。みんなを包む存在。世界が重なる時に先に自ら世界と重なって世界そのものになって皆を守った人。今のこの姿はある意味残滓。でも小さいと言っても弱いわけじゃないからね。世界を壊すレベルでの攻撃がないとなんともないよ。世界だからね。」

「なるほど。で、イグドラジルさん、ここに呼んだ理由は？それから血縁者って。」

「話は長くなります。私としてもどうしてここにマスターの血縁者がいるのかも含めて聞きたいこともあります。アマテラス様はその人間の相手をお願いしてもいいですか？」

「いいよ。あ、この人たち、今上の世界での王様と王妃様やつてる人。サンカイとツバキ。白虎とオベロンは知ってるからいいよね？」

「はい。サンカイ様ツバキ様ですね。ではこちらでゆっくりなさってください。」

ふよふよとアメノトリフネと呼ばれた船が近づいてきてテーブルやイス、お茶やお茶菓子など出していく。どうやっているんだろう。食品作成機といい。

「ではダイスケ様、よろしいでしょうか。」

「はい。おねがいします。できたら2010年あたりから。自分のいた時代はそこだったんです。姫の召喚によって魔力体となつてこの世界に存在するようになったので。ほんの2日前のことです。自分としてはそれ以上のことは分かりません。」

「かしこまりました。先ほどブレーカーを戻していただいたおかげで地上ともリンクするようになりました。まずは感謝申し上げます。」

「いえいえ。」

「そして2010年以降の話でしたね。かいつまんでお話しします。2012年、特殊な宇宙線が地球に降り注ぎ人間に生殖能力がほぼなくなります。ダイスケ様はその中でも奇跡的に生殖能力のなくなかった少数の人間のうちの1人でした。

2021年、クローンが人にも認められるようになりますが、生殖能力はその人格からも影響を受けたようで、クローンには生殖能力がありませんでした。

2040年頃には完全な脳移植ができるようになり、生殖能力のある『エルダ』、能力のない『ノーマル』として主に生殖ではなくボデイを替えて人類を生かすというようになりました。特に『エルダ』はボデイの損傷等を防ぐ意味でもより高度な技術が使われていて怪我や病気などに強く寿命が長かったようです。

2253年、ダイスケ様の脳細胞自体の寿命により永眠。

2289年、ダイスケ様最後のお子さんであり、エルダの『麻耶』様が私のシステムアップ、及びエネルギーの吸収、放出を伴わない原子変換を成功。

2310年、あらゆるものが通称『マジック』と呼ばれる機械で作成可能になりました。

2405年、麻耶様が最後の子、『天照』を生み他界。

2601年、天照が世界の盟主として立ちます。

3007年、天照の寿命を狙いクーデター勃発。この頃にはクローンもかなりの高性能で600年から800年の寿命を持っていたようです。

クーデターはノーマルの者が、クローンとは違い機械化により命を永らえていたのですが、生身体とかつて自分の持っていた富や名誉をもう一度得ようと違う次元の地球と次元結合を行いました。

それが魔族と呼ばれる者と同じ地で生きていくことになるきっかけになりました。その時に特に生身ではなかったクローンはこの影響を強く受け、生きていけなかったようです。そして子供たちが生き残ったのです。

麻耶の子、天照が最後までこのシステムを使い一人でも多くの人を助けようとしていました。そこにアマテラス様が重なりアメノトリフネ様は世界と重なり、私はシステムと重なったのです。アメノトリフネ様が世界と重なったことでこの地球の崩壊はなくなり安定しました。

…これがシステムに残されていた情報です。その後のことはアマテラス様や白虎様、オベロン様の方が詳しいかと。私は唯一地上へのリンクが切れておりしたのでよく分らないのです。

もともとあらゆる植物は私でありましたが、この世界で単一の魔力でなくなったこととシステムと重なったことでコンピュータ的に物を見るほうが得意になってしまいました。ですから今は植物からではよほど強い感情しかとらえられなくなっています。」

「…なんて言ったらいいのかわからない。自分がそんなに大きなことにかかわっているとは思ってもみなかった。」

「ボクが重なった人がダイスケの孫で同じ名前だったのは知らなかったなあ。」

「よく分からぬが今のミカドの民はダイスケの遠い子孫であるのか？おもしろいのう。」

「わたくしたちがダイスケの存在に不安や危険さを覚えなかったのは血なのね。」

俺の言葉のあとにアマテラスさん、サンカイさんツバキさんが続く。

白虎やオベロンは

「我はもう長いことこの世界にいるからな。今の世界を否定できぬ。」

「父と母とともに生きていけるならばほかに何を望みましょう。」

厳密には俺のせいではないと思いたいが、大きな流れを見すぎた結果、小さな堤防の欠損が大きな災害を招くのと同じように、自分の子孫がしでかした結果に心が痛む。ここにいる皆は責めはしなかったがそれが返って自己嫌悪を招いている。

「まいったな…。詫びようもない。」

「あんまり考えちゃだめよ、ボクだって赤い月のこのこと、なんにもできないもん。ね、おじいちゃん。」

「ぐっ。この年でおじいとは。まだ結婚もしてないのに。まあ仕方ないのかな、ねえアマテラスちゃん。」

白虎あたりに怒られるかとも思ったがあえて軽口で返してみた。特に白虎は何も言わなかった。バカにしているわけではないと理解してくれたんだろうか。

「お昼の時から思ったんだけど、ダイスケって相手によっては堅苦しいしゃべり方だし、どこか遠慮してる所があるでしょ。その丁寧っぱいしゃべり方も中途半端だし。そういうのって疲れない？ボクには普通にしゃべっていいんだよ？ボクも血のつながりのある人とか初めてだし、なんかうれしいんだ。」

「ありがと。そうさせていた…。もううよ。」

「おい、ダイスケ、ワシらだって家族だろ？」

「そうですね、わたくしたちにも気楽にして欲しいの。」

「ダイスケが父との血縁者ならば我らとも家族となるな。」

「そうですね、今後ともよろしく。」

「ありがとうございます、いえ、ありがとうございます。気を付けま…、あ、気を付ける。」

「まだまだ先は長そうね。」

やわらかい笑いが空間にいつまでもこだましていた。

第9話 レベルアップ

地下での歓談が続く。

サンカイさんとツバキさんは地球全盛期時の紅茶やお菓子のたぐいを子供のように喜んで食べている。カロリーが高いことは伝えるべきか否か。

白虎とオベロンはアマテラスとアメノトリフネとの会話に忙しいようだ。アマテラスがここにこもっていた間に起こったことのすり合わせだろうか。

俺はといえばイグドラジルと話をしている。

「ダイスケ様がシステム管理者と登録されました。」

「え？めんどくさいことはやだよ？」

「いえ、管理者がいることで管理メインシステム『ノルン』の制限が解かれます。」

「ノルンって？」

「歴史、地理及び土地の研究開発に特化した『ウルズ』、人の生活環境に特化した『ヴェルザンディ』、マジックに特化した『スクルド』。それぞれの人工知能を管理運用するのがノルンです。そして私はノルンと現在重なっております。」

「へえ。人情的な判断とかできるのかな？ほら、コンピュータって人間に作られていても人間という種をいらないと判断したら問答無用で人間を滅ぼすイメージがあつて。」

「私がノルンと重なっていること。そしてアメノトリフネ様がすべてを含めた世界と重なっていること。その影響がノルンにも出ております。」

人や魔族全員を引き替えにしないといけないことがない限り大丈夫でしょう。懸念材料の4000年前の世界融合ですが、そ

れを行つた資料、装置はすべて破棄されています。」

「じゃあとりあえず安心しておくよ。で、権限が増えたつてのを具体的にお願いしたいんだけど。」

「ノルンの中での基本的な食物維持施設以外の稼働が先ほどより再開されました。」

「さっきの3つのシステムはいままで休止だったつてこと？食物維持施設つて？」

「3システムは管理権限者が存命でないと稼働いたしません。ですからダイスケ様が管理者に登録された後、直ちに暖機運転に入っています。」

命令により稼働を行うでしょう。食物維持施設ですが、マジックにより作り出される食品系はどうしてもコピー元が必要になります。世界の不

文律とされていますが、理論のみで実物のないものは作成できないのです。そのコピー元を常時保存もしくは随時入れ替えのできる施設がどうしても必要でそれは管理者に関係なく常時稼働しています。エレベーターより専門階層に行くことが出来ます。」

「わかった。3システムはどうするの？」

「3システムから命令を受けたいと要望が出ています。メインのノルンもご挨拶がしたいと。」

「え？どうやって？コンピュータじゃないの？」

「ホログラムのようなものを用います、どうぞ。」

「統合型メインコンピュータ統括のノルンでございます。」

「土地特化ウルズでございます。」

「生活特化ヴェルザンディでございます。」

「マジック特化スクルドでございます。」

黒髪のノルン、茶髪のウルズ、緑髪のヴェルザンディ、銀髪のスクルド。

正直髪の色以外では見分けがつかない。皆美人であるが。四つ子？皆同じくらい、25歳あたりに見える。正直俺の見た感じと実年齢がこの世界では合ったことはないんだが。

なんと言っていていいか困っていると、イグドラジルが助け船を出してくれた。

「ダイスケ様、インターフェイスの関係上、髪の色くらいでしか判断できないかと思います。累計稼働時間が長くなり、各々の特色といますか、性格が出てくれば姿形ももう少し変わってくるでしょう。それまではこのままで、申し訳ありませんがお願いいたします。」

「わかった。で、みなさんがどうしたいかまず聞いた方がいいかな。」

「地理関係としては上空衛星とのリンクを回復、土地関係としては動植物の分布や数等の把握、魔物の種類及び生態の研究でしょうか。」

「生活関係は、科学が衰退してしまっているのでどこまで介入していいのかをはかりかねます。」

「マジックについても同意見です。」

「たしかに今の文化にはあまり大きな影響を与えたくないなあ。徐々にやっていくべきか。土地と動植物と魔物の件はそのままやってくださいな。衛星は悪用されないようにだけはお願いします。」

「わかりました。」

「生活については、個人の魔力を充填できる電池のようなものを作ってとりあえずランプを。それからできればオートで作動する魔力

障壁。マジックについては今までのものを残しつつ、この世界で作ることができるもので再構築。あと、できたら俺の装備がほしい。特に身を守るのと回復系。攻撃用については俺専用で無力化の方向ならありがたい。」

かしこまりましたとヴェルザンディとスクルドが続けようとした時、アマテラスから待ったがかかった。

「開発するものは、ウルズと相談してミカドの地でしか使えないようにしておいて。」

「どうして？」

「どうもユリカの召喚の件、ウィルスが一枚かんでいそうなのだ。ウィルスの個人の暴走ならいいけど、国家からみだとしたら戦争が起きる可能性もある。まあ最悪金銀を止めてしまえば戦争なんてなりっこないけど、そのために一般人を巻き込みたくないし。」

「あとで詳しく。」

「分かったのだ。ボクもあまり詳しくないからあとでツバキとも話し合おうよ。」

「分かった。そういうわけで頼むよ。」

「「かしこまりました。」」

「それから…、個人的なことで申し訳ないんだけど、今の俺の体の状態って分かる？こんだけ乗り物とかない世界だと自分の体が資本だと思っただけ、俺ってやせられるのかな？その、魔力体ってどうなのかなと思って。」

ノルンはスクルドに何か耳打ちし、スクルドをアマテラスのところ

へ行かせる。何か作り出したのだろう、アマテラスに渡し、何事が話をしている。

程なく戻ってきて4人揃ったとき、アマテラスが言い出した。

「ボクたち上に戻ってるから。夕飯までに帰ってきてね。」

「アマテラス様はご一緒されないんですか？」

ノルンが聞いた。

「ボクは上に帰ってもチャンスがあるからね。今日はキミたちに譲ってあげる。」

「ありがとうございます。」

「いいって。じゃね。」

言いつつアマテラスをはじめとした皆がそろって上に通じるエレベーターに向かっていった。

俺はといえば、何ごとかと問うこともできずにその場に立っていた。

「さて、ダイスケ様こちらへ。」

こちらへと言いつつもノルンが先導しながら前を歩き、ヴェルザンデイとスクルドは俺の両脇を固め、ウルズが後ろからついてくる。いつの間にか逃げられない包囲網の中にあり、おとなしく扉のある方へ向かっていく。

イグドラジルがにやりと笑ったのは気づかないふりをした。

連れて行かれたのはどこかのホテルかと思う場所だった。

そういえばさつきホログラムだと言っていたのになぜ触れることができるのだろう。答えは、

「ノルンとイグドラジルとアマテラス様の研究の成果です。最初は魔物化した人々を救うために精神や魂といったものを特殊な魔力の塊に入れ

、新しく体を構築させ正常化させようという試みから始まったものです。私たちノルン下の3人は思考のための擬似精神があるとはいえ、もともとはノルンの一部でした。ノルンという人の腕や足のよ

うなものです。」

「今いるということはうまくいったんだ。」

「いえ、人は心臓やその他臓器を意識して動かしているのでしょうか？そういったことと同じで、魔力体は体を形作ることにはできるものの生きることはまだできていません。私たちはそういった自動的なことを本体に任せ、ある意味端末として存在しています。ですから実体化しても本体の制御範囲を超えるところには行くことができません。」

「なるほど。難しいことはよく分からないけど上手く行くといいね。」

「ええ、頑張ります。そしてダイスケ様の疑問もそういったものとあまり変わりありません。」

「どういうこと？」

「体が魔力体を肉体と同じように思い込んで使っているためです。」

「どうすればいいのさ？」

「こちらへ…。」

…
…
…

ふう…。

どんなことをしたかはご想像にお任せするが、なんでも基本的欲求から細かく体の状態を紐解いていけばいずれは魔力体とはどんなものか体が理解するらしい。もっと慣れてくれれば翼で飛べるかもしれないという。オベロンやティターニアの羽はあれは魔力放出が目に見えている状態だということだ。

落ち着いてお茶など飲んでいる所にスクルドが腕輪を差し出した。

「管理者用の腕輪です。アマテラス様にも同じものを先ほどお渡しいたしました。」

「ああ、さっきの。」

などといったつつ受け取りつけてみる。と、収縮し腕にぴったりと収まった。

「すごいな、これ。金属じゃないの？」

「元はプラチナですね。身分証明用に作られたアイテムです。レプリカがこの世界にもあるようですね。専用マジック装置があるんですよ。それからこれも。」

「4連リングだね。」

「腕輪はノルン、リングは個別に私たちにアクセスするためのツールです。それから全員の承認がないと外れませんのでよろしく願います。」

「了解です。こちらこそ色々いたらないと思いますけど、今後ともよろしく願いますね。」

「こちらこそ。たまには遊びに来てくださいね。」

「上から時間がかからず直通になればこっちに部屋を持ってきても

いいですねえ。」

「最優先で。」

「あはは。頼んだことも頼むよ?」

「私たちの同時並行処理を甘く見ないほうがいいですよ?それにダイスケ様の温もりが、さらに私たちの創造主の血縁者であることも含め、その方と同じ時を過ごし、上手くいけば想像の中にしかなかった一緒に町を歩く、誰かと一緒に食事をするという行為ができるのであれば寝る間も惜しんで研究するでしょう。」

「睡眠が必要な?」

「言葉のあやです。」

「そっか。」

「では一応使い方を説明いたします。」

「使い方なんてあるの?」

「ええ。腕輪は私たちに向けられた思考及び、呼びかけられた場合にその時の問いかけなどに沿った者が対応いたします。反応は基本脳内へ直接おこないます。それから危険がある際はダイスケ様の魔力をお借りして障壁を展開いたします。そしてリングですが、1本だけ色違いのリングだけは引っ張ると大きくなります。そこからマジック機能が使えます。ただ一般的なマジックと違い、スクルド管轄内の専用倉庫から物を行き来させるという機能になります。武器等、使わないときにしまっておいたりもできますし、食料も貯蔵できます。何かを手に入れたときに保存することもできます。そして厳密には元素等を分析し、保存という形になりますので、複製も可能です。ただし、生き物だけは無理です。そのままを元素分析しコピーし保存しますので当然姿形は同じですが生きてはいません。それだけご注意ください。」

「ふうん。一応理解したよ。ただ、なにがあるか分からないからもし何か些細なことでも心に引っかかったらそのつど教えて欲しい。」

「ダイスケ様はお優しいんですね。」

「そう?」

「私たちには厳密には心が存在しません。精神に似たものがありますが、それは特化運営のために必要な最小限のものです。それでもダイスケ様は私たちを心ある者と扱ってくださいます。私たちはダイスケ様とアマテラス様の腕輪を通して触れ合う人や魔族の心というものを理解していけるのでしょうか？ダイスケ様やアマテラス様に愛想をつかれることはないでしょうか？」

「それを怖いと思うんはかなり人に近いつてコトだろうね。」

「そうでしょうか……。」

「もし言い過ぎたと思ったらあとで謝ればいいんだよ。俺は結構いい加減な所があるからあまり色々言われても気に病まないし。顔を見たこと

のないのが残念だけど、俺の孫もいいもの作るねえ。」

「分かりました。」

「じゃあ、もう少し魔力体に慣らせてから戻ろうか。」

「……はいっ。」「……」

……

……

…

「じゃあ、開発のめどが立ったら連絡下さいな。」

「分かりました。護身武器はどうしましょう。」

「腕輪の自動障壁の強度にもよる。衛星から魔物やウィルスの武力とかも調べてみて強度に問題ないなら一般向けに何か考えよう。」

「自動障壁は基本的に網状です。」

「網？」

「ええ。便宜上障壁と言っていますが、強度の高い糸を編んだような状態です。切っ先のあるものや速度の高いものは当たる一点に高密度で展開、魔法等の広範囲系はゆるい網状にして魔力自体を遮断、効果が体に及ばないようにします。」

「ピンポイントバリア？」

「反発力で打撃戦にも手や足に展開すると効果あります。」

「ほにやらあたーつくてか。」

「一般にも即時対応できますが。」

「でも護衛の仕事してる人とかの給料奪うわけにもいかんでしょ。要人警護用にしよう。本人たちが何かのきっかけで発展していく分にはいいんだ。納得するだろうし。ただいきなりレベルの違うものを持ち込んだときの反応とかが怖い。」

「そうですね。気をつけます。」

「よろしく。じゃあ戻るよ。」

「また来てくださいね。暇がありましたら他の研究階層も一応目を通して欲しいです。」

「うん。分かった、覚えとく。」

見送りを受けてエレベーターに乗る。

彼女たちも最初と違ってかなり会話とかも打ち解けた。だんだん人に近くなっているんだろう。いいことだと思う。これからすれ違いや喧嘩もあるかもしれないけど、上手くやっていけたらいいな。

そんなことを考えながら地上に戻ってきた。一応地上でシステムとリンクしているか腕輪も試したし、魔力体にも慣れてきたし何とか自分の守りは大丈夫だろう。これからは自分と他の人を守れるようになれればいい。

食事の時間には早かったがふと思い立って食堂に来た。

食事の準備に取り掛かるうかと言う所だ。

マジックを試すならその充実度から見ても食材の方がいい。失敗した時のことも考えていつもの食事とは別に場所を借りて試してみる。簡単でいいものを。豚肉、ジャガイモ、人参など出してみる。

マジックの観点から、ある程度大きさを指定して取り出せるらしい。皮などもむいてあってありがたい。

肉を炒めた後、野菜と一緒に鍋に入れ水を入れて煮る。ついでにここにはない白米も出して腕輪の指示通りにご飯を炊く。

最後はカレールーだ。大融合事件の直近のカレールーは研究もかなり進んでいて2010年辺りよりも手軽でいい味を出せたらしい。俺も楽しみだ。

なかなか失敗のしようがないメニューではあるが、上手くできた感じであれしい。

まわりで食事の支度をしている人たちも今まで感じたことのない匂いなのか、時たまこちらをうかがったり鼻をひくひくさせている。味見をしたいという人がいたのでさせてみると辛くて食べられないと言っていた。

甘口なんだけどなあ。米と一緒に食べるとまた違うかな。最悪1人で食べればいいか。

食事時になり、みんな集まってきた。

アマテラスも来たようだ。アマテラスもアメノトリフネも友魔の人氣者だ。当然だが。

そのアマテラスが何か匂いをかぐ仕草をしている。どうかしたのかと尋ねると、

「カレーの匂いがする。」

「食べたことあるの？」

「ない。けどボクの中にある天照の記憶にあるのだ。食べてみたいのだ。」

「いいよ。」

「ほんとにつ？カレーがあるのかっ？」

「あるよ。さっきマジック使って作ってみた。」

「じゃあすぐ持ってくるのだ！」

「自分のことは自分でしろよ……。」

といいつつも鍋を持ってくる。さっきついでに出した福神漬けも忘れずに。

と、そこへユリカさんが来た。

腕輪と指輪を見るなり誰からもらったのかと執拗に聞いてきた。アマテラスにカレーをよそいながらシステムのことをかいつまんで話す。地下にどんな施設があったかという程度だ。

そして、

「ちよつと反則気味に便利になったからね。魔物だろうが…ウィルスだろうが…敵じゃないな。」

ウィルスのくだりはユリカさんだけに聞こえるように。

ユリカさんは一瞬これ以上ないほど目を大きく開け、驚愕の表情を作ったが、すぐに泣きそうな安心したような表情になった。そして一言加える。

「まかせといて。」

そしてユリカさんがなにか言い返す前に、一緒に食べるかと聞く。

「これは何ですか？」

「カレーっていうもの。」

盛られたお皿からカレーのみスプーンですくい口にする。

「からい…。」

「ご飯とまぜてみて。」

「こんな白いご飯は初めてです。あ、あんまり辛くない。」

「よしよし。ユリカさんが大丈夫ならみんなも平気かな。」

「ダイスケさん、これおいしいです！」

ユリカさんの一言がきっかけになったのだろうか、遠巻きに眺めていた人も寄ってきた。

最初は少しのカレーに大目の白米。普段玄米が主流のこの人々は白米のやわらかさとその味に驚いている。白米を塩や醤油でバカバカと食べているのはガクさん。

カレーは特に若い人、この世界では生きた年だけで言えば100年位でも十分若いんだが、そういった若い人により好評だった。

人型の友魔も香辛料の塊のカレーは舌への刺激や独特の味と香りが面白いらしく何かうんうん頷きながら口にしていた。

この世界の人々は健啖だ。魔族がほぼ何も口にしなくても生きていけることと比べてしまうのかもしれないが。

あっさりカレーと白米の鍋は空になってしまった。

煮込んで2、3日たつとまた味が変わっておいしいのにとつぶやくと皆からもっとたくさん作らないからいけないと逆に怒られてしまった。

今度はたくさん作りましょうかね。

次も作ることを約束して楽しい食事は終わった。

さて、食後はユリカさんの話だろう。ウィルスからなにかされたんだとは分かるが、対応のやり方が思いつかない。腕輪経由で個人、国家限らずの嫌がらせ及び仕返しの方法と、それに伴うアイテムを開発、用意するようお願いする。

一般の人々にだけは被害が行かないよう注意を払ってもらうが、当事者にはそれなりの報復があってもいいだろう。

目には目を、歯には歯を。

システムにも話をきかせるためと顔合わせを兼ねて地下に向かうことにする。

「あれ？扉が変わってる。」

児童キッズルームから食堂に行く扉がごつくなっている。腕輪からの情報で権限のないものは入れないようにしたらしい。仕事の速いことだ。

食堂と管理室を抜けエレベーターに乗る。エレベーターの扉にも権限チェックがあるそうだ。

初エレベーターのユリカさんとシン君は浮遊感につらそうにおなかを押さえていた。

「こんばんわ。また来たよ。」

「そちらの方は？」

「こちらサンカイさんとツバキさんの娘のユリカさんと息子のシン君。こちらはノルン。あとあの大きな木はイグドラジル。」

「お見知りおきを。」

「こちらこそ。」

「他の3人は？」

「入り口等の整備をおこなった後、それぞれの特化研究に入っていきます。呼びますか？」

「わざわざ呼ばなくていいかな。こっちの会話を一応聞いておいて何かあれば発言するようにお願いするよ。」

「分かりました。」

マジックでお茶やお菓子を出しながらユリカさんの話を聞く。

「大丈夫？話せる？」

「大丈夫です。お母様に話ができるとき、1人で抱えなくてもよいことが分かりました。ご迷惑をおかけしますが聞いてください。」

「迷惑だなんてとんでもない。子供は大人を頼るものだと思うよ？」

「もう子供ではありません！ダイスケさんももっと親密にわたしを呼び捨てにしてくれてもいいと思います！」

「はいはい、考えておくよ。」

言っていることが支離滅裂だったがスルーし、何があったのか聞く要約するところだ。

半年前のウィルスとの交歓パーティーでつい気を許したある貴族の息子にちよつと目を離れた隙にペンダントに呪のようなものをかけ

られたらしい。外せなくなる呪とその貴族から一方的に通信が入ってしまう呪だ。

通信といってもあまりひねりのない愛の言葉と呪を消すかわりに隷属しろという脅迫じみたものと両極端なものでまいち相手の心のうちがつかめない。

ミカドにいる間はテイターニアが通信をほとんど阻害出来ているようである。

が、最近強力な魔力でも用いたのかたまに声が聞こえることと、次の交歓パーティーが来月に迫った事情があり、少し気に病んでしまい召喚に

て配偶者を決めてその貴族と決着をつけようとしたということだ。貴族とはウィルス王家に近いこともあり、ミカド国との関係も考え、サンカイさんやツバキさんにも相談できなかったようだ。

最後の方は半分涙声になっていた。

「ウルズ呼んで。」

「ここに。」

ぼうつとウルズが現れる。

「土地調査を少し変更、最優先でウィルスについて調べて欲しい。」

「衛星以外では今の所ウィルスを調査する方法がありません。」

「どうしたらいい？」

「衛星を介したリンクシステムを構築する必要があります。私たちの分身をウィルスの大地に置き、そこを拠点として調査する必要があります。」

。数日かかるかもしれません。」

「外国屋のオヤジに頼んでウィルスに先行してもらうか。持って行くのはどんなもの？」

「これです。」

手のひらに乗る程度の一見ただの種だ。

「種？」

「大地に埋めることでアメノトリフネ様の魔力を分けてもらって成長、地下深くに拠点を作成します。」

「わかった。サンカイさんにも許可がいるかもしれません。」

「いいだろう。ユリカのことについてだ。労を惜しむ気はない。」

「ありがとうございます。それからノルン、呪の解除の方法は分かる？」

「相手の血液を用いた呪としか…。すみません。ミカドとはかなり魔力形態及び使い方が違うためと思われれます。」

「仕方ない、何とかできる手は打てるだけ打とう。そういうわけでツバキさん、お手伝いは少し先になります。」

「いいわ。今はユリカのこと为先決だもの。」

「我らに何か出来ることはないのか？」

「白虎やケルベロスは向こうに行ったら魔物と間違われたい？オベロンやティーターニアは羽さえ何とかすればごまかせそうだけど。」

「否定できんな。」

「ではその間の人々の心を安んじてくださいな。」

「承った。」

「みんな、ごめんなさい…。」

ユリカさんは泣き出している。

「ユリカさん…。誰か困っている人がいたら助けてあげたいと思う？当然出来る事出来ない事があるだろうけど。」

「…もちろんです…。」

「じゃあ、俺のときはよろしくね。」

「うふつ。わかりました。」

少しは落ち着いたようだ。笑顔も見せてくれた。

よし。見てろ、ひねくれ貴族め。

第10話 ウィルスへの準備

息が苦しい…。

顔に何か巻き付いている。だがなぜか燦々と太陽が照らしているのがわかる。

そして徐々に意識が薄れていった…。

「うわっ?!」と目が覚めた。が、声に出たのは「もがっ?!」だった。

なぜか首があまり動かせないし、目の前には薄い布のようなものがあり視界を覆っている。

パニックになりかけたが、以外にも顔を覆っているものがやわらかく危険ではないと感じたので少し落ち着いた。

冷静になって、よくよく見てみれば、無理やり右に顔を向かされ頭を誰かに抱かれている。

なぜか左手が動かないのでなんとか動く右手で目の前の柔らかなモノをつついてみる。

「あんっ…」

胸か…。見えないが左手側にも何かありそうだな。
いい加減生理現象的にもまぶしくなってきたのでどうにかしないとい
けない。

と、

「お目覚めですか？」

「え」と、この声はティターニア？」

「ええ。」

「これ、だれとだれ？」

「まあわかっていと思うけど、アマテラス様とユリカですよ。」

「なんでティターニアがいてこんな状態に？」

「私にはアマテラス様を止めることはできないわ。」

「だよねえ。ちなみになんで俺はこんなに好かれるんでしょう？」

「さあ。直に聞いて下さいな。」

「ふむ。」

まあ考えても仕方ない。

遠くで朝の鐘も鳴ってることだし2人を起こそうか。

手をわきわき動かしてみる。

くすぐったいところにも当たったのか寝返りでもうったのか左手
は自由になった。

頭を抱えられてるのをなんとかしようとするらずりと下がってみるが
相手も追っかけてくる。

ゆっくりではダメかと一気に頭を引き抜きつつ起きてベッドを離れ
る。

頭を抱いていた手が何かを探るように動いていたので枕をはさんで
やったら収まった。

一息ついて眺めてみると、頭を抱いていたのはアマテラス、左側で

俺の腕を取って眠っていたのはユリカさんだった。

昨晩は少しは落ち着いたとはいえ、泣くほどの告白をしたユリカさんを慰める意味も込め、急でまだ部屋のなかったアマテラスと一緒に眠ると言っていたはずだ。

ティターニアにどうしたのかと聞いてみた。

「アマテラス様がけえきと言うものを食べたいとおっしゃったのでアメノトリフネ様が出したの…。」

「もうなんとなくわかった。どうせブランデー入りのスポンジケーキだったとかってオチだろ？んで暴走と。」

「ぶらんでえとかすぽんじけえきとかの意味は分からないけどお酒の入ったお菓子だったとかで…。」

「わかったわかった。で、どっちが先にここに来ようと言ったの？」

「さあ？わたしは隣の部屋で簡易ではあるんだけどアマテラス様の寢所を作っていたら2人とも飛び出して行ったから…。」

「それにしても、参ったね、これ。」

「どうするの？」

「朝食もあるしそろそろ起こさなきゃね。男なら水をぶっ掛ける所なんだけど。さすがにねえ。着替えてくるからティターニア頼んだよ。」

「はあ…。」

「で、どうしてこうなっているの？」

着替えから戻してみると、俺の代わりに抱き枕にされているティターニアがいた。

「た、助けて……。」

「俺のことを助けなかった罰もあるんじゃないの？」

「だってダイスケは気持ちよさそうだったし……。」

「うん、否定は出来ない。夢見は悪かったけど。じゃあ仕方ないな、どうしようか……。」

するとがやがやと部屋の外から聞こえてきた。ナジャとリリムとネコマタのパーティか。

案の定の3人がノックもせず部屋に入ってくる。今日もお遊戯会で俺を起こしたかったのか少し残念そうだ。

でもちようどいいからと3人にベットで寝ている人を起こしてくれるようにとお願いする。

「ちよ、わたしはもう起きてるんですけど!」

ティーターニアがなにか言っているが特に反応せず軽く耳をふさぎながら部屋の隅へ移動する。

ちやかばこちやかばこどんどんぱふぱふじゃーん!

「おお、バリエーションが増える。」

それによく見ると硬い魔力で筒を作り、筒の端は多少柔らかい魔力の膜でふさぎそこを叩いている。きちんと魔力体として覚醒したために見えるものだが、まんま太鼓のようだと思った。後はリリムの羽を硬化化してシンバルの代わりにしたりと上手くいけば魔力で楽団も作れるのではないかと思った。

そういえばこの国の娯楽はどうなっているんだろう。イクサの町には賭け試合があると聞いたが、トランプや将棋やオセロとかの類はあるんだろうか。無ければ開発していくのもいい。

やがて絶え間ない騒音？にアマテラスが目を覚めたのかむくりと起き上がり、

「う、る、さーい！」

と怒鳴った。アマテラスの怒声にユリカさんも目を覚まし、何ごとかときよろきよろしている。

怒鳴られた3人はというと、アマテラスに怒鳴られたせいか、とたんに目に涙を溜め、泣き出してしまった。

「うわーん！」

「ふええーん！」

「ひつく、ひつく…うう。」

三者三様の泣き方にアマテラスも困惑してしまい、「ごめんね、よしよし。」などと3人をあやしている。外見は小娘のようなアマテラスもこのときはばかりは魔族から父といわれている存在そのものだった。

白虎やケルベロスにもこうして接したことがあるんだろうかとふと思ったら、あのかたつくるしい物言いをする白虎たちにそういう風に接する場面を想像してしまい忍び笑いがもれた。

と、不意にアマテラスがギラリと視線をこちらに向け、さも怒ったような声色で聞いてきた。

「ダイスケ、なんでそこにいるの？」

「ここ、俺の部屋だから。」

「なんで起こしてくれなかったのさ。」

「起きなかったのはそっち。起こそうとしたティターニアまで抱き枕にして寝てたじゃないか。」

「うっ…。」

「不満があるなら鐘の音できちんと起きられるようになってから聞こうか。」

「うー。」

「さらに言うなら、こういう行動は不安から来てるんだと思うけど、そんな不安を植えつけたアホ貴族にぶつけるんだね。」

「ちくしょー。貴族許すまじなのだ！」

「はいはい、女の子はあまり汚い言葉を使わないようにね。じゃ、ユリカさんもご飯にいくよ？」

いまだ寝起きでばやばやとしていたユリカさんにも声を掛ける。ふと思ったことがあったのでティターニアに聞いてみることにする。
「ねえ、ティターニア、ユリカさんてもしかして自分で起きられない人？」

「ええ。いつもわたしが起こしてますよ。」

「やつぱり。まだ子供か。」

「あたし子供じゃないもん！」

まだ完全に目が覚めていないのか、駄々っ子のようだ。

「そういうことはまず一人で起きられるようになってからにしようね。さ、ご飯に行くよ。アマテラスも。ナジャにリリムにネコマタも大丈夫？アマテラスが寝ぼけてただけで悪気は無いから許してあげてね。」

「わかったー。」

起こしに来た3人もどうやら落ち着いたようで、皆でぞろぞろと食堂に向かう。

食堂に入るなり、カリンが声を掛けてくる。

「ユリカ様、どこにいったんです？ティターニアも。」

彼女の友魔、リリムが口を挟む。

「ダイスケの部屋でアマテラス様とティターニアと3人で寝てたよ？」

「なにっ？」

「なんですって？」

サンカイさんとツバキさんが声を上げる。なんか面倒なことになりそうだが、

「ボクがユリカの不安を取り除こうと少し動いただけだよ。問題になるようなことはしてないよ。」

「…アマテラス様がそういうなら。」

「だいじょーぶ。さあご飯ご飯。」

「うむ…。」

…助かった。

「………いただきます！」

部屋で出かける準備をしている。今日は町をまわり、外国屋のオヤジに頼みごとをしたり、旅の装備を整えるためだ。

ユリカさんやシン君もウィルスに行くので結構な大所帯になりそうだ。アマテラスも俺と同じ黒髪を除けばここの人と変わらない格好で出てきた。アメノトリフネは小さくなってアマテラスの髪留めと化している。なかなか似あっているのではめると顔を少し赤くしていた。アメノトリフネは外観がまんま船なのでの表情は分からないが悪くなさそうな感じを受けた。

支度も終わり、城の入り口付近でどこから行くかなどとワイワイやっていると、町の方向から1人の男がやってきた。友魔を連れていないところを見ると魔導師系か。

その男はユリカさんやシン君を見て一礼して名乗った。

「今日からミカド代表となります、ケイと申します。」

「シュウさんの代わり？」

「そうです。シュウを師と仰ぎ勉強してまいりました。」

「シュウが師匠なら安心だね。」

「ボクはシュウって人を知らないけど、ケイと言ったかな、キミは信用できる感じがするのだ。」

「あなたは？」

「ボクはアマテラス。」

「おお、あなたが。わたしには友魔はいませんが、病院に来る魔族から聞いたことがありますよ。父という方だと。どこかにお籠りになったと聞いておりましたが。お出になったんでしょうか。」

「うむ。」

「そうですか。それなら魔族が名を明かしているのもうなずけます。」

「そうだったつけ？」

「ええ。出てきていないうちは軽々しく名を呼ぶなと全魔族にティンロン様からお達しがあったと聞いていますよ。今こうしていても魔力の量と質に圧倒されています。」

「アマテラス、お前さんってえらかったんだな。」

「ふふん。えらいだけじゃなくて強いんだよ？どうだ、まいったか。」

「ちつとも。まだまるで子供じゃないか。」

「なにおう！」

「まあまあ、そちらの方は？」

「俺はダイスケです。残念ながら歴史的にこの子の祖父に当たるよ

アマテラス

うです。」

「歴史的に…ですか。」

「詳しい話はサンカイさんにも聞いてください。ユリカさんの召喚によって呼ばれたのが俺です。」

「なるほど。少しだけ話を聞いています。サクラが最近よく名前を出す方ですね。回復魔法を一段と発展させたと。」

「サクラさんが？」

「ええ。少し妬けてしまいますよ。」

「そうですか。俺はここに来てまだ数日ですんでそういう感情はなかなかまだ出てきません。ですから頑張ってください。」

「あはは、ありがとうございます。」

「しいて言えば、少女を扱うようにしたらどうです？あまりすれない感じがしましたから。」

「それは良いことを聞きました。そうしましょう。」

「では『今後ともよろしく』」

「ええ、こちらこそ。姫様、王子様もまた。」

「ええ。」

「うん。」

「ねえダイスケ、さっきの挨拶、何か意味があるのか？」

「さっきの挨拶？」

「今後ともよろしくってやつ。なんかボクには言葉以上のニュアンスを受けたんだけど。」

「まあね。」

「あれか？」

「知ってるの？」

「古いゲームだな。」

「まあね。魔族と人が助け合って生きている世界にはぴったりだと思っけど？」

「そうか。そうかもしれないのだ。」

ユリカさんやシン君、彼らの友魔のケルベロスやティターニアは『にゅあんす？』『げえむ？』などと首をかしげていたが。

さて取り留めの無い話などしながら最初の目的地である外国屋にやってきた。ちょうど運よくオヤジが店をあけるところのようだ。

「こんにちは、旦那。面白いものある？」

「へいらっしやい。つてにいさん、つい先日来たばかりじゃないか。お、今日は姫様も王子様もいっしょですかい。どうぞごひいきに。といつても王子様にはちよいと早いものが多いですがね。」

「タバコは子供には売っていないよね？」

「当然ですよ。ガクさんからも通達がありやしたし。」

「それは良かった。ついでと言つては何だけど、今度はいつウィルスに買い物に行くか聞いていい？」

「今日は来た客に欲しいもの聞いて、明日から向かおうと思ってるんですよ。ホントは来週のミカドとウィルスの顔合わせに合わせて行こうと思ったんですがね、かちゅーしゃが欲しいという客が多くて。早めに仕入れに行こうかと。こないだの姫様の姿がいい宣伝になりました。」

今日も折角だからとカチューシャをつけているユリカさんが顔を赤らめる。

「似合ってるから確かにいい宣伝になるだろうね。ついでと言つては何だけど、これをウィルスのどこかに埋めてこれない？」

ノルンからもらった種を出して渡す。

「かまいませんが、危ないことにはならないでしょうね？」

大丈夫だと太鼓判を押そうとした瞬間、店の奥から声がかかる。

「大丈夫に決まっているじゃないか、あんた。隣にいるのは父様、アマテラス様だよ！」

「あ、オトヒメじゃないか。ひさしぶりー。」

「おお、女性型竜族じゃないか。浦島太郎で有名な。」

「ええ？あの浦島太郎？」

ユリカさんとシン君が食いついてきた。オトヒメもなれたものでそうだと告げる。

「そして竜宮城に来たのがこいつさ。タロウってまんまだろ。」

「あつはつは。旦那はタロウって言う名前なんだ。」

「まあな。別に悪い名前ではないと思うんだが、こいつ（オトヒメ）が面白おかしく言うもんでな。」

「いいと思うよ。で、頼まれてくれるかな？」

「うちのかかあの親のアマテラス様の頼みとあっちゃあ断れねえな。いいぜ。」

「よろしく。って旦那はオトヒメさんと結婚してるの？」

「そうだよ。腐れ縁ってやつさ。強いし安心して旅ができるってもんだがね。で、にいさん、どこらに埋めてくれば良いんだ？」

「そうか場所が分からんと困るか。地図はある？」

「ちよつと待ってくんな。」

と地図を引っ張り出してくる。店の旦那のタロウさんとオトヒメの説明を受ける。

ウィルスは最初に向かった人々が定着したのだらう港近くのマリン部という所から徐々に町を広げながら発展し、マリン部西にセントラル、そこを中心として西にウェスト部、サウス部、ノース部と広がっている。ウィルス国はウィルスという町しかなく、〃〃部という表現で土地を分けているらしい。セントラルをトップとして順にマリン、サウス、ウェスト、ノースの順で貧富の差があるという。

特にウエスト、ノースのさらに西や北には広大な土地がある反面、魔物も多く、なかなか発展していないのが現状らしい。

ノルンと意識内で会話をしつつタロウさんとも会話する。

『ノルン、どこら辺がいい？』

『貴族の動きを早くとらえるならセントラルですが。魔物などの動きもとらえるならばウエストとノースの中間がいいでしょう。』

「旦那はどこらへんに仕入れに？」

「たいがいはマリンで済んでしまうな。一般人はセントラルには入れないし。武器の系統ならばウエストやノースに売りに行くやつもいる。」

「セントラルに城壁はある？」

「ああ、でかいのがあるぜ。ただ市場は城壁近くまである。」

『ならばセントラル城壁付近に埋めてもらいましょう。もし武器を仕入れにノースやウエストに行く人と一緒になったらついでに頼むようにして。』

『そうだね。』

「じゃあひとつは城壁の傍に埋めてくれないかな。ま、埋めるといつても種にしか見えないし、そこらの物陰に置いとく感じでもいい。」

「
リングを使い、さも袋から出した振りをしてもう1つの種といくつかの金を出す。」

「こっちはもしウエストやノースに行く人がいたら頼んで欲しい。」

これが前払いの報酬。」

「こんなにもらっていいのかい？それから何か役人に聞かれたらなんて言っておいたらいい？」

「これの食べ終わった種だと言ってそこらに捨てれば大丈夫じゃないかな。」

急いで作った作り話をごまかすために桃をいくつも出す。種の大きさもそんなに変わらないだろう。

「こりやなんだ？ 食えるのか？」

「皮をむいて食べてみたらいいよ。向こうで売ってもいいし、いや、あまり取れないから賄賂代わりのほうがいいか。ただ傷がつくとそこからあつという間に腐っていくから気をつけて。」

「そうか。金をもらった上にこんなものまでいただくとは、しつかりやなくてはな。任せておけ。」

「頼んだよ。じゃあもしウィルスで会えたら食事でも。オトヒメさんもよろしく。」

「タロウの尻はしつかり叩いてやるから安心しな。アマテラス様もお任せくださいな。」

「うん。ここの所人と魔族が結婚することはあまり無かったからね。そのときにでも盛大に結婚祝いをやるのだ。」

「まあ、ありがとうございます。」

「じゃあまたね。」

「ええ。」

市場など適当にぶらつき旅用の服や保存食などをあさる。正直マジックのおかげでいらないんだが、あまりマジックのことを広められないために仕方なくという感じだ。

武器屋も覗いてみる。一応今の世界の装備を確認するためでもある。武器に関しては魔族のアマの町にすむドワーフなど地系魔族のものが高級品とされ価値も性能も高い。

戦闘スタイルとしてミカドは友魔との連携でどちらかが障壁で守っている間に弓矢や炎や風の魔法で攻撃。ウィルスは魔力の開花しな

かった兵士が魔術師を守っている間に大詠唱魔法を練り上げ攻撃。魔族は力の強いものは反則的に強く魔法も打撃も効かなかったり反射したりと魔物も逃げ出すほどの有様だ。

そんな魔族が半分趣味のように希少金属を使い魔力を注ぎ武器や防具を作り上げる。正直これが安価で出回ればツバキさんの研究も意味がなくなってしまうのだが、生きていくために剣を作るのではない彼らは年に1本というような程度でしか売らないし作らないので価格はうなぎのぼりだ。

そんな武器屋だが、安易な皮鎧や鎖帷子といった防具や鉄製の剣などは人が生活のために作ることもありそれなりに安くおいてある。武器や防具のことはよく分からないがノルンに言わせると数合打ち合ったらかけてしまう程度だという。特別な品はドワーフなどがたまに置いていき、数日もしくは数ヶ月かけてオークションのように一番高い値をつけた者が買っていくシステムのようだ。結局は商人あたりがウィルスにさらに高値で売りさばくためにいい値をつけて買っていくようだ。

今日はそんな風にアマの町から品をおろしにきたドワーフの男と知り合った。

その男は無造作に武器屋の特別品展示コーナーに武器を並べると、武器屋の店主となにやら話をしているところだった。

ドワーフは目をこれ以上ないくらい開きこちらにすっ飛んでくるとアマテラスの前にひざを着き涙を流し始めた。「おかえりなさい」と。

「迷惑かけてすまない」とアマテラスが言うと、ドワーフはアマテラスにすがりつき大声で泣き始めた。アマテラスはもともと世界を覆うほどの魔力を持っているので、引き籠りから出てきたことは魔族皆が感じ取れることではあった。だが、城から出るときに後光を

消し、魔力を弱め歩いていたので友魔にもあまり気にとめられずここまで来たのだ。

だがどうもこのドワーフには隠せなかったらしい。ドワーフの泣き声につられて出てきた魔族や友魔も集まり、うれし涙を流しながら口々に「お帰りなさい」と言っていた。一緒に籠っていたアメノトリフネは今は少しだけ大きくなり、アマテラスと同じようにみなから喜びの声を受けていた。

アマテラスだと気がつかずにすれ違った魔族など、ケルベロスやテイターニアに「なぜ教えてくれなかったのか」と詰め寄られていて困り顔だった。

完全に蚊帳の外の俺とユリカさんとシン君で話す。

「やっぱり偉大なひとなんだなあ。」

「そうですね。」

「僕もあんなふうになれるかなあ。」

「そう思っただけで頑張るっていけばきつとなれるよ。」

「うん。頑張る。」

もみくちやにされ、胴上げでもされかねない勢いの中にはさすがに入っていけず、かといって放つて他の場所に行くわけにも行かなかった。武器屋を物色することにする。

武器屋のオヤジとも話をする。

「うちのドワーフが何かしたかい？」

「ああ、オヤジさんの友魔？」

「そうだよ。普段はアマの町に仕入れに行ってもらってるのさ。」

「その間は大丈夫かい？」

「魔物のことかい？それなら大丈夫さ。アマの町まで行くのにまずは魔族のフェニックスが迎えに来てくれるし、向こうで武器を作っている魔族は地竜だったりジャイアントだったりするのさ。そこら

の魔物じゃ相手にもならないよ。」

「オヤジさんの方は？」

「オレもかみさんもともと活躍度30魔物3の冒険者さ。かみさんの友魔もいるしな。ちっこいハイピクシーだが実力は折り紙つきだ。」

「活躍度？」

「なんだ、知らないのかい？冒険屋の段位さ。後で行ってみな。ミカドの町から出るなら行って損はないよ。荷物を見たところ町から出るようだしな。」

「ありがと。行ってみる。そうだ1つ聞きたいことがあったんだ。」
前から少し気になっていたことを話す。

「こつ、まっすぐな棒に細い穴を開ける道具ってある？もしくは作れる？」

「ないことはないがそこまで長いものは無いな。」

「で、細目の木に穴をあけて、その穴に炭と粘土を混ぜて流し込んで固めたものって作れない？」

そこでノルンから通信が入る。

『鉛筆のことですか？』

『うん。』

『こちらで出すことも出来ますが。』

『それじゃあ押し付けになっちゃうじゃないか。俺は当然ノルンの出してくれたものを使うけど。』

『ならばいいです。』

「そんなもの作ってどうするんだ？」

「それを削って使えば筆の代わりにならないかと思ってね。」

「へえ。面白そうだな。今度試してみよう。」

「出来たら呼んで欲しい。城のダイスケといえは通じるから。」

「ああ、あんたが姫様の旦那かい？」

「は？どこからそんな話が？」

「そうです！わたしの夫になる人です！」

「ユリカさん、ややこしくなるから…。で、オヤジさん、それは誰が？」

「ガクのやつが飲み屋で姫様が召喚をしてダイスケって人が出てきたって大声でいっとったぞ？」

「そうか、ガクさんがねえ。」

「まあそんなおっかない顔するなよ、にいさん。ん、王子様、何かいいものがありましたかい？」

シン君は先ほどドワーフが持ってきて並べた剣に釘付けだ。

「ダイスケ兄ちゃん、これ、すごいよ！ものすごく軽いし！」

「どれどれ。」

ノルンに分析してもらう。魔力と金属が融合し物質化したものだという。特に刃の先は魔力が濃く、刃こぼれを起こしても魔力充填が最悪魔力のあるこの世界だからこそだが数日おいておけば刃が元通りになるという。特に自身の魔力を通すことにより重量も軽くなりより使いやすくなるようだ。ただ魔力と融合しているせいでどんな金属かは分析できないという。元の地球に存在しない物質のようだ。

「それは草薙の剣のレプリカなのだ。」

アマテラスがいまだに魔族に囲まれながら答えた。

「れぷりかって？」

「ああ、ごめんシン。レプリカっていうのは元のものを真似たものことなのだ。」

「じゃあこれの元になった剣もあるの？」

「うむ。これなのだ。」

アマテラスは懐から柄だけのものを取り出した。

「これ？柄しかないよ？」

「まあ、見てるのだ。」

という手柄から美しく光る刀身が現れた。

「わ、すごい。」

「うむ。もともと草薙の剣はボクのなのだ。魔力でこうして刀身を作ることも出来るし、刀身に水をかければ水の剣、火をつければ火の剣。いろんなことができるのだ。でもレプリカといってもここまですで魔力を刀身にこめることが出来るのはオモイカネくらいだと思うのだ。」

「ああ！忘れてました！」

ドワーフが声を上げた。

「この剣は献上用でした！おっしゃるとおりオモイカネ様がアマテラス様の復帰を喜んでミカドの王室に献上しろと。」

「また頑張ったものなのだ。簡単に作れるものじゃないはずなのだ。」

「何年もかけた渾身の一振りだそうです。」

「そっか。じゃあシン、キミが持つといいのだ。」

「いいのっ？」

「サンカイには大昔に似た様なものを持っているはずなのだ。王の錫杖だったか。2つもいらなと思うのだ。シンがいい王になれるようにそれはボクからの贈り物にしてあげるのだ。」

「ありがとう、アマテラスねえちゃん！ぼくいい王様になれるように頑張るよ！」

「うむ。ボクも応援してるのだ。」

「ホントの姉のようだね。」

「ええ、あたしも妬けちゃいます。」

「ま、アマテラスからしてみればみんな自分の子供のようなものだろうし。いいんじゃないの？」

「そうですね。」

「それじゃ落ち着いたようだし、次に行こうか。」
「ええ。」

後ろ髪を引かれる思いで散っていく魔族にアマテラスは「また来るから大丈夫なのだ」と声をかけ、次の場所に行く。武器屋のオヤジから聞いた冒険屋なる所だ。

冒険屋に武器の直しを受けて納品に行くらしいドワーフに道案内してもらいながら歩く。アマテラスはティンロンという今現在魔族を治めているものに「元気でいる。魔物のことは結局どうにもならない可能性が高い、もしくはまだ時間がかかる。それからまたそちらに顔を出すから。」といった伝言を頼んでいた。

さて、冒険屋なるところについた。

よくファンタジーで使われるところの所謂ギルドというものだろう。中に入ると人と魔族が半々でいるようだ。ここでもアマテラスとアメノトリフネはもみくちゃにされていた。

もう慣れたので放っておいてカウンターであるだろう場所に向かう。

「ええと、冒険屋について教えて欲しいんですが。」

「分かりました。：あら、あなたはもう腕輪を持っていますね。どういった用件でしょうか？」

困った。地下システム管理者とか言うわけにはいかないだろう。と、

『ノルンです。ユリカ様の召喚者として名乗ればいいと思われます。』

『分かった、ありがと。』

「ユリカ姫の召喚により呼ばれたダイスケといいます。」

「ああ、あなたが。」

「またか。出所はガクさんですね？」

「ええ、まあ。でもそれならば腕輪の使い方を知らずにいるのも分かります。他の地では身分証明として腕輪を持つ方もいますから。」

「そうですね。ではよろしくお願いします。」

適当に相槌を打ちながら話を聞く。とりあえずその前にガクさんに報復の手段も考えなくては。

「ということですか。」

説明するところだ。

腕輪に所々開いている穴に名前や住所を刻印した本人の認めがないと変更できない宝石、銀行代わりにお金を預けるための数字が変動する特殊魔術の入った宝石、それから活躍度と呼ばれる所謂レベルのようなものが入った数字が刻印された宝石をはめるのだ。特に銀行は金銀をやり取りするここ冒険屋の特殊な腕輪とリンクして数字が変動するらしい。活躍度は各々の数字の入った宝石をレベルにより入れ替えるだけだが、その横に小さく4つの穴があり、そこに受けた仕事に応じた小さな宝石を集めていき、5個を越えるとレベルが上がるという寸法だ。ちなみに生命活動がなくなると外れない。冒険者が外に出た折、死者のものを持ち帰り遺族に渡すこともあるという。形見代わりにさらに腕輪をつけるものもいるらしいが、昔は銀行の残高が高すぎて仲間に襲われたものもいたらしいが、そういうことをする人は必ず最後は赤い月に惹かれるので逆に討伐対象になるそうだ。

依頼などは活躍度に応じてもらえる小宝石の数が違い、活躍度が高ければ少なくなる。どうも20を越えればかなり上級らしい。もう1つは魔物にランクがあり、どのランクまで倒したことがあるか

というものになっている。街中の雑事を受ける仕事ではそちらは上
がらず、討伐系の仕事は回ってこない、もしくは受けられないとい
うシステムだ。ちなみに魔物1が最上である。魔物1はめったに見
られないというか会ったら死ぬとまで言われているもので、赤い月
により魔物化した魔族だ。もともと元魔族なので、アマの町という
か魔族にひかれてフジサンの北の方にしか出ないようだ。魔物2は
異形系のものらしい。ノルンからの情報では工場等から抜け出した
ロボットが知能を持ち、特に冒険者の金属系を狙うそうだ。危険だ
が、ある意味装備を捨てれば助かることを考えると魔物3の方が恐
ろしいようだ。

武器屋のオヤジが言っていた魔物3、これは魔物化した人間と、そ
れから子育て中などで特に凶暴化した熊などの魔物にあたる。とす
るとあのオヤジは相当な腕を持っていることになる。人は見た目で
判断してはいけないな。

ちなみに倒してもいない魔物の換金部位、牙や皮、角など持つてき
ても魔物段位は上がらないらしい。どういうわけか腕輪自体が戦い
自体を記憶、魔物段位を自動的に上げるそうだ。

さすがは元超科学地球のものだ。当時の地球でも身分証明他、へた
したらGPSにて場所が完全に特定できたり携帯の代わりだったり
犯罪の割り出しや冤罪の証明などになっていたんだろ。ノルンに
よれば当然だそうだ。ただ何にでも抜け道があるように、どうやっ
て外したのか大融合を起こした者は誰一人として腕輪をしていなか
ったという。

そして早速いろんな宝石をつけてもらう。アマテラスをはじめ、ユ
リカさんやシン君もつけることにしたようだ。

活躍度、当然0。銀行も0。魔物段位、外。なんとも面白くないが
仕方ない。ウイルスにも同じものはあるのか聞いたら特に上流の身

分のものがつけているそうだ。ユリカさんがなめられたのもそこにあるのかもしれない。活躍度とはかく、魔物段位が上がるやつを倒して段位を上げておけばより効果ありかもしれない。ユリカさんを危ない目に合わせるわけにはいかないが。そうだ、ウィルスに出る前に地下に行つて自動障壁を展開できるように改造してもらおう。ノルンも了承してくれたしこれで安心できるかな。

さて、帰り際、旅支度の服を買った所の傍に露天が開いていた。最初に来た時には無かったものだ。お昼も近いしスルーしようかとも思ったが不意にアマテラスが立ち止まりそちらに行つたのでついていった。

「フレイア、久しぶり。」

「あ…、アマテラス様、父様…。…ふえ…う、ひつく…ぐすつ。」

「今日は泣かれてばかりなのだ。どうしたのだ、フレイア？」

「父様…、シュテンドウジ様とデュオニユソス様が…、ひつく…お酒を買ってくるまで…ふえ、…帰ってくるなと…ふわっ。フレイアもがんば…えぐっ…ただけど…。」

「あやつらか。アメノトリフネ、ティンロンにつないでくれ。」

「カシコマリマシタ。ドウゾ。」

「おお、アマテラスの嬢ちゃん、久しぶりじゃな。引きこもりはすんだのかの？魔物化の方はどうじゃ？」

「分かっているくせに聞くんじゃない。魔物化のことはまだ研究なのだ。それよりシュテンドウジとデュオニユソスに伝えるのだ。ボクがアマの町に行くまで反省してるとな。」

「ほっほ。やつらがどうかしたのかの？」

「これを見てもまだそんなことが言えるのかい？ボクも怒るよ？」

アメノトリフネから立体映像のように飛び出した龍が好々爺のような受け答えでしゃべっていたが、フレイアの姿を見て口を閉ざした。映像からですら噴出する魔力が見えるようだ。ノルンによれば世界と重なるアメノトリフネが局地的に重なりを強くするとこうして映像を行き来させることが出来るらしい。その分実体化している体は小さくなるようだ。

「シュテンドウジとデュオニユソスを呼べ！そしてアマテラスの嬢ちゃんから沙汰があるまでしばらくアバドンにでもくれてやれい！」
「ラクシュミはどうしたのだ？」

「どうもそちらに向かったようじゃの。波動をたぐってあちこち動いているようじゃ。」

「おとゝさまー！」

「ちょうど来たようなのだ。ラクシュミにはボクから言っておく。」

「そうかの。それでこちらにはいつ来るんじゃ？」

「ちよつと急ぎの用が出来たのだ。ボクがこちらの生き残りの大人と重なったのは知っているだろう？その子孫であるこちらのユリカはボクの子孫も同じことなのだ。その身を穢したやからにまずはお灸をすえなくてはいけないのだ。」

「そうかの。ミカドの人間はすでに我らが同属と同じ。穢されたとすればだまつているわけにはいかんの。手を貸そうかの？」

「うっん、彼らには人としてやった報いを受けなきゃいけないと思うんだ。だから大丈夫。」

「まあお嬢がおればめったなことにはならんじやろ。」

「うむ。まかせておくのだ。それからそれが落ちて着いたらそつちへ向かうから。」

「待っておるぞ。」

「うん。じゃあね。」

ゴンっ！

映像が切れた瞬間、抱きつこうと飛んできた人影がアマテラスの作った魔法障壁にぶつかった。

「お父様〜。」

さらに擦り寄ろうとするがなかなか魔法障壁は抜けられない。

「ラクシュミ…。フレイアになにか言うことは無いかな？」

「フレイアにですか？」

フレイアはまだ殻に閉じこもったように両手で視界をふさぎずすり泣いている。

「フレイアっ、どうしたのですか？もしかしてこの男に泣かされたのですか？…その男、覚悟っ！」

俺っ？と思うまもなくラクシュミが飛び掛ってきたがなんとかノルの自動障壁がその攻撃を防いだ。障壁にひびが入ってしまったが、「人間にしてはやりますね、でも次は手加減しません。これでおわっ」

ボクっと痛そうな音がした後、目をつむってしまった俺が再び見た光景は、頭を抱えているラクシュミと呼ばれた女性とその上で手刀をかざしているアマテラスだった。

「なにを勘違いしているのだ？これはラクシュミにも原因があるのだ。」

「わたくしにですか？わたくしはただ父様がお出になられたと感じて急いで来ただけです。」

「シュテンドウジとデュオニユソスの酒は？」

「飲みすぎないよう厳重に保管してあります。わたくしが。」

「キミが出てきた間の酒は？」

「もちろんあるはずがありません！」

「で、やつらはフレイアに露天を開かせ酒を買って来いと命じたわけだ。」

「なんですって？では急ぎ戻って叱らないと！」

「もうティンロンに任せただ。今頃はアバドンの腹の中なのだ。」
「え？」

「ティンロンに任せただっ！」

「ティンロン様にですか？わたくしまで叱られてしまうではないですか！どうしましょう？」

「どうしましうではないのだ。ボクはどこにも行かないのに浮かれるからいけないのだ。町の皆だつてこっちへ飛んできたのを我慢しているのが分かるのだ。今は急ぎの用事が出来てしまったけどまた町に行くと伝えたはずなのだ。」

「たしかにそんな感じも……」

「で、このざまなのだ……」

「ごめんなさい。」

「ボクこそすぐ戻れなくてごめんなさいなのだ。でもラクシュミはもつと謝らなくてはいけない2人がいるのだ。」

「あ、ごめんなさい、フレイア。それからその男の方。」

「俺はダイスケ。でも俺はいいよ。無事だったし。そのフレイアさんだっけ、慰めてあげて。」

「ありがとう。ごめんねフレイア、許してね。」

フレイアと呼ばれた少女もラクシュミという女性にすがって泣いていたが、少しして落ち着いたのか泣き止んだ。

このままではなんだということで、そこらの食堂でみなでお昼にしようということになった。

アメノトリフネがサンカイさんにもつなげられるということをお願いすることにした。ついでにこの前うやむやになった挨拶もしてお

く。ここまで伸ばしてしまったのはある意味大人として恥ずかしい。

「アメノトリフネさん、ダイスケです。挨拶が遅れてしまってますみません。」

「そういえばそうだったね。ボクも半分忘れていたよ。」

「イエ、あめのとりふねデス。コンゴトモヨロシク。」

「こちらこそ。自分の子孫がご迷惑をかけたようですみません。」

「カマイマセン。今八人モデスガ、魔族ノイルコノ大地デイレ、皆ガ幸セデアルトイウコトガ、ワタシノ幸セデス。」

「そうですか、ありがとうございます。今後ともよろしく。」

「おお、ユリカ、どうした。」

「町でお昼をいただくことにしましたのでご報告を。」

「そうか、伝えておく。それからアマの町から書状が来て、剣を一振りいただけるそうだが届いておらんだ。武器屋にでも聞いてもらえんか？」

「僕が持つてるよ!」

「シンがか? うーん、まあいいか。後でわしにも見せてくれ。それからだからといってあまり危険なことはせんようにな。」

「うん。」

「よし。ではゆっくりしてくるといい。アマテラス様、ダイスケ、頼んだぞ。」

「はい。」

そういつて映像は切れた。ケルベロスやティターニアも白虎とオベロンから同じように頼まれたようだ。「まかせておけ」などと言っている。

「じゃあお昼にしましょうか。ラクシユミさんもフレイアさんも一緒に。ユリカさん、こちらのおすすめ教えてよ。」

「いいですよ、いきましよう。」

「おい、アマテラス、いくぞー。」

「父様、ちょっといいですか？」

「なんなのだラクシユミ。」

「父様にあのような物言いをするあの男はなんなのですか？」

「あ、フレイアも気になります。」

「フレイアもか。ダイスケはボクの家族だよ。」

「家族？」

「ボクがこつちの世界の唯一の大人と重なったことは知ってるよね？その人が将来のダイスケの孫なのだ。ボクたちの世界と一緒になった大融合、その約1000年前の人間であるダイスケがユリカの召還によってここに魔力体として呼ばれたのだ。だからダイスケはボクのおじいさんになるね。というのを除いてもわかるだろう、ダイスケの人としての性質と魔族としての魔力体の融合を。彼は人であり魔族であるのだ。それはある意味この世界では究極だと思うのだ、ボクと同じように。よって人も魔族も彼に惹かれていく。そういうことなのだ。もしかしたらこれからのこの世界の発展の鍵となるかもしれないほどに。」

「そうなのですか。」

「ふふ、まあ、ティンロンのオジジにはおもしろい人を見つけたと伝えておいてよ。そのうちつれていくからって。」

「わかりました。」

「おい、アマテラス、おいてくぞー。」

「今いくのだつ。よし、いくぞ2人とも。」
「はいつ。」

外での食事はそれほど城と変わらないものだった。

これだけでも王家が散財していないのがわかる。いい王家だ。

そして女3人よれば姦しいとはよく言ったものだ。5人もいれば言わずもがな。

俺とシン君、ケルベロスは完全に蚊帳の外だ。

ふと話が途切れたので、フレイアにどんなものを売るつもりだったのかと聞いてみた。

手渡されたものはセーターだった。

「きれいだし、暖かそうだけど、さすがにこれだけ暖かい場所では売れないだろうなあ。」

「アマの町のように高い所ならまた違うんだけど、あそこにはなかなか酒を置いていないのだ。あそこの連中で酒をたしなむ者は大抵ミカドに飲みに来るか、物々交換のようにして酒をもらっていく者がほとんどなのだ。」

「そうなんですか。ウィルスはどうですか？あそこは結構涼しい所ですよ？」

「そうかユリカはウィルスに行った事があるのだったな。あそこは確かに涼しいのかもしれないが、魔族がいれば最悪魔物と間違われて攻撃されて命を落としてしまうかもしれないのだ。そんな所に同族を行かせる訳にはいかないのだ。」

「そうですね、すみません。」

「ユリカ、気にしなくてもいいのだ。1人でここまで下りてくるものにはそうそう弱いものはいないのだ。」

「ところでフレイアさんだっけ？これ何で出来て…、あ、いや材質

とかはいいんだけど、これ結構伸縮するんだなと思って。もう少し薄い布状にしてもこれだけの伸縮するものは作れる？」

「はい、少し難しいですけどお。」

「それで下着作ってみれば？」

「下着ってなんですかあ？」

「え、言いづらいんだけど。あの、なんといいますか、女性の胸や男女に限らず下半身を隠すように服の下に着るものといいま

すか。」
「ダイスケさんえっちです、というような視線がユリカさんから刺さってくるが一応説明する。」

「おお、ダイスケ、それはいい案だ。ブラジャーやショーツを作るわけだな。」

「うん。俺もまだこの服の下半身がスースーする感じに慣れないし、出来たら欲しい。」

「どういった形なんでしょう？」

「アマテラスと相談してみて。男性用ならまだしも、女性用は実際よく分からんしすこし恥ずかしい。それから腹巻もいいかも。子供とか特に寝相の悪い人がおなか出して寝てたりするとお腹壊したりするからね。それで下着も腹巻も多少でも伸縮する布なら、ある程度の大きさをそろえれば大抵の人に合うからね。」

「へえ、服として多少体の大きさの違う人でも着られるようにと作ったんですけどお、そんな使い方は思いもよりませんでしたあ。」

「下着を使っていない人にはあまりぴんとこないのかもね。ってわけアマテラス、頼むよ。」

「任されたのだ。魔族単体として魔力や武力を持つ者、それから武器などを作る者以外にも何か人のために出来ることがあるのだ。特に器用だが非力な魔族にも出来そうだし。」

「よろしく。あ、他にも布を人の世界に広めてみて魔族と人がそれ

それぞれ特色を持つものが出来たら面白いかも。柄や色や形にこだわることか機能にこだわるのか。」

「確かに面白そうだな。一気に魔族と人との交流が深まりそうだな。ユリカもシンもそう思わないか？」

「かわいい服が着られるならうれしいです！」

「僕は動きやすい服がいいなあ。」

「早速男女で違いが出るね。楽しそうだな。」

「さて食事も終わったことだし、行こうか。午後もあるだけ町を回ってみたいし。」

「ラクシュミとフレリアはどうするのだ？」

「シュテンドウジとデュオニユソスの件もあります。わたくしにも落ち度があったわけですし、ティンロン様に頼んでみようと。フレリアと急ぎ帰ります。」

「そうそう、フレリアさん、さっきの服買わせてよ。折角来たんだし。あ、それから折角の再会だし俺も気になるからお土産用のお酒も一緒に見に行かない？」

「お邪魔ではないですか？」

「大丈夫大丈夫。ね、みんな。」

皆それぞれ頷く。特にティターニアやケルベロスはかつての仲間なのでうれしそうだな。

「それから今度はこういう服が作れるかな？毛糸の服、俺のところではセーターって言うていたけど、セーターなら特に俺はタートル

ネックが好きでね。」

「せえたあですか。たあとるねつくというのは？」

「うーん、首まであるセーターというか。出来たら重ね着できるように薄めならなおよし。えーと、そうだ、アメノトリフネ、俺の頭の中の映像って分かる？」

「のるん經由ナラバ。ソレカラアマリ人目ノツカナイトコロガヨロシイカト。」

「わかったちよつと場所を変えよう。じゃ、お願い。」

なぜか出てきたのはユリカさんとシン君の映像だった。もつとも俺だと薄手のセーターでは腹のラインがぴっちり出てしまつて格好悪いというのは分かつていた。もつと魔力体に慣れれば自分の一番いいときの外見になるそうなのでもう少しの辛抱なのだが。

映像が自分の想像通りになると分かつたので、シン君には紺のタートルに黒のジャケットを着せてみる。ユリカさんには白のタートルとピンクのロングスカート。ついでにティーターニアとアマテラスにも。ティーターニアは朱色のタートル、アマテラスには薄い黄色だ。「なかなかかわいいじゃないか。うんうん。シン君もかつこいいよ。」

「あたしも着てみたいな。」

「ねえちゃん、僕かつこいい！」

「魔族にはあまり着飾る習慣が無いですけど、これはいいですね。」

「ボクも着てみたいのだ。あれ、ダイスケは？」

「あはは、俺はまだ腹が出てるから除外。」

「ラクシュミ様、フレイアもこんなの着たいですう。」

「フレイア、あなたは作る方じゃないの。」

「そうでしたあ。がんばつてみますう。」

「フレイアさん、出来そう？」

「フレイアのことは呼び捨てでいいですよ。」

「じゃ、俺も呼び捨てでいいよ。」

「わたくしも呼び捨てでいいわ。父様が呼び捨てでわたくしがさん付けなんておかしいもの。」

「そう？ありがとう。で、フレリア、どう？」

「絵か何かあればアマの町の皆にも説明しやすいんですけどお。ちよつとフレリアじゃ説明が難しいですう。」

「そうかあ、あ、そうだ、マジックマジック。」

リングを広げてスクルドにつなぎながら、ポラロイドカメラを出す。といってもポラロイドと言うのは俺の言い方であり、超科学の未来からすれば、立体写真を撮るものらしい。通称は相変わらずポラロイドらしいが。

そしてその映像を出来る限り大きく撮る。それから人目は無いがユリカさんとシン君には向こうを向いてもらって、下着の写真も撮った。ちなみにこのときの映像は首から下だけのものだ。寒い時でも着飾れるようにとストッキングやスパッツ、レギンス、後は男性用にズボン下なども。

ま、今の技術力では厚手の股引が精一杯かもしれないが。

加えてより実用があるか分からないがレースをどう服に応用できるかなど。ミカドの人はまず自分が生きていくためになかなかそういったものに手が出せないが、比較的余裕のある魔族なら色々やってくれそうだ。人間に広まればいいし、そういったものを作って生計を立てる人間が出てくるならなおいいだろう。最終的に正装のパーティや結婚式などが出来るように安全で安心で多少裕福な国になるといいな。

技術交流なのか？も終わり、そこらの露天でお菓子や飲み物などを試しながら酒場街まで歩く。ラクシュミやフレリアも結構食べ歩きを楽しんでいるようだ。

そしてここのお菓子といえばクッキーに果物を煮詰めたシロップのようなものを混ぜ合わせたものが多い。甘い果物はふんだんにあるし、サトウキビなどはもつと暑い場所に行かないと作れないのだから存在しない。ちなみに味噌や醤油、酒などはもとは竈つたアマテラスがイグドラシル内のノルンと協力し、気候的に育つものを技術的に作り出せるものなどから分かりやすく製法を記したものを広めたのが始まりらしい。確かにあのキッズルームにそんな本がもともところにあるわけない。場合によっては酵母なども作り出したようだ。

そんなこんなで酒場街に着く。これから徐々に日が暮れてくるので酒場はこれからが仕事だ。

酒場にはさすがにユリカさんやシン君を連れて行けないので、もっぱら酒屋を探している。一軒見つけて入ってみる。

「らっしゃい！お、姫様に王子様、さすがにまだお2人には早いですかな。」

「今日はお土産を探しにきてね。」

「ん？黒髪のにいさんに、姫様。ひょっとしてにいさんがダイスケさんかい？」

「ええ。」

「そうかい、姫様を頼むよ！」

「はあ、姫や王家をはじめとしたこの国の人を守りたいと思ってますよ。まだまだ役者不足ですが。」

「おお、わしらもかい？これはうれしいねえ。そうだ、このブドウ酒、今日が一番の飲み頃だ。一杯試してみないか？姫様と王子様にはこっちのブドウ実汁だ。大人になったらまたひいきしておくれ。と、そこのお嬢ちゃんたちも実汁でいいかい？」

「くつくつく。彼女たちには酒の方で。魔族だからね。」

笑いをかみ殺しながら説明している間にもやはりここでもアマテラスは魔族にもみくちやにされていた。酒場のオヤジの友魔もあれはアマテラス様だとオヤジに説明するとアマテラスのほうにすっ飛んでいった。

「そうだったのかい。あれが魔族の父様か。こりやまずいことをしちまったかな？」

「くつくく。大丈夫だよ、あれでもやさしいからね。」

こりやーダイスケー言いたい放題言っなー、笑っなーなどとかすかに叫び声が聞こえてくる。

当然無視してブドウ酒を味わってみる。

「これはなかなか。今までいいものを飲んできたって訳ではないけど、これは飲みやすいし、香りもいいし、今まで飲んだ中では一番だ。」

「だろう？ここまでのものはなかなかないよ？前まではこのくらいの出来になると城に持っていったんだが、ツバキ様が城に持つてくるよりも人々のお祝いなんかで使ってくれて言われてね。今日はこないだの魔物騒ぎで怪我した連中がみんな完全に復帰したってんでそのお祝いさ。」

「そうだったんだ。よくなっただね。」

「おおそうか、にいさん、ダイスケーさんだったな。すごい回復魔法を使っただってんですかい評判だよ。この国を守るってのもあながち間違いじゃなさそうだなあ。まあよかったら顔をだしてやってくん。お、もう一杯どうだ？」

「ありがとう、じゃあもう少しいただこうかな。」

味わいながらブドウ酒をなめているとアマテラスも戻ってきた。

杯を受け取り、アマテラスを始め、ラクシュミやフレイア、ティターニアもブドウ酒に口をつけた。

「いい酒じゃないか。イグドラジルの出す最高級に遜色ないのだ。これはもつと飲みたいのだ。」

「お城のものよりかなりいいものですよ、これ。」

「シユテンドウジやデュオニユソスが酒を飲むのも分かる気がしますね。」

「おいしいですう。」

「こないだ怪我した人が復帰できたからお祝いだって。」

「何かあったのか？」

「そうか、アマテラスは知らないか。町の近くまで魔物が出てね。結構な怪我を負った人がいたんだよ。なんとか助かったけど。」

「文字魔法か？ボクも文字は読めても書けないからねえ。文字魔法ならティターニアあたりの方が上手いと思うのだ。」

「重なったっていう俺の孫ってって文字を書かなかったの？」

「思考を読むコンピュータがあるしキーを打ち込めばすぐ文字になる。だからなかなか文字を手で書こうとはしないのだ。趣味としていない限り。」

「なるほどね。発展の弊害って訳だ。だから書き順なんて伝わらないわけだ。」

「うむ。良し悪しって訳なのだ。」

「そうか、ま、今の俺が活躍できる場があるだけよししよう。ラクシュミ、お土産はどれにする？さっきのセーターのお代もまだだし、俺が出すよ？」

「そうですね。しかし彼らもまだ罰を受けているわけですし、どうしたものでしょう。」

「いつそいいもの買ってくとか。今後フレイアを助けていい服が出来ることになればこういういい酒が飲めるぞーって。」

「それはいいですね。彼らは逆にお酒が入っている方が、やさしいしく働きますから。」

「じゃあオヤジさん、いい酒を頼む。」

「結構値が張るがいいか？」

「いいよ。それから怪我から回復した人の祝いの酒の分も少し出すからいいものを出してもらっていいかい？」

「おい、こんなにもらっちゃ酒をいくつ出しても足りねえよ。これくらいでいい。」

「そう？んじゃそこに顔を出してくるかな。ユリカさんもティターニアも行くよ。自分が治した人を見るのはいいものだと思うし。」

「そうですね。元気になった人が声を掛けたりしてくれるととてもうれしいですから。」

「ボクもついていこつと。」

「シン君とケルベロスはどうする？そういえばケルベロスって酒はやらないの？」

「僕も行ってみたい。」

「我ら誇り高き獣は皿に注がれた酒を飲むことなどせぬ。だが、主の酔いなどは共有することも出来る。我が酔うのはシンが飲めるようになってからになるう。シンがどういう大人になり、どう酒を飲み酔うのか。実は楽しみにしている所もあるのだ。」

「なぐるほどね。シン君、大人になったら一緒に飲もうね。」

「うん、僕も楽しみにしてる。」

「そうだね、俺も楽しみだ。あ、そうだ、ラクシュミとフレイアはどうするの？」

「わたしたちはお土産もいただいたことですし、ティンロン様のお叱りもいただかなくてはいけませんのでこれから帰ります。」

「フレイアも叱られるのかなあ？」

「ふふふ、フレイアは叱らないよう、ボクからティンロンに言っておこう。服のことは頼んだのだ。」

「父様、ありがとお。」

「うむ、気をつけて帰るのだ。」

「では父様、またお会いしましょう。」

「父様またねえ。」

「うむ。」

ラクシュミとフレイアの2人は音もなく浮き上がり飛んでいった。

「おお、早いなあ。しかし外見で見ると女性2人で危険に見えるんだが。」

「実際は2人ともかなり強いのだ。フレイアは気が弱いから今回のようになっちゃったただけなのだ。ティンロンのオジジも別にフレイアが悪いわけではないのだしフレイアにお小言は言うまいよ。でも一応伝えておくのだ。」

どこかに通信している風のアマテラス。ものの数秒だったが、元の世界で携帯電話で話している様にも見えただけでなんとなく懐かしく感じた。

そして酒屋のオヤジの酒の納品がてら、ある酒場に行く。そこで復帰祝いをしているはずだ。

すでにかかなりの喧騒がドアからも漏れ出している。

「まいど。」

たいして大きな声を出したわけでもないのに一斉に静まり返る。酒場にいる人間も魔族もどう接していいやら分からないようだ。と、そこへ1人の男と友魔が近づいてくる。

「ダイスケさん。あの時ははお世話になりました。」

「ダイスケさんあの時はありがとう。」

知らぬ間に隣にサクラさんもいて例の瞬間完治で治した男だと聞いた。

「いえいえ、どういたしまして。正直な話、あの日に初めて回復魔

法を習いまして。ある意味魔法を試すようなことになったので返ってこっちが申し訳ないくらいです。」

「しかしあの魔法でなければオレ…、いや私もどうなっていたか分かりません。本当にありがとうございました。」

「ありがとうございました。」

「そうですね。では今は終わりよければ全て良しとしましょう。それから堅苦しい言い方をしなくてもいいですよ？」

「ありがとうござ…、いや、ありがとう。オレも正直完全に治るのはあきらめていたんだ。ホントにダイスケさんのおかげだ。」

「いいって。代わりにまた町の人たちを守ってあげて。まだ怖いかもしれないけど。」

「オレだって冒険者として国を回ったことがある。怪我したからって魔物を恐れたりはいしねえよ。そうそう、オレの名はトウ。友魔はルサルル力だ。」

「ルサルル力です。初めまして。そちらは分かりにくいですがひよっとして父様ですか？」

「ダイスケです。よろしく。そう、こっちはアマテラス。」

「よろしくなのだ。ってみんなだとびかかってくるんじゃない！ダイスケ、助けるのだっ。」

「いままで引き籠もってた報いじゃないのか？」

「遊んでいたわけじゃないのだ！」

「それもそうか。まあまあみんなちよつと待って。アマテラスから何か一言あるらしいから聞いてあげてよ。」

「ボクに丸投げ？」

「お前さんのことなんだから仕方ないだろ？」

「む…。じゃあ…」

アマテラスが魔族に向かって何かを話している。結局アマテラスが主役のようになってしまったようだが、落ち着くまでは仕方ないだろう。

ふと目が合ったサクラさんと話をする。

「回復が早くてよかったですね。」

「うむ。あの魔法のおかげだろう。足りない魔力を周りから強制的に吸い取ってしまう欠点を除けばかなり回復魔法は進歩したと言っている。」

「それはそれは。解毒などにも瞬間の文字は応用が利くかもしれないねえ。」

「なるほど。病気の者をわざと作る訳にもいかないから試す機会はそうそう訪れないかもしれないがな。」

「そんな機会はないほうがいいかもしれません。」

「まあな。しかし今日はなぜここへ？ユリカやシン坊にはまだ少し早いと思うが。」

「酒を買う用事がありました。たまたま寄った酒屋がここで復帰祝いをやると。」

「なるほどな。わたしも呼ばれてきたのだが、怪我が治って元気になった者を見る事が一番の酒の肴になる。」

「でしょうね。そういえばケイさんという人が町の代表になったようです。」

「うむ、昨日盛大に皆で祝ったぞ。わたしも祝いの言葉をかけたかったのだがなかなかヤツも美男子だ。町娘などが離してくれないようだな。近寄れずじまいだ。」

「なるほど、妬いたと。」

「む、そ、そんなことはない！病院の人手が減るからさみし、いや！せいせいしているんだ！決してヤツのことが気になるとかいうことではないぞ！」

「もうだいぶ飲んでるんですか？」

「うむ、今日は日が暮れる前からこんな感じだ。」

「なるほど。まあ俺はケイさんに何も言わないと誓いましょう。」

「うむ。絶対だぞ。」

「ええ。俺は誓います。」

サクラさんの向こうでおとなしくオレンジやブドウのジュースを飲んでいたユリカさんとシン君に軽く視線を向けると、にこにここと、いやにやにやとしてうんうん頷いていた。

相思相愛っぽいな。上手くいくといい。まあ、こじれなければ十中八九大丈夫だろう。

そしてアマテラスの方の話も落ち着いたようだ。アマテラスにも今日のこの場は俺たちが主役ではないことを伝える。

そして酒場の皆には復帰祝いの酒の差し入れを持ってきたことを伝え、これからも頼むと言う。

ついでにユリカさんのお姫様モードにて「あたしたちの町をこれからもよろしくね。」などと言われようものならテンションは最高潮だ。

ある意味嘘も方便だが、酒が入っている人間には何でもありだろう。

まだ引き止めたかったようだが、サンカイ王も待っているからと早々に彼らの元を去り、城の帰途につく。

ユリカさんとシン君は今日のご飯は何かなくなどと言っている。

まだあたりは完全には暗くなっていない。子供の頃感じたことのある他の家からの夕飯の香りに懐かしいものを覚えた。

魔族は夜目が利くが、人はそうはいかない。油はまだ少量しか取れないため高価でなかなか照明用にできないので薄暗くなると町も少しさみしい。

ランプが広まればいいと思う反面、暗い危険な所にでも子供が行ってしまうと困るな、と利点と欠点などを考えながら歩いていると、

城付近でケイさんに出会った。朝とは位置をちょうど逆にした状態だ。

「やあ、ケイさん。仕事は上手くいきそうかい？」

「ああ、ダイスケさん。ありがとうございます。これからよろしくお願いします。色々聞きましたよ。」

「いやだなあ、陰で笑われているんじゃないよね？」

「とんでもない。わたしもサクラの病院を手伝う傍ら、魔導師として研究もしておりました。ダイスケさんの示したものは本当に何十年もの進歩になるでしょう。これからもよろしくお願いしたいと思っていますのですよ。姫にも王子にも年の近い男性の支えがあるならばより高みに上れるだろうと。」

「買いかぶりすぎじゃないのかな？第一この魔力だってこっちに来た時の後付けの力だし、古代文字にしても俺は精通しているとは言いがたい。そういう点では地下システムの方がより知識があるだろうね。背格好で判断されないのはいいんだけど、さて、それが俺の力だとは俺が自分では認められないところでもあるんだよ。」

一瞬ケイ以外の者が何かを感じたような顔をしていたがダイスケは気がつかない。ケイは気がついたが特に気にする様子も見せず言葉を続ける。

「それもいずれダイスケさんの一部になるでしょう。そしてそれ以上に好かれるようになるには結局最後には性格や行動ではありませんか？」

「そうかも。ケイさんありがとう。少し楽になったよ。」

「いえいえ、とんでもない。これから長い付き合いになるんでしょう。何かお互い伝えるべきと思ったことは伝えるべきでしょう。」

「そうですね。よろしく。」

「ええ。朝も言いましたがこちらこそよろしく。」

「じゃあ俺も助言を。」

「何でしょう?」

「俺は言わないと誓ってしまったのでユリカさんとシン君が教えてくれますよ。」

お互いにやにやとした視線を交わし、ユリカさんとシン君がケイさんと内緒話をしている。

といつてもあたりには人もいないし丸聞こえなのだが。

「サクラがケイさんのことを美男子だと言っていましたよ。」

「病院やめちゃったからさみしいって。」

「ケイさんが気になるとも言っていましたわ。」

「ユリカ様、シン様、本当ですか?!」

「間違いないわ、ね、シン。」

「うん!」

「俺は何も言っていないし聞いていない。」

「ダイスケ、いい性格をしているのだ。」

「俺は誓って何も言っていない。な、ケルベロス、ティターニア?」

「うゝん、いいのでしょうか?」

「我はどうでもいい。」

「あの2人が上手くいくなら何でもいいさ。将来喜ばれるかも。」

「ですね。」

「そういうわけでケイさん、今は酒場で怪我した人の復帰を祝つての宴会をやっているはず。サクラさんはあまり酒に強い方ではないようだし、普段どおりに頑張つてきなよ。無理に色々押し通さなければ大丈夫。」

「おお、ありがとう。じゃあ行ってくるよ。ユリカ様、シン様、それでは。」

ユリカさんとシン君の「がんばって」などの声を受けてケイさんは走り去っていった。それほどサクラさんが好きなんだろう。なにかとても気持ちのいい気分になりながら城に戻った。

ちなみにあんな程度の酒で酔ったりしない。夕飯時にさらに麦酒など飲んだ。

そしてふと、今朝のようになっても困ると思ったので入り口に扉の大きさを魔法障壁を作ってみた。自分の全開の力で。

何でかといえば結局ユリカさんとアマテラスの部屋を同じにするこ
とになったからだ。

今朝みたいになっても困る。ユリカさんは当然として、アマテラスも生きている年は長いのだが、あの外見では寝所で愛を語るにはかなりの犯罪臭を感じてしまいそうだからだ。俺も男だし、ノルンたちとは楽しんだし興味がないとは言わないがやっぱり見た目10代ではちよつと腰が引けてしまう。

ベランダでタバコをふかしながらなんとなく障壁は無駄になるんじゃないかという予感を感じていた。

第11話 休暇、準備、鍛錬、休息

俺は俗にレトロゲームと呼ばれるものが特に好きだ。最新のゲームも好きだが、あのチープな音やグラフィックが様々な想像を引き立て、自分だけの物語を作っていくからだと思っている。キャラが一言もしゃべらず、ダンジョンの描画が線画である某6人パーティ地下探索型3DダンジョンRPGなどその最たるものだろう。だが今日はせっかくの休み、もう少し新しく、敵として出てくる悪魔を口説いて仲魔にし、パーティを強化、攻略していくゲームをする事にする。

エミュレータでのプレイもいいが、ここはあえて実機で。何度かカセットの接触を確かめながら電源を入れる。

古いゲームなので当然のようにデータが消えていた。

朝っぱらから休日用に買っておいたビールを飲みながらスナック菓子などをつまみにゲームを開始する。

あれ？開始直後なのになんでこんなに強いんだ？無装備にも関わらず防御力はカンスト、主人公は魔法が使えないはずなのに全魔法使用可。

前にプログラムコードをチート機器によっていじったのが原因か？まあいいかと序盤のイベントをこなそうとした瞬間、敵出現のエフェクトとともに戦闘になった。

あら？やっぱバグってる？

出現した敵はアマテラスだった。

まあ高レベルの悪魔だけど、こっちは防御カンストしてたし大丈夫だろ。

超余裕で鼻歌の一つも出ようかというものだ。
せつかなので会話でもしてみるか。

会話にカーソルを合わせて決定。

ウインドウには

「ダイスケ、起きるのだ！」

はあ？ やっぱバグってる。だめだこりゃ。仕方ない、まだ朝だけど今日は飲んで寝よ。

「おきろー！」

バツキヤーン！

何かガラスの割れるような音と盛大な怒声があがった。

「うおおっ！なんだっ？！」

飛び起きた。きよろきよろと見回すと部屋の入り口付近でアマテラスが仁王立ちしている。こめかみに マーク付きだ。

「な…なにかな？」

機嫌の悪い女性は機嫌の悪い理由を言わないことが多々あるが、一応聞かないと。

「昨日はおとなしく寝て今日の朝、鐘が鳴ったらダイスケを起こしてあげようとここにきたのだ。そしたら扉を開けた瞬間に2人で障壁に頭をぶつけたのだ！腹がたったのだ！障壁は当然壊すし、ダイ

スケにも同じ苦しみを味わってもらうのだ！」

「はあ？」

自業自得だと思ったが口には出さなかった。後が怖いし。

「そうですよ、ダイスケさん！」

「覚悟なのだ！」

まだベッドで上半身だけを起こしたただけの状態であつたため何の反応もできぬまま2人の突撃を受けた。

ダイスケはくすぐり攻撃を受けた！

ダイスケは笑いだした！

くすぐる、くすぐる、笑う。くすぐる、笑う、くすぐる。笑う、笑う、くすぐる。

が、どんな時でもふと冷静になつてしまう時がある。

くすぐられるからといって、はたいたり蹴り飛ばすわけには当然い
かない。

結局2人の腰を抱いた状態になつていた所で3人の動きが止まった。

「……おお……、両手に花。それにこれはかなり気持ちいいぞ。よし、
二度寝二度寝」

「じゃあ……あたしも」

「……ボクも」

二度寝も、色々ふにふにして「いやん」なんてことをする時間をも

「ええ、ため息混じりに入ってきたティターニアに怒られてしまった。」

「ダイスケを起こしてくるから待つてろなんて言っていたのにこれはなんなんですか?！」

「ティターニアも混ざる?」

「え……早く朝ごはんに行きますよ!」

さらにティターニアのお小言が増えた…。

「なんで俺が怒られるの?」

「私がユリカはともかく、アマテラス様を怒れるとでも?」

「そうか、あんなナリだから忘れそうになるけど、偉い人だったからね。障壁壊されたし」

「ふふん。あんな障壁はお茶の子さいさいなのだ」

「そうか。明日はもっと強くできるか試してみるか」

「そこは「明日は障壁なくそう」ではないのか?」

「いやそこは「明日は突撃を自粛しよう」だろ?大人なら」

「ぐむむ……」

漫才のような会話をしながら朝ごはんを食べに食堂に向かう。

今日の食堂の雰囲気はなんだか言い方は悪いがだらけているようだった。

「なんか今朝はくつろいでいるようですが、どうしたんです?」

朝から酒を飲もうとしているサンカイさんに聞いてみる。

「民も数日に1日は休日を取るようにしているからな。王族も例外ではないだろう」

「店とかどうなっているんです？」

「ミカド内で同じものを扱っている店ごとに休みを取り合うようにしておる。新しい代表であるケイも入ったし、魔法もここ数日でのか
なりの発展をした。わしらもやつとゆっくりと休みを取れるという
ものだ」

「ユリカさんの件がまだ残ってますけど」

「それはダイスケが何とかしてくれるだろう？」

「ええ、そのつもりですが。」

「そういうわけで朝から酒が飲めると」

「丸投げもどうかと」

「わしらも向こうの王たちとの交歓会という腹の探りあいがあるか
らな。ユリカに付きつ切りにはなれないのだよ」

「そうですね、できる限りがんばりますよ」

「たのむぞ。で、ダイスケは今日はどうするのだ？」

「地下にいくかと。ユリカさんとシン君の腕輪をちよいといじら
ないといけません」

「うむ、わしも行こう」

「わたくしも行きますわ」

「」「」「わたしたちも！」「」「」

「みんな？てかサンカイさんとツバキさん以外は上の食堂くらいし
か入れないよ？それでもいい？」

「」「」「もちろんです」「」「」

「じゃあみんなで行こうか」

だが全員というのは少し問題があると思う。

「でも誰か1人は上に残した方がよくないか？何かあったときに連
絡が取れないではこまるぞ？」

とはサンカイさんの言だ。

「じゃ、ネコマタを連れて行ってガクさんは居残り」と

「なんで?!なんでオレが居残り?」

「ガクさん、酒場とかで俺のことどんな風に言いふらしたかおぼえてないんですか?」

「いや、いずれは姫の旦那になるからいいかな」と

ユリカさんは赤くなつてぐねぐねしている。

「ダイスケはまだ来たばかりだぞ?否定はせんが、もう少し城に仕えるものとして分別があつてもいいと思うが、どうだ、ガク?」
サンカイさんは少しきつい視線を向けながら言う。

「すみません」

「では居残り頼むぞ?」

「はい……」

「さて、では王族の方以外はここまでになりまゝす」

どこかのツアーの添乗員のようだ。

マジックの機械の使用法を教え、王族とその友魔と地下に向かうことにする。

残された人はパフェなどのスイーツを特に喜んでいるようだ。

この部屋に入るにも管理者権限が必要になつていたので俺かアマテラスがいないと入ることができない。

後々面倒になつても困るので、皆にはここで飲食してもいいが、外に持ち帰らない、外ではここの話をしないということを約束させることにした。

破ればここに入ることができないようにすると、できるかどうかは

わからないが脅しておくことにする。

甘く柔らかなスイーツに完全に心が奪われているようであいまいな返事や頷きしか返ってこなかったがまあ仕方ないとして地下へ向かう。

「お、浮遊感がなくなってる」

エレベーターの浮遊感がなくなっている。腕輪からの情報ではノルンの完全稼動につき、重力制御装置を組み込めるようになったということだ。

まあ最先端の科学の施設などほとんど海の底だったり破壊されたりするのでまだ数世代前の大型建造物にしか使えないそうだ。

エレベーターでも俺からすれば十分小型だと思っんだが、個人使用にまで小型化されていたという当時にしてみれば前時代的なのだろう。

地下に着いた。

4人の美人の歓迎を受けた。ユリカさんは不機嫌そうだがまあ仕方ない。

サンカイさんも鼻の下を伸ばしていたようで、ツバキさんからつねられている。

シン君は優しそうな女性に見えるのか、喜びながらノルンに抱きついている。なんか10歳くらいにしか見えないな。

ここの人たちの年齢は半分で見繕うのが正解かも。特に男。女性は別だ。生まれたときから女だからね。

とにかくユリカさんとシン君に自動障壁の機能を腕輪につけてもらう。

特にケルベロスは自分が守るからとあまりいい顔をしなかったが、ウィルスに行く間だけでもと説得しておいた。

テイターニアはペンダントからの呪に専念できるということでありがたいと言っていた。

それからウルズからある程度ミカド内でのリンクが回復したということで魔物のこと、発生原因などはまだだがどんなモノがいて、この国の者たちがどう対応したのかが分かってきたと報告を受けた。国のほかの者の腕輪から情報が入ってきたそう。GPSもミカド内なら対応できるそう。

それはすごいと褒め、その情報はどうにか自分たちにも分かるようにできないか聞く。

すると床から何かコックピットのようなものがいくつかせり出してきた。

どうも、ヴァーチャルで経験をつむことができる道具らしい。痛みなども感じるがそういったものは大幅に削減されているようだ。というか、ゲームなどで使用されていたものらしい。

早速試してみることにする。サンカイさんら、4人もやってみたいとのこと。5人でやることにする。

イスに座り、顔をすっぽりと覆うヘルメットのようなものをかぶるだけだ。

と、いきなり真っ暗だった目の前に今までいた部屋とは違う、広大な野原が現れた。

手足の感覚も自分本来のもののみ。目の前にいきなりウィンドウが出、武器選択といわれたのでスクルドの作ってくれた俺専用と

のタグのついた武器を選択する。手のひらに現れたのは銃のようなものだ。ただ意思に応じスタンガンの雷撃と実弾が選択可能らしい。雷撃の効果範囲が5メートル程度と狭いがスタンガンの麻痺させるように使うにはこの程度が限界らしい。電気を5メートル程度とはいえ飛ばせるだけでもすごいことだが。実弾はかなり高価な誘導弾。間違つて相手を殺めてしまう、もしくは逆に外さないためのものだ。

一弾あたりの値段を聞いてしまったが忘れることにした。地方なら土地と家を買えそうだ。

ふとみんなも視界に入ってきた。サンカイさんは軽鎧に錫杖、ツバキさんはローブにでかい宝石のついた杖、ユリカさんツバキさんと同じ。

シン君は軽鎧にこないだの剣を持っていた。

イグドラジルの声が響く。

ノルンが現在フルで能力を使っているらしいので受け答えは余裕のあるイグドラジルがするようだ。

「友魔を入れる技術がまだありませんので皆様には己の能力のみで戦っていただきます。武器や魔法は現実と同じようにしか使えませんが」

「武器の能力は？」

サンカイさんが尋ねる。

「現実の通りに使えます。では弱い方から順に。最初は1対1で行きましょう」

いきなり他の人が視界から消えた。

ありがたい。喧嘩もしたことないし、無様な様子しか見せられないだろうから。

牛、銃で一撃。

猪、突進されかするが痛くもなく、やはり銃で一撃。

熊、爪が怖かったが自動障壁で平気。何発か打って終了。

子連れ熊。何度か殴られる。足も速いので離れようとしても追いつかれる。ただの熊は離れるとどうでもよくなるように狙撃できたのだが。

これはこの前、怪我をした人が出たのも分かる。何とか撃破。

機械というかロボ系、マシンというらしいが。当たり前だけど動きが読めないし銃も撃ってくる。

戦っているうち、銃の反動にも少し慣れてきた。マンガのように片手で無理な姿勢から打つと肩が持っていかれそうになる。が、だんだんゲーム感覚で楽しくなってきた。誘導弾の補正を使い足を1つずつ落としスタンガンを打つ。やはり電撃はクリティカルらしく動けなくなった。

ここでいったん休憩ということで皆が集まった。

サンカイさんとツバキさんは余裕でマシンまで撃破。どうも錫杖は何かに当たるときに氷と炎を瞬間に順次発動するものらしい。凍らせたのち、中に残っている空気や凍らなかった水分を膨張させるこ

とで対象を破壊するという。ツバキさんとユリカさんの杖は魔法の文字を宝石に書けば、杖を振り突くことでその魔法を発動するものだそうだ。ミカドの魔法陣が空中に文字を描き、そこから動かせられないことを考えればかなりいい杖ではないだろうか。

シン君はマシン撃破まではできなかったようだ。魔法の発動が不安定なのと、剣は軽いし切れ味は抜群なのだが、ただそれだけなので結局相手を捕らえられないとどうしようもないらしい。いつもはケルベロスのプレスで相手の行動を制限し止めを刺すという戦法だったので自分の欠点が分かり、勉強になったと言っていた。悔しかったが。

ユリカさんは攻撃魔法の勉強をしてこなかったため、回復しかできない。

結局障壁で防御したり逃げ回っていたらしい。ツバキさんにだから勉強しておけといったでしょうとお小言をもらっていた。

全員休憩も終わったことで、イグドラジルの提案で団体戦を行うことになった。

いきなりどこから「ヴォーン！フィイイイン…」と駆動音が聞こえてきた。

相手が見えないので、自動障壁のないサンカイさんとツバキさんを内側にし、音のした方にゆっくりと進むことを提案しようとしたが、腕輪から通信が入った。ノルンたちは忙しいからイグドラジルだったが、使える物は全て使わないと色々守れませんよと。そして、

『敵影発見、センサー作動』

『方向と距離！』

『13時に3体、距離1キロ。18時に2体距離300メートル。5体ともマシンです』

「サンカイさんとシン君、真後ろに2体、よろしく」

「うむ」「はい」

「ツバキさんとユリカさんこのまま前進、ユリカさんは後方から敵を見つけ次第障壁で援護！」

「ええ」「わかりました」

後ろ2体は最悪サンカイさん1人で何とかなるだろう。

こちらはどうかするか。少しだけ間がある。

『敵タイプは？』

『マシン系2体です』

「よし、ツバキさん杖をちょっと見せてください。これをこうして
つと」

宝石に“雷槍”と書いてみる。効果範囲が分からないのが不安だが、
文字のイメージからしても一直線にいくだろう。

「見えた！障壁！」

「はいっ！」

何とか障壁が間に合い、マシンからの銃弾を防ぐ。

障壁を盾に銃とツバキさんの杖で2体を倒す。残った1体が近接戦
闘をしようとしたのか近づいてきたので牽制の意味で障壁を倒して
みたら

あっけなくつぶれてしまった。

「あれ？障壁にも重さがあるのかな？まあいいか。」

サンカイさんの方も特に問題なく終わったようだ。
イグドラジルの一言で現実に戻ってきた。

「ふう…。戻ってきたぜ…」

「なにをえらそうに格好つけておるのだ。ダイスケ、ボクはまだまだだと思っただ」

「そこはほら、いつもいるアマテラスや友魔を信用していると考えてもらいたいところだろ。アマテラスが離れるならまた考えることにするけど」

「うーん。ダイスケと離れると面白いことを見逃しそうなのだ。ボクと重なった人もなかなか面白い知識を持っていないのだ。国の経営などには結構な知識があると思うのだが」

「それはミカド国の発展に使っていただきましょう」

サンカイさんが口を挟む。王になってからなかなか気楽に体を動かす機会がなかったのかさわやかな笑顔だ。

「うーむ、あんまりめんどくさいのはイヤなのだ」

「シンの教育のためにもおいおいお願いしていききたいと思っているのだが」

「シンはかわいいからな。それならば考えてもいいのだ。どうもボクを弟妹扱いするものが多いから、ボクより弟なシンは大事なのだ」

「アマテラス姉ちゃん、今後ともよろしく！」

「うむ、任せておけ！」

とりあえずのお茶をしながらこれからどうするかを相談する。

ノルンの、食物が厳しい条件で育つか研究するフロアがあり、そこなら少々暴れても大丈夫だから、そこで実際に戦ってみるべきだと

いう提案でそこに移動、模擬戦を行うことになった。俺だけ。

「誰かついてきて欲しいんだけど……」

という言葉にアマテラスとユリカさんとシン君がついてきてくれることになった。

当然そうすればティターニアとケルベロスもついてきてくれることになる。模擬戦とはいえ、危険がないとは言いつれないからと言って。

サンカイさんとツバキさんはウィルス王への対応を考えるとということらしい。

エレベーターで移動する。

途中で一応ボディースーツのようなものを着させられる、ヘルメットもだ。最悪の状態を防ぐためらしい。

ケルベロスとティターニアはつける様子がなかったので聞いてみたら「そんなもの当たらない」とか堂々と言っていた。というよりノルンの説明では魔力体だから肉体が欠損しても魔力さえあれば再生できるらしいので問題ないそうだ。

そこは本当に荒野というべきところだった。

他のフロアでは極寒や猛暑もあるそうだからそうではなくて助かった。

そしてそこにマシン系の魔物が現れた。どうもマシン系とはこういう施設の管理ロボットが自我を持って廃棄施設からパーツを調達、自己進化を遂げた存在らしい。

今回はマシン系も制御の上で模擬戦に参加させているので、現れた3体のうち、2体は熊系の動きをするマシンだということだ。

『熊系？ひょっとして子育ての熊か？』

腕輪からノルンに聞いてみる。

『普通では面白くないとアマテラス様がおっしゃいまして』

「マジか！？仕方ない、臨機応変にいくぞ！」

と言った直後、熊系マシンの1体がアマテラスの攻撃によりスクラップになった。どういう攻撃だったかも分からない。何かを飛ばしたんだろうか。

残り2体になったが気を抜けない。あつという間に間をつめてきたマシンの攻撃をぎりぎりかわし、銃を撃つ。しかし銃の誘導範囲を越えたようで当たらなかった。でもアマテラスに頼るのは何か気に入らない。

「シン！ユリカの援護で熊系を頼む！ティターニアとケルベロスは遊撃で牽制！マシンはこっちで食い止める、その間に頼む！アマテラスはやばくなるまで待機！」

「面白くないのだ」

「アマテラス、お前が入ると反則チートだろ！待ってる！」

「分かったのだ」

「つく！はい！」

誘導弾でも動きが早いとなかなかとらえられない。

それでもケルベロスの牽制により4本足のうち1本は何かあった。そのうち熊系が何とかなったようでもシン君とユリカさんがこっちに来た。

「ダイスケ兄ちゃん！姉ちゃんがなんかほにやほにやしててあんまり使えないよ！」

「分かった！ユリカ！しっかり！」

「はっ！すみません！」

「よし、いくぞ！ユリカは回復系準備。怪我したらユリカの作った障壁内に駆け込め！ティターニアはその保護！ケルベロスは続けて遊撃！」

シンは俺が気を引くから思うように攻撃、いくぞ！」

マシンに攻撃をかける。と言っても俺に気を引かせるための牽制だ。そしてここで自動障壁の欠点が出た。欠点と言えるものかは微妙だが。

マシンの機銃に反応したのだが、完全には防げなかったのだ。ほんの少しのタイムラグで発動し、銃の反応に対応するだけでもすごいと思うのだがその最初の一発を受けてしまうなら意味がない。

バスっ！

ボディースーツで腕を失うようなことはなかったが痛いものは痛い。と、ここでもう一度ゲーム感覚でいた自分が恥ずかしくなった。

そしてそれ以上に恐怖が出てきた。

「どわっ！今まで死んでも復活させればいいやとか思ってごめんなさい！」

とゲーム内での各主人公に詫びを入れながら逃げ回る。

「シン！左から行け、ケルベロスは右からだ。ティターニアは正面で障壁！ユリカはダイスケをなんとかしろ！」

アマテラスからの指示が飛ぶ。

「ダイスケさん！大丈夫ですか！」

「怖い……、死ぬ……」

「ダイスケさん！」

ぎゅっ。ユリカさんが抱きしめてくれた。

「死ぬ……うっ？ユリカさんか、……ありがとう」

「いえ」

「はずかしいんですけど……」

「もっこのままで……いいんですよ？」

「ありがとう、でもこのままだと反応してしまうし」

「ダイスケさんならいいですよ……」

「こりゃー！ダイスケ！さっさと行くのだ！」

「おおっ！よし！いくぞ！」

「もうっ。次はきちんと……」

ユリカさんの言葉は聞かなかったことにして戦線に参加する。

俺は近接は向かないと分かったので自分の障壁を盾にして間接的に足を狙ってみる。

が、当たらない。動きが早い！しかしシン君が足を1本落としたのでこうしちゃいられないと恐怖心を押さえ、自分をおとりにして雷撃を繰り返す。

怖い、衆目のあるところで自分の半分にも満たない年の女性に抱きしめられることを思えばこれくらい。

痛みと恐怖心での震えで狙いが逸れそうになるがなんとか雷撃を当てる。

そして動きが止まった所でシン君の攻撃でジエンド。

「きつかった……」

「ダイスケはこれが現実だとキチンと理解しなくてはいけないのだ」
「分かりました。というか理解できました。冗談抜きで怖かった」

「ふふふ、しつかり絞られたようですね」

「ええ、すみません」

ツバキさんの言葉は堪えたが返事を返す。サンカイさんも口を開く
「指示はいつそダイスケとアマテラス様の2人でいったらどうだ。

ダイスケが恐怖で我を忘れるとは思わなかったしな」

「すみません。もう指示はアマテラスにお願いした方がいいと思います
ましたよ」

「そうか。まあその時々にあつた方法でいいと思うぞ」

「またおいおい考えますね」

そこにシン君が口を挟んだ。

「ダイスケ兄ちゃん、僕や姉ちゃんはもう呼び捨てでいいと思うんだ。
ダイスケ兄ちゃんの呼び捨てで姉ちゃんがほにやほにやしちやつたし」

「そうか、何かあるときにさん付けしてて指示が遅れたりしたら意味ないからなあ。考えてみるよ」

疲れでぐったりと机にふせる。ふと腕輪に目が行った。

「あれ、魔物段位が上がってる」

魔物2と表記されている。なんか裏技っぽい方法だったけどいいのかなーと思いつつ、ユリカさんとシン君にも聞いてみる。

「ねえ、ユリカさ、いえ、ユリカとシンは腕輪の魔物段位の数字変わってる？」

きつい視線がユリカさんから飛んできたので言い直す。

「あ、上がってる！2になってるよ！」

「あたしもです。でもあたしはいいのかしら？」

「ま、もらえるものはもらっておきましょう。向こうの貴族にいい牽制になるかも」

「なるほど」

もう色々疲れた。昼間だが飲むことに決めた！

「さて、ノルン。生と手羽先。あとポテチ、それからカツ丼」

「よろこんで〜！……とても言うと思ったんですか？……今回だけです？次からは自分で出してください。それより食べすぎじゃないですか？」

「魔力体なんだから気にしない、気にしない」

「ダイスケ兄ちゃん、なまとかてばさきとかぼてちとかかつどんつてなに？」

「あ、じゃあみんなにも。生は麦酒のことだよ。後は食べてみてね」

「おいしい！」

「こんなに味の濃いものは初めて食べた」

とはカツ丼をかきこんでいるシンとサンカイさんの言だ。

手羽先に含まれる成分がお肌にいいと言ったと勝手に結構な勢いで手羽先を食べるツバキさん。

ユリカはポテチに夢中のような。

「栄養が偏るから野菜も食べた方がいいですよ？」

ノルンは素晴らしいながらサラダも出した。ノルンを始め、システムの3人もサラダをついついている。魔力体でないと味というものは分らないだろう、ドレッシングが今の農業技術でどこまで再現できるかなど話し合っている。

卵が安定供給されればマヨネーズが作れるかもなどと言っていた。

ミカドの素材のおいしさ全開の食べ物もいいんだけど、現代人としてはこういうものも食べたくなる。

「こういうものを知っているなら、今のうちの国でできるものは是非教えて欲しい」

と、サンカイさんはノルン達に言っていた。

ヴェルザンデイが俺を見ながら、

「ダイスケ様はどの程度ならいいと思いますか？」

と言ってきたので、

「この国の人々が仕事をなくさない程度ならいいんじゃないのかな」と答えておいた。人々の生活の種を奪うわけにはいかない。代替の事業とかも考えていかなくてはいけないだろう。

それから自分がこの国で最終的にどう生きていくのかも徐々に考えなくてはならないだろう。

だが今はウィルス貴族への報復が最優先だ。

もうそれなりに飲んでしまったし午後は寝て過ごすのもいいだろう。また忙しくなるだろうし、1日くらい寝て過ごすのもたまにはいい。

気持ちのいい酔いに身を任せながらそんなことを考えた。

第12話 ミナトへ

今日はミカドが出る日だ。

もう朝のアマテラスとユリカの部屋への突撃にもなれてしまった。

そして性懲りもなく障壁を作っておいたんだがあっけなく全て破壊されている。

破壊までの時間が長かったのが硬い魔力ブロックを伸縮するひも状の魔力でつないだもの。硬さと粘りを両立させようと考えてみたのだが、これが一番だった。

魔導師3人衆にこれを伝えておいた。ゴムがないこの世界でどこまでイメージを伝えられるかは分からないが。

そうそう、フレリアのタートルネック、武器屋の鉛筆の試作品が届いた。

「いい出来だ。鉛筆はまだただけど、タートルはいいな」

「お、フレリアの作ったものか？ボクもある？」

「というかこの感じだと女性陣のものだけっぽいな。俺にはきつそうだ。次は少しゆったりで男性にも着られるものをとたのまない」と

「じゃあボクが言っておくのだ」

「よろしく。じゃあとりあえずこの4着は何とか分けて」

「うゝん……黒はシンで……黄色はボク……うゝん……」

「ま、仲良く頼むよ」

前に出したポラロイドのイメージが強いのか悩んでいるアマテラス。と、そこへ腕輪から通信が入る。

『ウィルスでの種の着床を確認しました』

『どう？』

『2、3日後には情報収集ができるでしょう』

『そうか、よろしく』

『かしこまりました』

部屋で持っていく物の最終チェック。と言っても着替えと道中の野宿の用意だけだ、それすらマジックで出せるんだが。

ベランダでタバコをぶかぶかとやっているティーターニアが呼びに来た。そろそろ出るそうさ。

リュックのようなものを背負い城門に向かう。すでに皆揃っている。

「俺が最後？申し訳ない」

「かまわぬ、遅れたわけではないしな」

サンカイさんの言葉ありがたい。それにしても城を空けていいのだろうか？聞いてみると

「ケイもいるし大丈夫だろう。いや、ケイがいてよかった」

ケイさんが苦笑いしながら答える。

「私もまだまだ若輩者ですから期待はほどほどにしてくださいみたいです」

「他の代表としていつもはお茶をしておるようなものだ。気にせぬことだな」

「私には友魔がありませんが、緊急の場合はどうしたらいいのですよう？」

「そうか、いつもは友魔のつながりを持って緊急に備えておったな、

「ダイスケ、何か手がないか？」

「俺ですか？うゝん、腕輪あります？」

「ええ、旅もしていましたし、昔はイクサで治療の職についていたこともありますから」

「ではそれに通信をつなげられるようにしましょうか。サンカイさんやツバキさんは腕輪あるんですか？」

「無論だ。王族の者は己の治める地を見るためにも若い頃に色々旅をするのだ」

「わたくしも旅をしたことがありますから持ってますよ」

「じゃあホットラインをつなげられるかノルンに聞いてみましょう」
「ホットライン？」

「ああ、すみません、直通回線のことです」

「そうか、ノルン殿、申し訳ないがよろしく頼む」

『かしこまりました。アメノトリフネ様にお問い合わせすることにします』

「アマテラス、アメノトリフネは？」

「ここにいますぞ」

髪留めを指差すとそれがふよふよとこちらに來た。

「じゃあアメノトリフネ、お願い」

「ワカリマシタ、皆サン、コノ光ニ腕輪ヲカザシテクダサイ」

「で、どういう風に使うの？」

「伝えたいことを強く思うか、危険だと思ったときに全員に伝わる仕組みなのだ。携帯電話の機能もあるが、それはつけていないのだ」

「ふゝん。わかった。でもこの所能力というか力を使いまくりだな。いいのかなあ。便利に慣れちゃうと怖い気がする」

「拡散には気をつけないといけないのだ」

「だね」

「では出発するぞ」

サンカイさんの声でまずは町の端まで歩く。というより、馬車のようなものはミカドには存在しない。緊急連絡などは足の速い友魔を頼るし、体躯の大きな友魔が人を乗せて走ったりすることも珍しくない。

ふと町並みを見ていると閉まっている店が多いことに気がついた。開いていても店員は若すぎると思われる子供と女性だけだ。

「店がいつもと違うみたいですがどうしてです？」

隣を歩いていたツバキさんに聞いてみる。

「わたくし達のウィルス訪問にあわせて向こうでも大きな市場が立ちますからね。珍しいものもあるそうですし」

「そうなんですか」

「時間があれば見てまわることもできるでしょう」

「それは楽しみですな」

町を抜けた。ここからしばらくは田畑が続く。田畑が終わる所あたりに衛兵の詰所がある。衛兵に「よろしくたのむ」とサンカイさんが言い、衛兵は「お気をつけて」と返事を返す。しばらくよろしくお願いします、との意味をこめて会釈しておいた。

「さて、ここからは少し気をつけていくぞ。魔物が出ることもあるしな」

「わかりました。ノルン、ウルズと接続、周囲監視を怠らないで欲しい」

『了解いたしました』

「よし、今日はここまでだ」

ミナトにいく人々はほぼ歩きであるから当然同じようなところで野営することになる。小さいが意外に丈夫そうな建物が作っておりそこで夜を明かすことになる。

味噌汁のようなものを作り、麺を入れる。うどんやラーメンのようなものだ。

「む、何かいる！」

ケルベロスが声を上げた。いそぎ装備を整え、ケルベロスの向いている方に注意する。

がさりっひゅっ

!!!

「犬か？」

犬らしきものはケルベロスの威圧に恐れたのか顔を出したと思っ
たらすぐにどこかに行ってしまった。

『ノルン、警戒は？』

『害意、魔力ともになかったので感知できませんでした』

『わかった、これからも頼む。小物は白虎やケルベロスならわかる
だろうし』

『かしこまりました』

「ふう……、魔力等なかったようで、ノルンの感知外だったようで
す」

「そうか、白虎、ケルベロス、何か気がついたら教えてくれ」
「承知」

「そういえばダイスケさん、あまり落ち着きがないようですけど大
丈夫ですか？」

「こういう夜の越し方ってしたことないからね」

「ダイスケ兄ちゃんの世界ってどんなだったの？」

「そうだねえ。遠い所の人とでも会話のできる道具、城からここま

でならあつという間に着く道具。色々とても便利だったと思うよ。実物見ないとわからないだろうけど。」

「そんな所に住んでみたいなあ」

「その分機械や道具に囲まれて、こんなすばらしい自然に接する機会がなくなるよ。俺のいたところはまだ自然があつたけど、都会と呼ばれる町部分には城よりも何倍も高い建物が建っていたり、木々や自然なんてほとんどなくて息苦しかったよ。そういえば1000年後はどうだったんだろう？」

「人が少なくなっていたからな、ほとんどは地下施設だったのだ。地上はかなり自然に考慮しておつたらしいのだ。今はほとんど海の底だが」

アメノトリフネが俺やアマテラスの記憶から情報を取り出し映像化する。人が乗り込み高速で移動する車。携帯電話などはかなりの驚きを持たれた。アマテラスにも。なんでも西暦3000年あたりでは個人用の重力制御装置により足を使わずして高速移動ができており、タイヤのある乗り物などは完全に廃れていたためだ。ノルンたちのこれからの研究いかんではそれを楽しめそうだ。バックトゥザフューチャーのあの空飛ぶスケボーにはあこがれたものだ。今のこの世界で再現できるとすれば自転車だろうか。ノルンのメモリには自動車など旧型移動装置のデータはないらしく、そういった古いデータも残っている所が生きていない限り手探りだそうだ。

それからいい機会だからとノルンにも頼んで世界地図も出してもらう。まだ衛星の稼働範囲により地球全体は見渡せない、ミカド、ウィルス周辺の地図だ。

「地球は青かった……。って海しかないよ？」

『その2点の陸地がおののミカドとウィルスになります』

「ミカドはまだまだ小さいのだな。フジサンの北に土地があるのが気になる」

「ウィルスですよ。北西にかなり土地があります」

「ボクの覚えている魔族の土地とも形状が合わないのだ」

「それよりこんなに上手く他の陸地にいったウィルスの創始者は何か道具を持っていたということかな？それにだ、俺のいた地球と魔族のいた地球が重なって水が増えたのはわかる。だが土地なども同じく増えていないといけないはずなのにそれがない。そして現れた新しい月……、ノルン、大融合の前の地球2つ分と今の地球と赤い月を足した重量や体積はどうちがつている？」

『計測の方法がありません。大融合前の体積や重量はともかく、現在の地球をそこまで詳細に調べることがまだできません』

「そっか、わかったらよろしく」

「ダイスケ、どういうことなのだ？」

「今の地球、2つの地球が重なったとして、これだけ海が広いということはその陸地分のものはどこに行つたのかと。もしかしたらそのなくなつた分が赤い月を構成しているかもしれない」

「魔物化の研究も進むかもしれぬ。ノルン、ボクからもよろしく頼むのだ」

『かしこまりました』

夜が明けた。今日も1日歩く歩く。正直車が欲しい。魔力体に慣れてきたので疲れはしないのだが。

「暇だあ！暇すぎる！」

「どうしたんですかダイスケさん？」

「ああ、ユリカ、これちよっと暇すぎじゃね？」

「そうでうすか？あたしはあまり町から出ませんので楽しいですよ？お父様やお母様と出歩くこともめつたにありませんし」

「そうか、そういうことならわかる。でも俺は暇だあ……」

「ダイスケ、歌の1つでも歌うのだ」

「そうそう、この国の楽器ってどんなものがあるの？」

「魔族から伝わったもので豎琴があるのだ。それから横笛」

「弦の楽器かあ。弦は弾けないわあ。横笛もなあ……学生時代にサックスやっただけだし、今の世界にサックスはなあ」

『バンブーサックスなどはいかがですか？』

『今でも再現可能かな？』

『リガチュア以外は』

『じゃあそれは紐にして、運指はリコーダー準拠、C管で』

『しばらくお待ちください』

「何を考え込んでおったのだ？」

ノルンとの念話もはたから見ると考え込んでいるように見えるのか。それからアマテラスが聞いてくることを考えると、主と友魔は意識しないと精神で会話できないということか。ふとそんなことを考えながらアマテラスに答える。

「ちよつとノルンと相談。俺の世界の楽器が持ち込めるかどうか」

「あまり複雑なものはよろしくないのではないか？」

「竹と葦さえあれば作り出せるものにしたよ」

「ほう、楽しみなのだ」

『それから主と友魔の念話のようにはボクとはつながらないよ。強めにボクを念じないと。前にも言った気がするけど』

とはアマテラスからの念話だ。

「忘れてた……」

「何を忘れてたの、ダイスケ？」

ティターニアにつつまれた。

「いや、アマテラスと精神がつながって会話のようなことができること」

「ええっ？アマテラス様とつながるんですか？」

「うん」

「なんだとっ？」

白虎も怒った風に言ってきた。

「ダイスケ、父様とつながるとはどういうことだ……？」

ケルベロスも本気に見える。

「ちょ、ちょっと待った！結果的にそうなってただけだよ？アマテラス！なんとか言ってくれよ！」

「人と友魔の関係はその魔族が眠りから覚める時期とその人の誕生の時期がある程度重なることと、魂と呼ばれるものが似る、もしくは惹きあうことで結ばれるのだ。そういうわけでみな父としてのボクは眠りを必要としない、故に人と契約を結ぶことがないのだ。だから念話を使えるものなどいないことになるのだ」

「血は？俺の孫と重なったんだろ？」

「重なるとは肉体を共有するものではないらしいのだ。と言ってもこの世界で今の所だれか、もしくは何かと重なったのはいまのところボクとアメノトリフネ、イグドラシルしかないのだ。重なった相手が血の通った体を持たぬアメノトリフネやイグドラシルも特殊なのだが、かえって血の通った肉体を持つものと重なったボクの方がもっと特殊なのかもしれない。ダイスケの孫の知識や思いしかボクにはわからないから」

「じゃあなんで俺とアマテラスはつながることができるんだ？」

「そんなことボクにもわからないのだ。問題がないならとりあえず放置なのだ」

「それで俺がこんなににらまれるんだけど？大問題じゃないか、俺的に」

「魔族の魔物化と比べたら問題ではないのだ！」

「それを解決しようと思って引き籠もって今を生きる者はほったらかしかよ」

「なにおう！ボクが心を痛めていないとでも思っているのか？」

「そうじゃねえよ！結果的にほったらかししていることが悪いと言っているんだよ！たまに地上に出てきて魔族と交流したり、魔物化する魔族を見るのはつらいかもしれないけど、「最後に父の顔を一目見たかった」とか言う魔族はいなかったのか？！その人のために「後は任せる」とか言って笑顔で送ってやるのも父の役目じゃないのか？！町でのおまへの姿に喜ぶ魔族をどれだけ見たと思う？俺は子供がいないからと言われるかもしれないが、父はいる。いや、いた。人の父と魔族の父が同じだとは思わないが、子が父を思う気持ちを考えたことはあるのか！」

悪い方向にこじれているのは分かる。が、言葉は止まらず、言うてから「しまった」と後悔した。それに涙も止まらない。言うつもりがあるうがなかるうが、相手にとってきついとわかっていて話す言葉は言う方にとっても痛い。誰かを殴るとその殴った手も痛いように。

「ダイスケ殿、もうそのくらいで」

「はっ！……申し訳ない、白虎。ぽつと出の人間が言い過ぎた。アマテラス、君にもたくさん考えた上での行動だったんだろ？ごめんな」

「いや、こっちこそごめんなのだ。ボクは遠い昔、まだこの地が重なる前、この世界の守護者たる任を受けたのだ。神という存在からそこでの父としての役割は悪に落ちた魔を滅し力のない魔族を守る

こと。その方こそボクにとっての父だったのだ。今はその方の力をほとんど感じなくなってしまったが故にボクは魔族を魔物へと落とすこの現象を何とかしようとし、よって今を生きる魔族を結果的にないがしろにしてしまっていたのだ。……目が覚めたのだ。神のご加護が薄れているこの世界、またあの方に会えるかは分からないけど、次に会ったときに胸を張れるような生き方をしなければならぬのだ」

どんよりと場の空気が沈んでしまった。

「神か……、お、ノルン出来た？」

『はい、バンブーサックス仕上がりしました。結構前に出来ていたんですが言いづらくて……』

「いや、変に話の腰を折るよりいいよ。空気読んでくれてありがとう」
『いえ。ではリングを広げてみてください』

リングを広げてバンブーサックスを出す。場の空気を読んでいないこと甚だしいが、音を出してみる。

「結構いい出来じゃないか。何か吹いてみよう。まずは童謡かな。こないだオトヒメさんとも会ったし、浦島太郎から」

魔族はまだ沈痛な表情が消えなかったが、浦島太郎と聞いてユリカとシンが反応した。

「？」

首をかしげているユリカとシン。

「ああ、絵本だと音が伝わらないのか。そうだ、アマテラス！いつ

までも落ち込んでないで浦島太郎歌ってやってくれよ」

「……ああ、分かったのだ。ユリカ、シン、よく覚えるのだ」

）

「むかし～むかし～浦島は～助けた亀に連れられて～龍宮～城へ来て見～れば～絵～にもか～けない美しさ～……」

その後もいくつか童謡を教えた。特にこの世界にないものの描写が入るものは伝えにくいので限られる。

それでも歌と童話がつながるのがうれしいようで、結局ミナトまでの行程はほぼ即席音楽会で終わってしまった。それにウィルスへと向かう人が他にもいたらしく、ミナトへ近づくにつれて合唱の人数が増えた。楽しかったからよしとしよう。

ミナトの城門をくぐる。城門と言ったが厳密には正しくない。ただ見た目は城門だった。

「おお～、すごいな～。人口はミカド城下町より少ないはずなのに」人の活気もすごい、すでに夕方なのに。ウィルスとの交易があるせいかもしれないが。そしてミナトの入り口にいた衛兵に先導され、

ある宿についた。王族など、重要なお客相手の宿らしい。かなり上級なようで、他の宿には入り口から覗き見える中から酒場兼用と分かったが、その宿には重厚な扉があった。扉をくぐると受付らしきものもある。ふらふらしていたらある入り口から中が見え、中は上品に食事する小綺麗な客が見えた。箸の使い方はいい加減だったが、ウィルスからの文化らしいナイフとフォークを使うものもいた。金髪でミカドには珍しい髪の色のところを見るとウィルスからの客かもしれない。

はつきり言って苦手だ。お上品に食事よりもここに来るまでに見た屋台のメシのほうがうまそうだ。

「はいっ！サンカイ王様、自分のように一番王に仕えている期間の短い者にはこのような上等な場合は分不相応でございます。明日の朝一番にお迎えいたしますゆえ、今日は失礼いたします！」

衛兵はさもありなんという顔をしていた。俺のことを知っている人間はみな突然の俺の言葉に固まっている。冷静になって何か言われる前にその宿を出、駆け足で角を曲がる。追撃を避けるためだ。

「ふう……」

「いいんですか？ダイスケ様？」

「いいんだよ、あんな疲れそんな所。ああいう疲れそんな所は王族の仕事でしょ。それにたまには家族水入らずもいい」

「そうかもしれないのだ。自分のやる事以外で面倒なことはごめんなのだ」

「おおっ？アマテラスか。……なんだよ、ほかの人も」

「家族水入らずを進呈しただけだ。それにどうもあの宿はウィルスかぶれでな。友魔とは言え、魔族をあまり歓迎しない感じがしたし

な」

「ここはまだ安全だ。我がいなかろうと危険はあるまいよ。それに我はいまいちミナトの町長まちおさを信用できぬ。クラとマツハは付き合いが長いからそうでもないが」

「ダイスケといたほうが面白そうよね」

「ではみなでどこかで食事しましょうか。といつてもどこまで食事が必要かわかりませんがね」

順に白虎、ケルベロス、ティターニア、そしてオベロンだ。

「よし、食事にしよう。あ、オヤジさん、それ何？」

ふと目に入った屋台のオヤジに声を掛ける。

「お、兄ちゃん、えらく美形の魔族と強そうな魔族連れてるね、うちを知らないとはミカドからかい？まあいいや、これは『おでん』っていうもんさ。イクサでしか取れない卵なんかをふんだんに使っているよ！」

見るとおでんによく使われる卵、大根、後はイモなどおでんというより煮物だ。

「ほう、2皿ほどもらおうか」

「あんがとよ！」

「おお、案外うまい。ほら白虎もケルベロスも食べてみないか？」

櫛に刺さったそれらを白虎とケルベロスの口の前に持っていく。

ぱくりと口に入れる白虎とケルベロス。

「これはなかなか……」

「人の料理というものもいいかもしれぬ」

そんな呟きを聞きながらおでん屋のオヤジに魚の白身をすりつぶしかためて一緒に煮てみたらどうかと提案しておいた。崩れそうな

ら一回軽く油で揚げても焼いてもいい。面白そうだ、試してみようとのオヤジの言葉を受けながらそこを後にする。いつも思うがこの人たちは面白そうなら何でもいいんだろうか……。

その後もやはりイクサから仕入れたという肉を使った焼き鳥屋のようなものにも行った。焼き鳥屋のようなという表現は、鳥だけではなく魚や肉も串焼きにしているからだ。むしろ海に近いミナトでは魚がメインだったからだ。

「さあて、どこの宿にしようかなあ？」

「どこか案があって飛び出したのではないのか？」

「初めての土地でそんな案なんかあるわけもなく」

「あ、ダイスケ、あそこはどうです？」

オベロンの言葉にそちらを見ると、きれいなお姉さん方が手招きしていた。オベロンはまんざらではなさそうだ。

「おいっ、あれは娼館じゃないか！あんなところで泊まったらアマテラスはおるかユリカやツバキさんにどやされるぞ？」

「娼館とはなんです？」

「金で女を抱く店」

「おお、なるほど、いいじゃないですか」

「マジか、オベロン？まあいいや、明日の朝に間に合うなら行けば？金ならやるよ」

空気読めないこと甚だしい。金を受け取ったオベロンは一直線に向かっていった。

ちなみに女性陣、アマテラスとティターニアの視線は氷点下だ。

「オベロンって……」

一応ノルン経由でウルズに聞いてみる。

『あそこ、ボツタクリじゃないよな？』

『ミナトでの評判は高いようです』

『じゃあいいか』

「そういえばここは魔族が少ないねえ」

「そうね、ここにいる友魔はほとんど貿易でウィルスと行ったり来たりじゃない？今いるのは友魔のいない人かな。魔導師にならないもしくはなれなかった独りの人たち。友魔がいなくてもここは生きやすいから。海の幸、牛や豚の飼育、魔族がいなくても生きていけることをここは証明しているわね」

ティターニアが説明してくれた。北からの魔物をミカド城下の者が抑え、南からのものはイクサが抑える。たしかに過ごしやすいのかもしれない。

さあ、宿をどうしようかとぶらついていると宿屋街なのか客引きのうろついている所に出た。というより屋台街の途中に色街の通り、宿街の通りなどが枝分かれしている。隠れてノルンの情報をフルに使い、隠れた名店的なところのラーメンもどきをだす店に入り、注文する。自分の分だけは後回しにし、宿を探してくると言って宿街の客引きの一人に声を掛ける。

「オススメはどこだい？特に魔族も安心して泊まれる所」

「魔族も？それはなかなか難しいねえ。ウィルスとも交わりがあるここは魔族は少し敬遠されちゃうんだ。さっきの麺屋に入った人たちかい？女性2人はいいいけどあの2頭の魔族はなあ」

あの2人も魔族だと言わなければならない。客引きを連れて近くの酒場に入る。その客引きも分かっているのだろう、おとなしくついてくる。

「オヤジ、この旦那にいいのを頼む。俺には麦酒を」

「兄さん、金は大丈夫なのかい？これからウィルスにむかうんだろ？まああの2頭は向こうの歓迎館とは名ばかりのところでは止められちまうだろうけどよ。ウィルスでは下手したら魔物に見られて討伐対象になっちまうしな。」

「なるほど。けど彼らも大事な家族だ。あまりひどい所にはな」
金を一握り客引きのポケットにつっこむ。

「そうかい、兄さん、ほんとになにも知らないんだな。じゃあ少し教えてやるよ。ミナトで生まれた人間で魔族が嫌いなものは1人としていない。当然だ。ただ最近多少ウィルスにかぶれた町長があまり魔族にいい顔をしないんだ。今はミカドにいるクラさんの仲間や友人、弟子が抑えているから、屋台なんぞでは平気なんだが、宿に泊まるとなると、町長の息がかかっていない所がいい。」

「そうなのか、初耳だ」

「まあクラさんがいれば大丈夫だと思っているがね。じゃあ1ついいことを教えよう、と言ってもここに何回か来たやつらは知っていることだが、色街の一角に魔族が営んでる宿屋がある。そこへ行ってみな。場所は色街にいる女どもに聞けば分かるだろう。色街は結束が強い。町長の影響もない」

「ありがとう、いいことを聞いた。オヤジ、旦那にもう1杯と勘定」
そう言って支払いを済ませ店を出た。

屋台でワイワイと食事するアマテラス達に近づき、ラーメンもど

きと麦酒を頼む。アマテラスが聞いてきた。

「どうだ？宿は見つかったのか？」

「うん、この町長が結構ひねくれ者でね。魔族が普通の宿に泊まるのは難しいらしい。色街の一角にある魔族の営む宿がいいって」

「そんな話は我は聞いておらぬが」

白虎が言う。

「上に立つてると分らないこともあるんじゃないの？ミカド城下はいいけど、ウィルスとのつながりがミカドより強いここだとかなか本音の話を聞くのは難しいよ？普段から接していない分余計に」

「そういうものか……」

なにやら考え込んでしまった白虎に「サンカイさんに言ってもいいけど、今はやめた方がいいかも。こちらはすぐにどうこうできないし、ウィルスの考えも聞かないと。クラさんにも相談してからの方がいい」と言っておく。

「じゃ、行こうか」

屋台の女性においしかったと告げ、店を後にし、色街の方へ向かう。と、先ほど別れたばかりのオベロンがいた。

「あれ、オベロン、どうしたの？お楽しみじゃなかったの？」

「いやあ、お酒も食事もおいしかったんですが、泊まるのだけはやめた方がいいと言われまして。近くに魔族の宿があるからそこへ行けと」

「魔族だつてばらさなければよかったんじゃないか」

「でも、それは不貞だと思っんですよ」

「じゃあ娼館など行かなければよいのだ」

ぼそりとアマテラスが言う。ティターニアも頷いている。

「たまには他の女性と話をしたいじゃないですか、あ、あそこですよ、行きましょう」

やはり空気を読んでいない。俺や白虎、ケルベロスともに手で顔を覆っている。アマテラスとティターニアにいたっては言葉もないようだ。

「あゝあ、女性を怒らせるとこわいぞ……というかオベロンってあんな性格なのか？」

「ツバキ殿のいない所ではああだな」

「自業自得だ」

こんばんわと宿の扉を開ける。

「いらっしやいませ、なんめいさ……父様?!」

もうすっかり慣れた光景だ。あえて何も言わずその友である女将と部屋の契約をする。俺が1人、あとは大部屋にもらった。ちらりと白虎達を見、「家族水入らずだ」と言っておいた。

ミナトにもミナトならではの問題があることが分かった。今回は

何とかしのげたけれど、次は分からない。

「神に祈ろうか……ああ、アマテラスが存在が薄れたと言っていたな。じゃあ実在する天照大御神……アマテラスは問題起こす方のよくな気がする。ご先祖様は……この世界の人からすれば俺が先祖の1人か……。どうしたものかな……」

そんなことを考えつつゆっくりとまぶたを閉じた。

第13話 ウイルス国（前書き）

遅くなりましたが、今後ともよろしく……

第13話 ウイルス国

朝の鐘の音が聞こえる。徐々に意識が覚醒していく。

「ふう、今日はアマテラスの襲撃も無いようだし、静かない朝だ」

着替えをすませて食堂に向かう。女将に朝ごはんを頼みながら、魔族の人たちはまだ起きてこないのかとたずねる。

「そういえばまだ起きてこないねえ。朝ごはんは用意しておくから、その間に起こしてきたらどうだい？」

「そうする」

コンコン

軽くノックをすると「どうぞ」と聞こえてきたので部屋に入る。

「おはようございます。やっぱり最後まで寝てるのはアマテラスか」
「おはよう、ディスク。父様はなかなか寝起きがよくないのでどうやって起こそうかと考えている所ですよ」

なぜか仲間はずれのように布団を離されていたオベロンが布団をたたみながら答える。理由は分かっているから聞かない方がいいだろう。

まわりの友魔は幾分うれしそうにアマテラスの寝顔を眺めている。お腹も減ったし、俺がアマテラスを起こさないといけない理由はないだろう。

「俺はごはん食べてくるから、間に合うように起こしてね」

特に答えも聞かず食堂に戻る。

「はいよ、朝食。みんなは起きてたかい？」

「約1名以外は。いただきます」

やはり港町ということで魚がうまい。ご飯が進む。お茶も飲み干して一息つく。

「はー。女将さん、おいしかったよ！ごちそうさま」

「お茶はどうだい？」

「まだみんな来ないからもう少しただこうかな」

「……おはよくなのだ……」

「おはよう……ってなんだ？その頭？ぼさぼさじゃないか。アメノトリフネも落ちそうだぞ？ま、いいか、よく眠れた？」

「うん。でも目が覚めたらみんなに覗かれていたのだ。あんまりいい気分ではないのだ」

「そうか……」

友魔はばつが悪そうにそっぽを向いている。

「まあいいか、アマテラス、ご飯は？」

「いただくのだ」

「女将さん、お願いします」

「はいよっ」

「魚がおいしいのだ」

「だね。後はアマテラスの髪を何とかしないとな」

いただいたお茶も飲み終わり、アマテラスの後ろに立ち髪を梳く。さすがは強力な魔族か、変な癖があつという間に取れてきれいなストリートになる。が、あまりそれだけでも面白くないので横から後ろにかけて髪を三つ編みで編みこむ。最後は後ろでまとめ、アメノトリフネに髪留めになってもらう。昔美容師の友人に教わったものだ。元気にしているのだろうか、いや元気に生きることができたのだろうか。少しだけ感傷的な気分になってしまったが、アマテラスの髪型もそれなりに納得のいくものになっていた。

「まあ！父様かわいらしいですわ！」

ティターニアが感嘆の声をあげ、白虎やケルベロス、オベロンはうんうんと頷いている。

「さ、ご飯終わったか？サンカイさんたちをあまり待たせても悪いからそろそろ行こうか」

「分かったのだ」

王家の人たちが泊まった場所に着いたとき、ちょうど皆も出てくるところであった。内心遅れなくてよかったとホッとする。

「おはようございます」

「おはよう、ディスク、よく眠れたかしら？」

「ええ。料理もおいしかったですし、また来たいですね」

「ま、機会などいくらでもあるさ。はて、ユリカはどうした？」

サンカイさんにそういわれてふと見回してみると、ユリカとアマテラスがなにやら言い争いをしていた。そしてこちらに向かつてまなく立っててきた。

「ずるいです！」

「なにが？」

「アマテラスさんの髪、ダイスケさんがやったと聞きました！」

「で？」

「私にもしてください！」

「ユリカにはカチューシャがあるからいいんじゃないかな？」

「でもっ！」

「わかったよ。ティターニアに教えておくから」

「ありが……って、ちがいます！」

「ダイスケ、私に振らないで！」

「2人とも叫ばないで」

「ふふん、ユリカにはまだ早いのだ。ダイスケ、明日も頼むのだ」

「ああ、先ほどアメノトリフネに髪型を記憶してもらったから大丈夫」

「ちがうのだっ！」

「こつちもか。天下の往来なんだからあまり騒がしいのはどうかと思っただけ。そこは「他の男に頼んじゃうから」と気を引くもんじゃないかな」

「他の人に頼んでしまいますからね」

「他の男に頼むのだ」

「もう遅いっ。ざんねんっ」

誰かがプツと噴出した後は笑い声に包まれ、からかい、からかわれながら港への道を進み、船に乗った。

「出港だ〜！錨をあげろ〜！」

「さて、ウィルスにつくまでなにをしようかな〜？」

『ダイスケ様、まずはウィルスについてこちらでわかったことを説明させてください』

「ああ、ノルン。……いやこの声の感じはウルズかな？」

『はい、ウルズです。皆様と情報のすり合わせをしたいと思いましたので、話ができる場所へお願いいたします』

「わかった。みんなを連れていくね」

「さて、第一回ウィルス対策会議を行います！まずはサンカイさんたちからウィルスについて聞きたいんです。そしてウルズの情報と食い違いがないか調べようと思います」

「なるほど。といつてもわし等はウィルスに來ること自体こんな行事でなくてはなないのでな。身分を隠してウィルスを旅をしたのもすでに先代ウィルス王の時だ。ではまずは一般的なことから話そうか」

体の外見のな違いはない。ミカドに生まれた人と違うのは、魔力を持たない人が生まれてくることがあることとほぼ金髪だと言うことだ。そして魔力の高い者ほど高い身分になる。魔力を持たない者は兵士となり、魔術師を守る盾となるか、魔物を足止めし、その魔物とともに魔法で焼き払われる運命だ。それは王族も例外はなく、王家と4つの町を統べる貴族の仕事とは魔力の多い子孫を残し教育を施すことだ。そしてその王家と貴族に差はなく、その世代で一番魔力を持った者が王となる。ある意味で癒着のできにくい制度ではある。民はもれなく幼少時に学校に入り、魔力のある者はその使い方と、さらに兵士の指揮の為の勉強を。魔力の少ない者は商人など。魔力のない者は兵士として極力生き延びる為の体作りと技を。所々ウルズの説明もはさみ、ウィルスの説明がなされた。

「効率的ではあると思うんですけど……。感情がそれを認めてくれないというか。うまく言えないんですが。ま、難しいところはサンカイさんにお任せして、俺はユリカの呪がどうにかなればいいです。魔族、ミカドよりの俺にはあんまりウィルスにのめり込む理由もありませんし」

「うむ、ユリカの件は最優先だがそれを王は知っているのだろうか……」

「王は知らない方がいいと思います。というより、いろいろ言わず、内密に処理してしまえば王としても貴族の独断だったと対外的にいうでしょうから」

「そうだな。頼めるか？」

「アマテラスとアメノトリフネ、ノルンたちの手助けがあるなら大丈夫でしょう。魔力的ならアマテラスとアメノトリフネ。科学的ならノルンたち以上に頼りになる人はいませんよ。問題は……」

「問題は？」

「俺が役に立てるかどうかわりませんか？」

「ふふ。頼りにしておるよ」

「頑張ります。そういえばサンカイさん、なぜこちらが向こうに行く方が多いんです？」

「ミナトの町を見たか？ だんだんウイルスよりになる人がいるよ。うだ。わしがお人好しなせいもあるが、ウイルス王にくみ易しと思わせておいて心の内をつかもうと思っておる。ウイルス王の思惑を少しでも引きだそうとな。悪いやつではないんだがつかみにくい所があるのだ。加えてウイルス王が高齢だ。ワシ等と違い、長くて80年ほどで寿命がくる。他の者の入れ知恵か、そうでないかわからないとミカドへのちよっかいもどうなるかわからん。慎重すぎるかもしれないがそう考えて動いている。それに、ウイルスでは赤い月に惹かれた者は数日中にいなくなるのだ。そして少数だがなぜか赤い月を克服して戻ってくる者がいるそう。その者たちに直に話を聞くためにもウイルスに行った方がいいと思っっている。原因はさっぱりわからないが」

「ではウイルスでは赤い月の脅威はあまり知られていないんですか？」

「もともと少しこずる人たちが多からな。ミカドと違って赤い月の影響が最初のうちはあまり出ないらしい。そして大事を起こす前に姿を消すと」

「それをウイルス王には？」

「魔物による人さらいは赤い目をしたものに限らん。だからこつちも聞くことはしない。ユリカのことなくても今回はアマテラス殿について来てもらうつもりであった。ま、ダイスケを何とか丸め込めばアマテラス殿もついてくるだろうと思っただけだが、こん

なに簡単に行くとは思っても見なかったがな。アマテラス殿、なにとぞお願いいたします」

「うーん、実際に会ってみないとわからないのだ。だができる限りのことをすると約束するのだ」

「よろしくおねがいいたします」

……

……

…

「錨をおろせ！」

夜だ。ウィルスの国は案外近く、航海も1日満たない程であった。港の近くに城があり、城の近くに貴賓館がある。そこへ向かう。白虎やケルベロスは人気の少ない夜に来て交歓会が終わるまでそこにいることとなる。町の人々に余計な感情を与えないためだ。

「さて、ここで一晚過ごし、明日朝に王に会うことになる。他国であるし、いつもの朝のようなドタバタは控えてほしい」

「サンカイさん、俺が悪いみたいない方しないでいただきたいん

ですが……」

「ダイスケに言っておけば一番効果的かと思ってな」

「そうですか……」

「そうだってよ、アマテラス」

「ボクはだいじょうぶなのだ」

「お前が一番心配だな。そういえばアマテラスは王に膝を付けるのか？」

「ボクだって生まれたときから一番上だったわけじゃないのだ。作法くらいや常識くらいわきまえているのだ」

「ホントか？まあ何か言われてもスルーしてくれよ」

「何かすごくバカにされている気がするのだ」

「気のせい気のせい。……おや？」

最初はただの布切れのゴミだと思ったものがピクリと動いた。魔力体になりだいぶ上昇した視力で気がついた。魔

「なんだ？」

「どうしたんですか、ダイスケさん？」

「いやなにかが動いたんだ。ちょっと気になる」

聞いてきたユリカと傍にいたアマテラスを伴いそのゴミのようなものに近づく。と、それは人だった。まだ子供のようであったが、結構な怪我があり、男女の区別もつかないほどに汚れきっていた。

「ユリカ、回復魔法を」

夜中であり、あまり大声を出すわけにもいかず、ダイスケはその

人を支え、ユリカに回復を頼む。ついでにノルンにも接続、状態を見てもらうと、結構な勢いで殴られたり叩かれたりといったものと極度の栄養失調のようだった。

「サンカイさん、こういった人はウィルスでは普通なんですか？」

「いや聞いたことがないな。ウィルスの国民はよくも悪くも管理されておる。人材は特に能力に関わらず貴重なものであるといった考えが国王及び国民に深く存在するからな」

「じゃあ、非常事態って訳ですか。ユリカ、どう？」

「ええ、傷は大丈夫だと思います。頭には傷がありませんでしたし。絶対とは言い切れませんが」

「しょうがないな、落ち着くまで連れて行くしかないのかな。サンカイさん、ツバキさん、どうしましょう？」

「ダイスケがそう判断したならいいですよ。わたくし達に対応できる暇があるかわかりませんので完全にお任せしてしまうようになりますが」

「うむ、王家はどうしても明日の準備と明日の会のために暇がないからな」

「わかりました。こちらで対応します。じゃ、ケルベロス、乗せてつてくれ」

「我がか？」

「どうせ危険がなかったら数日貴賓館で食っちゃ寝するだけだろ？」

「むっ……」

「よろしく」

「……是」

多少のイベントがあつたが後は特に町の人に見られたりということもなく貴賓館に着いた。助けた人は正直風呂にでも叩き込みたい程であつたがそれもできない。寝たきりや意識のない人を清潔にす

る魔法でも考えようと思った。そういった道具というか機械はあるにはあるのだが、いかんせんマジックの有効範囲以上のスペースを使うために取り出せなかった。

貴賓館ではウィルス産の酒などを頂戴しながら遅い夕食をとり、明日に備え眠ることにする。朝のドタバタの原因にもなっている魔法障壁の訓練はやめておいた。

……
……
……

2日連続のさわやかな目覚め。どうもアマテラスは枕が替わるとあまり寝られない性格らしい。少々どんよりとした表情で食堂に入ってきた。

「……」

「どうしたの、アマテラス？」

「枕を持ってくれば良かった……」

「……そうか……まあ、朝ごはんにしよう。今日は大事な日だからね」

「わかったのだ……」

とてつもない大きさの城門が控えている。これを見るとミカドのものは申し訳程度と覚えてくる。

「でかいですね」

「国が大きくなるまでは魔物の脅威から守ってきた城門だからなるほど」

衛兵に案内され、謁見の場に着く。サンカイさんとツバキさんは軽く会釈ですむが、こちらはそうもいかない。作法はいまいち分らなかったが、ユリカやシンをまねして膝をつき頭を下げるようにした。隣ではアマテラスもそうしてくれていた。ありがたい。

「よく来た、サンカイ殿。ツバキ殿もいつにも増してお美しい。ユリカ殿も、シン殿も元気そうだなにより」

「ウィルス王もお元気そうだなによりです」

「そうかしこまった言い方はやめにくれんか？おぬしに言われるとこそばゆい。短い付き合いでもないだろう？」

「…それなら。王も相変わらずで安心したぞ」

「うむ、……で、後ろの者は？忘れておったのならすまぬが」

「新しく親しい配下が増えたのだな。披露も兼ねてと思ってな」

「そうか、そなたら、名は？」

「ダイスケと申します、ウィルス王」
「……妻のアマテラスと申します」

ビシリッ

前方で膝をつくユリカさんから直視しがたいオーラが感じ取れる。俺は何とか声を出さずにすんだが、こういう場でそれはあんまりだと思っ。

「……なにかとても面白いことが起こりそうだが、今は後回しにしよう。サンカイ殿、今回は以前手紙にも書いたが後継者のことでな。わしももう長くないだろう。争いにしないためにも今のうちに後継者を決めておこうと思っているのだ」

「なにか問題でも？ 魔力の高いものが王になるのではなかったのか？」

「うむ、ノースの姫が一番の魔力を持っているのは変わっていない。だがな、今までウェストの王子と恋仲で、2人で国を盛り立てて欲しいと思って当人たちもそのつもりのようなのだが、突然姫がマリンの王子と一緒になると言い出してな」

「それは困りましたな」

「うむ、姫の急な心変わりも気になるし、ウェストの王子もかなり落ち込んでしまっていてな……」

「おい、分かりやす過ぎないか？ ユリカのことを考えても、原因はマリンの王子とかいうやつだろう？」

「そうとしか考えられないのだ。なんとかそいつと会う方法がないものかな？」

いまだにどす黒いオーラを出し続けるユリカをできるだけ視界に入れないようにしてアマテラスと小声で話す。と、そこへ天の声ともいすべき提案が降り注いだ。

「いつまでもここでこうして話をしておるわけにもいかんだろう。わしらは別室にて少し話をしよう。ユリカ殿とシン殿、配下の2名も今後とも付き合う機会のあるであろう、姫や王子と会ってみてくれんか。同世代なら言いやすいこともあるだろう」

「ありがとうございます、ウィルス王。では私たちは退出させていただきます」

「うむ、ま、今はその問題のせいで皆城におる。衛兵にでも聞けば場所も分かるだろう」

「はい、それでは……」

……

……

…

いまだにこちらに顔を向けようとしないユリカにどう声を掛けたらいいかわからず、重い雰囲気のまま侍女の案内を受ける。心なしか侍女もつらそうだ。

アマテラスに小声で謝ったらどうだと提案してみるがどこ吹く風だ。

そんなうちにノース姫とマリンの王子と思わしき2人がいる場所に着いた。城の者の中でも特に限られた者しか入れない庭園のベンチに2人はいた。

「王子様、ご機嫌麗しゅう」

不機嫌オーラをぴたりと隠し、というより恐怖のオーラに取って代わられたというべきか。100パーセント以上の確率でユリカを陥れたのはこいつだろう。

かなりのドレスに身を包んだおしとやかそうな姫がいた。隣には愛を語り合うにはぴったりの雰囲気をもし出している王子と呼ばれた男があり、その男はこちらを向くと姫とともに立ち上がり、優雅な礼をとった。

「ユリカ姫、少し見ない間にまた一段とお美しくなられましたね。このマリン、心よりうれしく思います」

なんでテメーがうれしく思うんだ？つかとなりに女がいて言っているセリフか？むかつくわ。

「で、そちらの美しい女性はどちらさまでしょう？」

俺とシンはガン無視かよ！

「ボクはアマテラス。これから国を切り盛りしていく立場として色々指導を頼むのだ」

アマテラスでさえ、すでにかしこまった言い方ができなくなるほど気分が悪そうだ。俺やシンは言わずもがな。

「アマテラス殿、こちらこそよろしくお願いいたします。そうそう、お近づきのしるしにこれを」

差し出してきたのはペンダントだ。どこかで見たことのある。ヤバイと思ったが、アマテラスに注意する前にアマテラスはそれを受け取ってしまった。

「……」

無言でそれを見つめるアマテラス。マリンの王子に目を向けると一瞬かすかにニヤリとした表情をした。

やられた！

と、

グシャッ
ボウッ

華奢な少女にしか見えないアマテラスが驚くべきほどの膂力でペンダントをつぶしたかと思っただらうつぶれたペンダントが派手に燃え上がり、灰も残さずなくなった……。

マリンの王子は呆然としている。俺はハッとしてアマテラスに尋

ねる。

「大丈夫か、アマテラス!？」

「大丈夫なのだ。これは呪術なのだ。色々な宝石と自らの血を魔力によって融合させ、宝石の種類によりさまざまな効果を出すものだ。この宝石との融合の効果は相手の自分への想いを強くさせるものなのだ」

「よく知ってるな」

「ボクの元の世界にも力を持たない人のような種族がいた。彼らは恐怖心をなくしたり、種族の団結心を高めるため、敵を籠絡、もしくはスパイさせるためなどに呪術を開発したのだ。ボクの知っているものと少し違うけど根本は変わらないと分かったのだ」

「で、どうすれば解ける？」

「それは……」

「つと、テメーは少し眠ってる!」

アマテラスの行動に顔を青くしたマリンの王子だったが、アマテラスの解説で今度は徐々に顔が赤くなり、しまいには腰の剣を抜きはなつ所だった。とつさの魔法だったのでつい姫とユリカ、シンにもかかってしまったが、まあだれかが怪我をするよりいいだろうと思うことにした。

「で、どうすれば解ける？」

「ペンダントを壊せばそれで終わりなのだ」

「何でユリカのはすぐ分らなかったの？」

「ティーターニアの魔力保護のせいかも知れないのだ。いまいち呪術の力の流れがつかめなかったのだ。ペンダントに触れなかったし」

「ユリカたちも何とかなりそう？ユリカは前にペンダントが外れないって言ってたけど」

「眠らせたのは都合がよかった。たぶん起きていたらペンダントを

壊そうとすると暴れたと思うのだ。深層心理にペンダントを外したり壊したら死ぬとあったとしたら、ダイスケはペンダントを外せると思うか？」

「無意識に外したり壊したりを拒絶するだろうね」

「そういうことなのだ。ではやるのだ」

アマテラスはそう言うとおつと言つ間にノースの姫とユリカのペンダントを壊してしまった。そしてマリンの王子に近づくともルンを介して体のどこかに他の人と違ったところはないかと調べはじめた。

『人の脾臓にあたる部分に水晶のような硬質な物質が存在します』

「破壊できぬか？」

『マジックで特定周波をだすモノをお送りしますのでそれをお腹に当て、スイッチを押してください』

「じゃあ、俺がやる」

指輪のマジックから小さなスピーカーのようなものを出し、スイッチを入れる。ピシリ、とどこかで聞こえた。

『完了です』

そのノルンの声を受けスピーカーをしまつ。そして一応何かあるかもと身構えながら皆を起こす。

「おはようございます……」

「おはよ」

これはユリカとシンだ。

「ここは……？」

ノースの姫はどうしてここにいるかも分かっていないらしい。そ

して……

「うつつ」

「やあ、王子、調子はどうだい？」

「お前は……」

「あら？キザな王子モードじゃなくなったのか？俺はダイスケ……」

「あたしの夫です！」

「……」

さっきのお返しとばかり即座に言うユリカ。俺は声も出ない。空気を読んで欲しいな〜と思ったり。

「ユリカ、それは後でボクとしっかり話し合おうとして調子はどうなのだ」

「調子？」

「ペンダントは外したのだが」

「あつ。外れてる……。……ふえ……。……」

涙を流しているユリカをやわらかく抱きとめる。たまったものがあふれ出るのか大泣きになってしまった。

「そちらの姫はどうなのだ？」

「はっ！あたしは何をしてたんだ？先日マリンからペンダントを受け取ってからの記憶があやふやだ……。！おい！マリン！なにかしやがったな！オラッ！キリキリ吐けっ！」

何だこの外見と180度違う言葉遣いは……。まるで戦士じゃないか。ドレス姿の一見おしとやかな姫が罵声と拳骨を振り回すギャップに呆然としてるとすでにマリンの王子はボコボコになってい

た。いい気味だと思っても今回ばかりは仕方ないだろう。シンも心なしかニヤついている。ユリカも泣く事を忘れたように呆然としていた。

惨事になりそうだったので姫を何とかなだめ、まだだった自己紹介をしあう。そしてぼろぼろの王子と向き合い話を聞くことにする。

「で、王子様、何が起きたか聞かせてくれないか？特に誰かに捕まった記憶とかないか？」

「……僕は王になりたかった。戦闘でも魔法使いは後ろからの攻撃が主だが、僕は先頭を行き自分の力を見せたかった。だが魔力の使い方がどんなに上手くなろうとも魔力の総量で王を決めるこの国では王になることはできない」

「それは聞いたが、どこから洗脳につながるんだ？」

「昔の大攻勢時にも先頭で突き進みとある強力な魔物を倒した。そのときにその死体は消えてしまったが、なにかの珠が残ったのだ。それに少くない魔力があることを感じ、僕はそれを飲み込んだ」

「飲み込んだ？それって確か魔物化した人や魔族の落とす珠のことだよな？コオとかいう」

「うん、シュウとインプが倒れた時にもあった気がする」

あの時その場にいたシンが肯定する。さらにアマテラスも付け加える。

「コオというものは一種の魔力増幅器官の元なのだ。倒した魔物が強大であればあるほど大きなものを落とす。人や魔族が魔物化した者が持つものなのだ。ただ、倒した直後はその魔物の意志も少なからず残っておるので、すぐ摂取すると魔物化するらしいのだ。浄化魔法や聖域と呼ばれる所、もしくは心というか魂の清い者の近くにあることで魔物化してしまった者の魂を救い、本来の魔力生成器官

の宝珠になるのだ。それを取り込むことで魔力が増大するのだ」

「では浄化前の珠を取り込んだためにこうなったのか。うーん、仕方ないっちゃあ仕方ないが……。そういえば魔力の上昇は感じたのか？」

「大きく上がったという感じではなかった」

「元からそれなりの魔力があるから当然なのだ。コオの大きさは元の魔族の力に比例するのだ。例えばコオの効果で魔力が1000上がるとして、それを摂取した者の魔力がもともと10ならば本人は100倍程になったと感じるだろうし、元魔力が100000あれば100上がったところでほとんどかわらないと感じるのだ。そして我らの中でも特に強い魔族が魔物化したという報告はない。だから膨大な力を持つコオはほぼ存在しないと言っているのだ」

「なるほどね。で、残念ながら王子の体の中のコオは破壊させてもらったからね」

「そうですか……。僕はこれからどうしたらいいんでしょう？」

すっかりおとなしくなってしまった王子は頭を垂れながらぼそりとつぶやく。

「コオがなくなったのだ。操られていた者たちも正気に戻っただろう。どのくらいまで覚えているか分からぬが、何か言ってくるものがいたらおとなしく謝るしかないのではないか？まあ、魔物に操られていたと皆には言っておけばいいと思うのだ。だから姫も許してやって欲しいのだ」

「……仕方ねえな。許してやらあ。とちよつと気になったことがあるんだが、お嬢ちゃんも魔族なのか？」

「うむ、そうなのだ」

「ミカド国にいる魔族の王だよ」

「なんと?!」

「今はダイスケの妻なのだ」

「あたしのです!」

「……！」
「……！」

ぎゃいぎゃい……

「ダイスケ殿と言ったか？放っておいていいのか？」

「俺が何か言った所でだめだろ？きつと。ことの発端はアマテラスがウィルス王の前で俺の妻だと言ったせいだけだね」

「面白い魔族だな」

「ミカドの魔族はみんな面白いよ。面白いというのは失礼かもしれないけど」

「魔族か……。ノースの北にある魔物たちと混同してはいけないのだな……」

「まあね。会話も普通にできるしね。ミカドの人々もほとんどが魔族と人との混血だよ」

「そうらしいな。こちらの魔物たちは会話すら出来ないからな」

「前に試した人がいるとか？」

「いや、それはたぶんあたししか知らないことだと思うが、言葉の系統が違うらしく全く会話が出来ないんだ」

「ちよつと待つて、文化的な話のできそうな連中がいるってこと？」

「ああ、誰にも言うていないが、一度魔物の大群から逃げている間に魔物の城に着いてしまい、施しを受けた。やつらも言葉を持っていることが分かったのはそのときだ。言葉は通じなかったが、一緒に貰った食料の傍につたない文字で食べ物と書かれていた。たぶんさらった人間から得た情報だと思うが」

「俺が聞いてもよかったのかい？」

「どちらにしても昔の大戦の影響で今は大きな戦を仕掛けられる戦力も指揮官もいない。が、君たちならこれだけの情報でも何か気づ

いてくれるかと思ってな」

「過大評価だと思うけど……」

「ふん、ミカドの魔族の王のことは人づてに聞いている。普通の人間が気安く接することの出来ない存在であることも。ダイスケ殿はもう少し自分の影響力を考えるべきだな」

「うん。俺もこちらに来てまだ日が浅いからねえ」

「日が浅いとは？」

「信じてくれるか分からないけど俺はこの世界の人間じゃない。厳密に言えば5000年ほど前のこの地の人間さ。今は魔族と同じ魔力体になっているけどね」

「そうか。将来あたしがこの国を継げばミカドの上の立場の人々とも上手くやっていかなないといけないだろう。いまいち話がぶっ飛びすぎていると思うが、これからよろしく頼む」

「こちらこそ」

ユリカとアマテラスを見ると何とか折り合い？がついたのかも言う争いは止んでいた。どういう結果になったのかとても心配だが、それよりもやるべきことがある。

「じゃ、王に報告に行くか？」

……

……

…

「……と、まあそんな所です」

ノースの姫から聞いた北の魔物のことだけは今は言っていない。姫自身が半信半疑な所もあるせいだが。

「なるほど。サンカイ殿、お主の配下の者は凄腕だな。どうだ、少しばかりウィルスで遊んでいかんか？」

ウィルス王の言葉にユリカが少し戸惑いの表情をしている。

「そうですねえ。俺が魔族と分かってても皆が普通に接してくれるんですけど」

「そうか、それは難しいかもしれん。まあ今日は盛大に宴をする予定だ。心ゆくまで楽しんでいって欲しい」

「ありがとうございます」

宴までとあてがわれた部屋で、ノルンの報告が届いた。前日保護した人が目を覚ましたと。風呂を済ませ、今は消化のよい食事を与えたら、少し落ち着いたらしい。ちなみに少女だ。

急いで貴賓館に向かう。

「具合はどう？」

「はっ……いやあっ！」

いきなり暴れだした。やばいな、男に犯されそうにでもなったのか？ついてきたアマテラスに後を頼み、部屋から出る。ノルンを通して報告を受けるか、アマテラスから念話を受けるかしかないだろう

う。

アマテラスからの念話とノルンの報告で大体の原因が分かった。名前はコトワリ。女性にしては珍しい名だと思った。一瞬見ただけだが、髪はウィルスでは珍しくミカドではそれなりに見ることの出来る赤い系統だ。どこことなく紫に見えるところもあるが。親は大戦時に剣聖と呼ばれるほどになった男。大戦の活躍で剣聖の称号を得たが、その大戦後から徐々に魔物による拉致が増えたため、住む先々で結構ないじめがあったようだ。人とは違う髪の色も原因のひとつかもしれないが。少し前にその剣聖が倒れて寝たきりになり、母親がその分の過労で亡くなってしまつとコトワリが食べ物を探すか稼ぐしかない。それなりに強大な魔力のおかげで戦で多少は稼ぐことが出来ていたのだが、いじめなどにより転居が増えるとその分新しい場所では魔法使いとしての仕事も減り、ほとんど物乞いのような状態になっていたようだ。ぎりぎりで貞操は守っていたようだが、いくら魔法使いとはいえ、まだ少女である彼女は屈強な男たちに囲まれて恐怖を覚えないわけがないだろう。

仕事を求めセントラルまで来たが、コトワリの顔を覚えていた者たちの憂さ晴らしの相手になってしまったらしい。自分に非がないのに不幸をこうむる人がいないわけではないが、さすがに命や貞操に関わるとあつては黙っていられない。何とかしたいと思った。まずは男を見ても平気なくらいまでは回復してもらわないとどうしようもないんだが。

ちょっと情報収集に外を回ってみるか。貴賓館を出るとノースの姫とちようど会った。隣に見知らぬ男がいたが、彼がウエストの王子なのだろうか？

「こんにちは」

「やあ、ダイスケ殿。こっちはあたしの婚約者のウエスト」

「どうぞよろしく」

「こちらこそ。いきなり聞いていいことが分からないんだけど1つ聞きたいんだ」

「かまわんよ」

「王子や姫の名は？」

「一般の者と違い、ウィルスの貴族5家の継承者に名はない。単に地名が名となる。現統治者は地名に様付け、息子や娘は地名に王子、姫と付く。ま、親しいなら土地名呼び捨てになるがね。だから継承の折には名が変わることになるな」

「めんどくさくない？」

「それが伝統では仕方ない」

「そつ、本人がいいなら」

「あまりよくないのな。あたしが王になったら変えるつもりだ。王や貴族だって道具ではないのだから」

「確かに。頑張つてね。ちなみにこれからどこへ」

「お茶だ。久しぶりにウェストに逢った気がするのな」

この地の者でない俺がいきなりコトワリのことを聞いてまわつてもあまりよろしくないだろう。王子と姫には悪いが、事情を明かし手伝ってもらうことにする。

「……そういうわけで、コトワリという子のことをすこしこころで調べたいんだ。お2人には申し訳ないんだけど、他国の者がそうそう首を突っ込めないし」

「コトワリというと剣聖の娘だろう。結構な魔力を持つ者と聞いている。よし、いいだろう。ウェストもいいな」

「ああ」

.....

…
…

とある喫茶店のようなお店にて。

「なんだ、結局八つ当たりに近いではないか……」

「くそう！もう1発殴っておくんだった！」

「ノース、それくらいにしておけ」

「結局この人たちの感情としてはどうなのでしょう？」

「そんなかしこまった話し方はこっちが疲れるからやめてくれ。あたしと秘密を共有した仲だろう？」

「何だつて!？」

「魔物は会話ができるかもしれないってことと俺が魔族だってことですよ」

「なんだ、それなら俺も知っている。あんなことがあったばかりなんだ。びつくりさせるんじゃない。」

「ウエスト……悪い……」

「仲のいい所、申し訳ないけど、結局どうなの？」にやにや

「あ、ああ」

「そ、それはだな、結局魔力も戦闘能力もないものはこの地では少し低く見られてしまうんだ。それに加えて頭も悪い人間は救いようがない場合が多い。コトワリが空腹で疲れているところに不意をつけて憂さ晴らしをしたのさ」

「とんでもないな」

「しかし、いつもあたしらの目が届く所に置いておけるわけではないしどうしたものか……」

「彼女の家は？」

「わからん」

『現在はノースとウエストの境にあるようです』

「なんだ、今の声は？」

「俺の仲間だよ。俺は多少一般の人よりも出来たり知っていることがあるけど、それ以上に色々な方面に特化した仲間がいるからね。ユリカの例のペンダントの件もあったからウィルスに多少目が行くようにしたんだ。ウィルスの人々の生活をどうこうするつもりはないから安心して」

「そうか、そういうことなら仕方ないな。出来ればウィルスのためになる行動をとってくれるとありがたい」

「将来はウィルスとミカドくらい離れていてもその場にいるかのように話ができるかもしれないね」

「そんなことができるのか」

「たぶん」

「楽しみにしておこう」

「さて、コトワリを一度は家に連れて行かなくてはいけないのではないか？」

「そうですね。ついでに魔物の王に会ってこようかな」

「危険だ！」

「しかし拉致のことを考えても、やつらが少しでも文化的なところがあるならそれに賭けてもいいかと思うんだ。魔物を抜けて行き来するだけなら俺とアマテラス、アメノトリフネがいれば大丈夫だろうし」

「アマテラスとアメノトリフネ……。御伽噺に出てくるいい魔族の王とその妻の名だが……？」

「ウエストはまだ知らないか、ダイスケ殿と一緒に来ている。アマテラス様はかわいらしい女性だ」

「ほう？鬼のような苛烈な方だと思っていたが……」

「年をとれば丸くなるんじゃないの？」

「おいかつた？」

「さあ？最低ごせん」

ポカツ

「いたつ。って、アマテラス、どうしたの？」

「女性の年のことを言うのはご法度なのだ」

「そんな事いったつてもうそんなこと気にする歳でもないだろう？」

「なにお〜！」

ダイスケとアマテラスの漫才？の傍ら、ウエスト王子とノース姫は

「ごせんとか聞こえたぞ？もしかして5000か？」

「あたしもだ」

「うそじゃないのか？少女だぞ？」

「しかし魔力量は半端ではないぞ？納得してしまう何かがある」

「見かけで判断してはいけないということか」

などところこそ言っていた。アマテラスに聞こえていなかったのがせめてもの救いだろう。

「で、コトワリは？」

「白虎とケルベロスに任せてきたのだ」

「彼らは今回損な役ばかりだな」

「暇よりはいいと思うのだ」

「まあね」

「で、彼女の件、どうする？」

「ノースとウエストの境に家があるらしい。親もいるようだし、そこへ一度連れて行き、出来たらミカドへ移住させたい」

「ダイスケ殿、いいのか？」

「ここらでいじめにあつて、食べる事さえきちんと出来ないよりマシだ」

「いじめ？」

アマテラスに経緯を説明する。やはりひどく憤慨してつい隠して

あつた後光のようなオーラを出してしまった。

「アマテラス！抑えて！やつらは姫が懲らしめたから！」

「……そうか。礼を言うのだ」

「見る、王子と姫、完全に畏怖で硬直しているじゃないか」

「申し訳なかったのだ」

「え、あ、いいえ、大丈夫です」

「こちらこそ外見ばかり見てアマテラス様を軽く見てしまっていた
ように申し訳ありません」

「アマテラスとアメノトリフネは御伽噺の存在なんだとさ。実在す
ると分かればそりやびびるわな」

「ふむ、仕方ないのだ。ボクたちの力はそうそう解放していいもの
ではないのだ」

「外見や言動は小娘なだけだね」

「うるさいのだ」

「はいはい」

その後は和気藹々とお茶を飲みながら会話を楽しんだのだった。

帰りしな、王子と姫に2人きりの時間をつぶしてしまったことを
わびる。また後でとその場は別れた。城の方向に向かっていくアマ
テラスとダイスケを見送りながら、ふと王子が言った。

「すごいな、ダイスケ殿は」

「ああ、あのアマテラス様と対等に話している」

「抑えているとはいえ、あのアマテラス様の力を前にしても全く動
じていない」

「本人は鈍いだけだと言っていたが、なかなか」

「ユリカ姫の召喚の儀、実はアマテラス様とこの地と重なっている
というアメノトリフネ様の願いだったのかもしれない」

「そうでもなければ対等に話ができる者などいやしないだろう。アマテラス様ほどになれば」

「今は全てが正しい方向に動いているということか」

「将来は将来であたしたちも力になれるさ。いや、力になれるだけの国にしてみせるさ」

「そうだな。俺も手伝うよ」

「当たり前だ。あたしの夫になるのだから」

……

……

…

夜の宴はそれは盛大なもので。ウィルス王とサンカイさんには俺とアマテラスがもう少しウィルスに滞在し、北の魔物の城に行つて見る事を提案した。

「危険ではないか？」

「ダイスケとアマテラス様ならば大丈夫だろう」

「アマテラス様？ひょっとして御伽噺に伝わるアマテラス神のことではないだろうな？アメノトリフネ神と並ぶ」

「本人だ。ちなみにアマテラス様の髪の後ろについている髪留めがアメノトリフネ様だ」

とたん、ウィルス王がアマテラスに向かい膝をつく。宴が終わつてからにすればいいのにと心の片隅で思いつつも、アマテラスという存在はかなりのものであるのだろつ、彼らにとつて。

「アマテラス神には今までのご無礼重ねてお詫び申し上げます」
「なんなのだ？急に。そんな程度のことでもボクは怒ったりしないのだ。それにこの地にどんな風にボクのことや伝わっているか知らないけど、ボクはアマの町と魔族、広げてもミカドの国の人々にしか色々してあげていないのだ。だから氣を使わなくてもいいのだ。力の強さの関係なしに、ウィルス、ミカド、魔族の町アマ、各々のトツプというだけの考えでいてくれたほうが氣が楽なのだ」

「いえ、伝承にあります。我らの祖先がミカドから出るとき、餞別として守り神をつけていただいたと。ただの石のように見えてそれは旅の、そしてこの城の城壁で己の身を守るために役に立ったと」

「……」

「アマテラス、もしかして忘れてんのか？」

「そそそ、そんなことはないのだ」

「アマテラスの力の1000分の1でもそりや当時の人にとっては神のごとき力だろうね。その守り神ってどこにあるんですか？」

「この城の地下の一室に祭られている。現在はその力のほとんどを失っているようだが、その力をわしらのために使ってもらったことをウィルスの民は忘れてはいけないと思っておる」

「王子たちはこの話は知ってました？」

「初耳です」

「王にのみ伝わるものだ。軽々しく放てる情報ではない。ただ、この地に父なるアマテラス様が参られた時にはそこへお連れするようにと長年伝わっている」

「ならば行ってみなければならぬでしょう、アマテラス、忘れていたことはもういいから行ってみようよ。というか俺も行ってもいいんでしょうか？」

「アマテラス様の夫君であるならわしらに止めることは出来ませんな」

ウィルス王はにやりとして言う。

「勘弁してください、アマテラスもユリカも悪乗りしただけなんですから」

「なんと、ユリカ姫もか。サンカイ殿、これはおもしろくなりそうだと思うんか？」

「ウィルス王は他人事だからそういつて笑っていられるのだ。当事者にしてみればたまったものではないだろうよ、なあダイスケ？」

「これだけの美人2人では俺が捨てられる確率の方が高い気もしますが」

「それはどうかな？ウィルス王よ、国政はとつとノースの姫に任せてミカドに遊びに來い。毎日なかなか楽しいぞ」

「うーむ。それはひどく魅力的だ。アマテラス様に友人として接する機会はあるだろうか」

「ミカドに住むものはみな友人さ。これからはウィルスもそうなるだろうよ」

「そうか。楽しくもない国政にこの身を費やしてきたが、人生の最後にこんなに楽しみなことが起ころうとは。長生きするものだな」

「きちんと王位を継承してからだぞ」

「分かっている。ではアマテラス様には祭壇の間へ」

「分かったのだ。それから言っておくが、ボクの事はアマテラスと呼び捨てでもかまわないのだ。ここに居る者たち、ミカドの者は言わずもがな、ウィルスも今後長い友人となると思うのだ。些細な相談なども出来る友人として付き合って行きたいのだ。今後ともよろしくなのだ」

「結局アマテラスが一番えらそうじゃないか。なあシン？」

「ダイスケ兄ちゃん、ぼくに言わないでよ。アマテラス姉ちゃんの目が怖いよ！」

あたりは将来に不安をもつものではなく、明るい未来があると確信できるような明るい笑いに包まれた。

……
……
……

「ここが祭壇の間だ。埃っぽくて申し訳ないが」

何年も開けたことのないであろう扉を押し開け中に入る。中には小さな石がちょこんと置いてあるだけだ。アマテラスはそれに近づき、柔らかな後光を出しつつ石に光を当てる。

「……父様……」

石というか城全体が鳴動し発音しているかのように声が聞こえた。

「思い出したのだ。スダマだな」

「はい。今は城全体の石や無機物に我が魂が通っています。父様が来られたときに挨拶すべきでしたがそれだけの力も残っていない状態でした。申し訳ありません」

「よくぞウィルスの民を守ってくれた。礼を言うのだ、ありがとう」
「もったいないお言葉です。我はたいした魂も持たない低級魔族。たいしたことも出来ず申し訳ありません」

「この地を抜けると言っていた当時の者たちを守るには普通の者には見えない者をつけるしかなかったのだ。北の魔物のことも多少分かった今となつてはもっと力を与えてやればよかったと感じておるのだ」

「しかし魔族と袂を別れた当時の民にこれ以上の餞別も出来なかったのも事実。父様の決断は最良でした」

「そういつてくれるとありがたいのだ。これからよろしくなのだ」

「また力を注いでいただいた今、安心しておまかせを」

「うむ」

「スダマ殿と言ったか、わしはウィルスの王。今までの守護、礼を言わせて貰う。それから今後力のない民を守るためにお力添えを願いたい」

「ウィルスの王よ、あなたが国のために尽力しているのはいつも見てきた。我にできることは少ないが出来るだけのことをさせてもらうと約束しよう」

「ありがとうございます」

……

……

…

「なんか全てアマテラスの手のひらの上みたいだなあ」

「スダマのことに關して言わせて貰えば、彼はあんなに力のある魔族ではなかったのだ。これはひとえに彼を直接的でないにしろ信じてきた者達の力なのだ。当時ミカドと袂を分かれた人々は、世界の重なりによってできてしまった神話に当たる魔族を信じることが出来なかったのだ。当然だとも思うが。ボクはあまり神話を感じさせないよう、それでいて少しでも心のよりどころとなればいいと、當時石に宿っていたスダマを贈ったのだ。あまり関わってこなかったことは心苦しいが、うまくいってよかったのだ」

「終わりよければすべてよし」

「そうなのだ」

「そういうわけでウィルス王、後に後悔しないためにも、コトワリ家の訪問と北の魔物への突撃の許可をいただきたいのですが」

「仕方あるまい。わしらにも近況や安否が分かるようにしておいていただけるなら許可しよう。そして劍聖の子、コトワリについては

まったくこちらの落ち度であろう、うまくはからってほしい」

「分かりました。で、サンカイさんたちは国に戻るって事でいいですね？」

「われらは残るぞ？」

サンカイさんが言い、ツバキさん、ユリカ、シンも頷いている。

「は？王家の人々には行程が終われば戻ってもらうつもりだったんですが」

「ケイには緊急時には通信できるだろう？ならば我らはめったになーい一般人としてこの国を楽しもうと思ってな」

「ふむ。北の魔物の地についてこないのであればなんでもいいです。最低でもサンカイさんクラスの人でないと安心できませんので」

「ぼくは行きたかったな」

シンが言う。

「この国の熟練者でも危険な土地だ。はっきり言って国の将来を支える人は連れて行けない。なんとか納得して欲しい」

「……分かった……」

なんとかシンをなだめる。

その後は歓談が続いた。魔法にて回復したマリンの王子が平伏して許しを請う場面などもあったが、アマテラスの魔物に魅入られたので仕方ないという説明に一同納得したようだ。サウスの王子、現王の子のセントラル王子の顔合わせも行い、ミカド及び、アマテラスの紹介により色々納得し、今後ウィルスを盛り立てていくことになったのはご愛嬌か。アマテラスの威光が大きかったのは否定できない。ウィルスに来る前は心配が絶えなかったが、蓋をあけてみれば結構友好的な関係が築けそうだ。将来は分らないが今はこれでいい。未来は未来を担うものが各々責任を持てばいい。

ウィルスの美酒に酔いながらそんなことを思った。

そしてこの日、もっとも苦勞していたのはコトワリの世話役を預かった友魔たちであった。結局白虎とケルベロスだけでは足りず、オベロンとティターニアも宴に出ることなく世話を焼いていた。白虎とケルベロスのインパクトと恐怖が大きかったのか、獣姿の彼らに慣れて笑顔まで見せることが出来るようになった彼女は男性への恐怖心もさらにと流されてしまっていたのだった。

宴の後、心配で貴賓館を訪れたアマテラスとダイスケは白虎の大きな体軀の中ですよすやと眠る少女に笑みをこぼした。

第14話 劍聖

朝だ。ほぼ同じ時刻に起き出したミカド王家4人とともに朝食を取る。だがウィルスの貴賓館にはちゃんとした厨房が存在しない。

お湯を沸かす程度の小規模な物だけだ。従って各食事は城からのデリバリーか外に出てすますことになる。試しにデリバリーを頼んでみたらパンとスープ、少しの副菜が届けられた。当時の日本の若者として少し特殊かもしれないが、朝はしっかり食べたい。昼も夜もしっかり食べるせいでこんな腹になったのだが、それはそれとする。

パンも当然おいしくいただいたが、少し物足りなく感じ、マジックにて即席だがご飯と味噌汁を出し、海苔と生卵、少々の漬け物でいただく。女性陣はともかくサンカイさんとシンも物足りないということだったので、同じものを出す。冷凍や冷蔵の輸送手段がないミカドにおいて、卵を生で食べられるのは養鶏をしているイクサの町だけだ。サンカイさんは久しぶりだと喜び、食べたことのないシンはちよつと遠慮したようだ。

と、コトワリが起きてきた。

「お……おはようございます……」

「あ、おはよう。よく眠れた？」

「は、はい。それからありがとうございます」

「どうかした？」

「怪我を治していただいただけでなく寢所まで……」

「怪我をなおしたのは俺じゃなく姫だし、よく眠れたのは白虎たちのおかげさ。寢所は王。」

誰がどうしたかを説明するついでに紹介も。コトワリはそのつど腰が折れそうなほどの礼をしていた。

「しかし最初に私に気が付いたのはダイスケ様と聞きました。それがないければ今頃どうしていたか……」

「そんなに気にしなくていいよ」

ぐ

顔を真っ赤にしてうつむくコトワリ。聞けばもう2日も水のみだそうだ。ただいきなり重い食事もどうかと思い、マジックで粥を出す。マジックは驚いていたが、魔法などではなく、俺しかできないということとで納得し、ウィルスの人にあまり言わないようにと軽く釘を差しておいた。返事よりも先におなかの虫が鳴ったのでさらに赤くなって撃沈していたが。

「おいしいっ！」

「それはなにより。おや、白虎、おはよう」

のそりと巨体を揺らしながら部屋に入ってくる白虎。眠そうな雰囲気はみじんも感じ取れないが一応聞いてみる。

「よく眠れた？」

「ふん、我ら魔族は人のいう睡眠を必要としない。その日に得た経験を、記録として整理するしばしの時間があるのみなのだ。肉体の限界と、その知識、情報の整理が必要になったときに眠りにつく」

「アマテラスは寝てるみたいだけど……」

「父は人と重なったことが原因なのだろう、日々の睡眠で情報の整理を行っているようだ。そのおかげか今までこの地で5000年眠

りにはついていない」

「そうなんだ。じゃあコトワリにつきあってくれてありがとうね」

「あ、ありがとうございます！」

すかさずコトワリも礼を言う。

「気にするな。人の温もりも悪くない。それよりも、コトワリとやら、お主には我らに近いにおいがする。もしかすれば我ら魔族の血に連なる者がおったのかもしれない」

「私に魔族の血が流れていると……？」

「髪の色を見てもその紫の系統はミカドでは王家にしか出ないものだ。女性というのは珍しいが。ま、決まったわけではないがな。そんな感じがするだけだ」

「ま、今日から魔王に会いに旅立つからお父さんにでも聞いてみたらどうだい？」

「魔王に！？無茶です！」

「それは試してみないとわからんさ。というか魔王の情報があるの？」

「噂ですが、耳をつんざくような声と一切の攻撃を寄せ付けない障壁を持っているようです」

「攻撃手段は？」

「魔王の攻撃を受けて生きて帰ってきた者がいないので……」

「なるほど。じゃあそれなりの対策を練っておかないとね」

正直対策なんてなく、行き当たりばつたりのつもりだった。魔王が文化を持つ種族であることもわかってるし、アマテラスも同行してもらったから特に危険はないのではないかと思っている。

食事を終え、自分たちはお茶を、シンやユリカ、コトワリにはオレンジジュースなど出しながらアマテラスたちが起きてくるのを待

つ。オレンジジュースなど、この世界でも珍しいものではないが、3人とも今までのものよりもかなりおいしいと言っていた。少し寒いウィルスの地であるが、大昔に研究されたであろう、植物の改良の成果は十分に発揮しており、養分などの関係上、味はともかく、季節を問わずにできる果物なども豊富だ。ただし、その植物の管理などはウィルスは特にきっちりされており簡単に無料で口にするものはないらしい。そして今の世界では大昔の、自分の感覚では現代の農業、特に果物等食べやすい味や糖度のものにする研究、さらにはより『売れる』ジュースの研究開発。ジュースというよりもただの絞り汁に比べたらかなりの差だろう。

……

……

…

「おはよくなのだ……」

アマテラスが起きてきた。相変わらず眠そうだ。いつもなら髪留めと化しているアメノトリフネが髪の端っこで落ちそうになっているのだが、今日はお客さんもいるためか眠そうな顔以外はきちんと整っている状態だ。

「朝ごはんあるよ。冷めてるけど」

「昨日飲み過ぎたのだ。お茶漬が欲しいのだ」

「どうすんだよこれ。あ、そうだ。マジックで向こうに送って研究してもらおう。他の素材や調味料も送れば栄養価や味の改良ができ

るかもヴェルザンデイ、よろしくね」
『かしこまりました』

マジックでお茶漬けを出す。基本すでにお椀によそった状態でお盆にのって出てくる。レトルトなどもそうしてもらっている。ビールやペットボトルから出してさらにびっくりさせるのが後々説明に面倒だと思っただけなのだが。

「飲み物はお茶でいいか？」

「野菜ジュースが いいのだ」

「色々講釈多いな。ま、今日から少し大変になるかもしれないからいいか。あ、皆も飲みます？」

「ダイスケよ、野菜など搾っても搾り汁などというほどのものにはならんぞ？」

サンカイさんが疑問を言ってくる。

「じゃあ皆の分も出しましょう」

そして俺とアマテラス以外の人は恐る恐る口をつける。

「……………うまい……………」

「おいしいです！」

「うーん……………これほんとに野菜だけなの？」

「味を整えるのにリンゴやオレンジなども使ってるけどね。搾るというよりは飲み物になってしまうほど細かく切り刻んでいる感じなのかな、よく知らないけどそんな感じ」

自分で出した方がいいが自分で作ったわけではないのであいまいな答えになってしまう。だが野菜ジュース自体は好評でまた頼むと言われた。それよりも魔法の効かない、もしくは魔法が当たっても壊れない丈夫な鍋に大量に野菜や果物を入れ、『風刃』とかの魔法をたくさんかけたりすりつぶしたりして飲み物状にする研究をしたほうがいいのではないかとも言っておいた。そうすれば後はいつでも自分たちが飲めるのだから、と。

サンカイさんは面白そうだと、早速ケイさんに連絡していた。

食事も終わったので出発の挨拶もかねて城に向かう。コトワリは王に間近で会うのは初めてだったらしく、とても緊張していた。

「そなたがコトワリか。そなたの父には世話になった。母も美しくとても頭のいい女性だった。そなたもだいぶ母に似てきたな。将来が楽しみだ。他の民の手前、特にかばってやることができず、ひどい仕打ちを受けておったことを知らずにいたことは王の責務としても憂慮すべきことであるが」

「とんでもありません。父も母も幸せだと言っておりました。王のおかげでございます。それに母が生前言っておりました。王とは将来へできる限り多くの子孫を残すのが仕事だと。10人より100人。しかし男性100人より男女5人ずつ。目先のことしか見ない一般の民には理解のできぬ悩みをたくさん抱えられているのだとそれを思いましても私は自身のことや家族のことで私の力が足りなかったのでしょうか」

「そういつてくれるとありがたい。とにかく今は父の元へ行き、一度顔を見せてくるがよい。そして父共々ミカドに移り住むことも考えて欲しい」

「ミカドにですか？」

「うむ。剣聖の名は高いのだが、結局兵士となるしかなく、中庸な能力の者はたいがい戦死してしまう。だから剣聖という名は魔物は目に見えない所や時では目障りになるのだらう。剣聖もそなたも心休まる時すら作れずに何が王だとも思うが、今はそれが一番いい」
「わかりました。父とも相談してみます」
「うむ。そしてワシや王子たちがウィルスと同じ間違いを起こさない国にして見せよう」

「父も母も王の気苦労をいつも気にしておりました。お体にはお気をつけあそばしてください」

「ふふ。今生の別れでもあるまい。その内ミカドに行った際には道案内を頼もうかの」

「はいっ！ありがとうございます」

「うむ。ではアマテラス殿、わが民をよろしく願います」

「まかせておくのだ。では行ってくるのだ」

「ではサンカイさん、出発いたします」

「気をつけてな」

「はい。何かあれば必ず連絡を入れますので」

「ダイスケさん、気をつけてね」

「ありがとう、ユリカ、行ってきます」

「いつてらっしゃい」

……

……

…

「……で、なんでノースの姫とウェストの王子がおられるんです？」
「自分の領地に帰るのに何でも何もなかつ！」

ノースの姫はがははと笑いながら話す。いたずらがうまくいったときの子供のようだ。全く外見にそぐわないこと甚だしい。ウェストの王子は笑いをかみ殺しながら説明した。

「本来は護衛です。正直あなた方に護衛はいらないと思いますが、コトワリさんには護衛が必要かと思ひましてね。アマテラス様方は道案内とでも思ってください。」

「ウィルス王が謁見の最後ににやりとしたのはこれが理由だったのかな？」

「でしようね。常々『王の責務で溜めた疲れを癒すのは部下をからかうことだ』と言っていますから」

「受けるほうの身になるとんでもないな……」

「ええ……否定できません……」

「がんばってな……」

……

……

…

1日歩くと到達する地点にこの地で生きていく人にそれほど違いはない。当然そういったポイントに宿場が多いのは当然である。地理に疎い俺やアマテラスはノースの姫のひいきな宿に行くことになった。

「毎度、旦那、今日は5人だ。俺とウェストは1部屋でいいとして

後3部屋頼む」

「おお、ノース様じゃないですか」

「様はやめると言っただはずだ。それにオレはまだノースの王を継いではいない」

頬をひくりと動かしながら宿の主は答える。ノースの姫の機嫌を害した時、それを戻すにはウィルス王かノース王、もしくは最高級の酒がいる。樽単位で。

「すみません姫。ほらあんたも謝りな！」

一緒にいた女将にばかりとやられた旦那は土下座すらしそうな勢いで謝っていた。

「では姫、お部屋はいつものところをお願いします」

王子や姫とあろうものが多い。ノースの姫は今回だけはアマテラスに部屋を譲ろうとしたのだが、最初に同行する時点で周りには従者という立場でお願いするといひ含めてある。小声でどうするかと聞いてきた姫だったが、従者用の部屋でかまわんとアマテラスに言われていた。が、一見清楚、中身は猛獣のような姫が小声で言ったところでそれは常人には普通の会話と変わらない。結局アマテラスはアマテラスであることがばれ、姫と王子を差し置いて最上級の部屋になっってしまった。

「ちゃんと釘を刺しておくべきだったね」

「うむ、ウィルスの普通というものも試してみたかったのだが……」

「コトワリの家に向かうにはもう1日はどこかへ泊まらないといけないらしいから明日は普通にしてもらえばいいさ」

「そうするのだ」

食事も姫や王子から見ても数ヶ月に一度のレベルのものが出たらしく、ダイスケとアマテラスはそう話し合い、姫にそうするように伝えることにした。

……

……

…

2日目。危険はほぼない。王子と姫が単身歩けるのがその証拠だ。実際は赤い月の影響で魔物化したものたちは片っ端からさらわれているし、野生生物は食用に狩られてしまっているためだ。まれにマシンが出るようだが、そのために逃げる用の鉄の塊などは普通の旅人も持っているようでそれほど危険はない。ただその『まれ』に、さらには『極まれ』当たってしまったようで現在5人は3対のマシンと対峙していた。

「クソったれ！鉄が足りない！3匹同時などここ何年も聞いていないぞー！」

「どうするんだノース！」

「どうもこうもあるか！やるしかないだろう！コトワリ！お前は鉄を持っていないか？」

「すみません……」

「仕方ない……」

と、紙を破く音を何倍と比喻するのも愚かしいほど強くした音が響き渡る。同時にマシンは真っ黒になり煙を上げていた。

「天罰なのだ」

「かつこいいな、アマテラス。俺もそういう派手なの使いたいな。教えてくれよ」

「ふふん。簡単に出来てはボクの立つ瀬がないのだ。よって教えないのだ」

その会話からアマテラスが何かしたこと。ダイスケが驚いていないことを見ると2人にとってはマシンは脅威でないと理解でき、ホツと息をつく。その間にもダイスケはマシンの背中から何か黒い板を剥ぎ取り、黒い体液を吐き出す体内から白っぽい箱を引っこ抜く。

「これでよし」

なにがこれでよしなのだろう。小首をかしげる。ダイスケは疑問に答えてやる。

「マシンは電気というもので動いている。この世界になじみはないだろうけど雷が一番近い。あれよりもっと少ないが。よってこいつらの体に通っている電気を乱せるほどの、こいつらはその対策をしてあるだろうから先ほどのアマテラスの電撃程度のもが必要になっってしまうが、それをぶつけることでこいつらは動かなくなる。そして背中黒い板は日の光を電気に変えるもの。この白い箱はそ

れを貯めおくもの。これさえ切り離してしまえばこいつらはただの置物と同じになる」

「それは初耳だ。鉄を与えれば逃がしてくれるとは聞いていたが」

「こいつらの体はほぼ鉄で出来ているからね。それが必要になった時に手っ取り早く鉄を得られるように人を襲うんだろう。もう動かないから見てみるか？」

体をひっくり返し、体液に見えた、実際はオイルを流して中を覗かせる。基盤やモーターなどはこの世界の人に見せてもわからないだろうから、手足の構造などをだ。

姫は今後にも影響するのだろう、どの程度の電撃が必要なのかを聞いてくる。

「その前に魔法で雷は作り出せるのか？」

「そういう魔法がある。人を数分ほど麻痺させるための魔法だ。先ほどのアマテラス様ほどの威力は望めない」

「雷や電気は空気中をほぼ伝わらない。何もなしに倒すにはアマテラスほどの雷撃が必要になる」

ノルンたちの解析結果を得ながら説明する。ただ、魔法がどの程度威力があるか分からないため、ノルンからセンサーといわれた箱を出し、マシンの残骸の中に設置、それに向かって魔法を打つてもらうことにする。

「……いかずちよ敵をうがて。Thunder！」

こちらはこちらでウィルスの人の魔法を見るのは初だ。よく見ておくことにする。研究は後でもいい。ノルンにも記録を頼んでおいた。

「ふうむ、内部破壊までは行かないようですね」

実際なんのセンサーかは知らないが、そういう結果がノルンから上がってきたので姫に伝える。

「やはりか。ウエスト、お前も試すか？」

「いえ、私ではノースよりも大きいかずちは打てませんから」

「では次にいつてみましょうか」

「次？」

「ええ、ウィルスの魔法を俺は知らなかったのでも言えなかっただけで、今を見たらあることを思いつきました。剣をマシンの体にあてて、いかずちを剣に走らせ、マシンに当ててください」
「ふむ、よくはわからんがやってみよう」

「……いかずちよ、わがつるぎを伝い、敵をうがて。Thunde
r！」

ピーッ

マシンの体内から警告音のような、これはディスクが現代人であるから感じるだけだが、そんな音が響いた。

「何だ今の音は？」

ノルンからの説明を受け、姫に話す。

「内部が麻痺する程度の雷撃を与えられたようです」

「おおっ、やった！……しかし実際に出来るのか？」

「えさ代わりの鉄に細い鉄でよったひも状のものをくっつけておいて、それをマシンが持った瞬間位しか出来ないでしょうね」

結局はそれなりに鉄の塊を持ち、逃がしてもらうのが一番危険が

ないと判断された。今まで鉄さえ持つていれば助かったのだから現
状ではそれ以上のことは出来ない。命が助かる、さらに無傷なら特
に周りを騒がせることもないだろうということだ。

……

……

…

今日は普通に宿に泊まった。従者らしくないアマテラスに宿の者
は何かを感じていたようだが、それを口にするようでは客商売は成
り立たない。信用が一番だ。ただ何かを感じたのかそれとも今後の
ひいきをお願いするためか食事はいつもより豪勢だったようだ。

……

……

…

3日目。やはりまわりの客よりも一切れ多い肉や、少しだけ色の
濃いスープなどを見ながら食事を終える。身支度を整え宿の女将に
はまた来るよ、などと社交辞令を加え扉を開ける。と、そこにはこ
れまでに見た一般民と少し毛並みの違う格好をしたじい様がいた。

「おお、姫、ご機嫌うるわしゅう」

「じ……じい……」

よほど怖いのかもしくは頭が上がらないのか。これまで「がはは」と笑うような姫だったのが別人のようになってる。借りてきた猫のようだ。ただ、だんだんと口論のような感じに発展し、その薄いメッキははげつつ見える。

隣で笑いを抑えているような顔をしているウエストの王子に誰なのかと問う。どうも姫の教育係を勤めていた人物のようで、伝書鳥が何かで連絡が行き、何かしらの連絡、もしくは迎えに来たのではないかと言っていた。その間にもそのじい様と姫の会話はヒートアップしいつかは殴り合いの喧嘩にでもなりそうだ。するとそのじい様、懷から何か絵のようなものを取り出した。

「ほっほっほ。姫、これが何なのかお分かりかな？」

「ふん、そんなものでオレを黙らせようったってそうはいかねえ！」

「ほっ、よく見るがいい」

「なにっ！……そ、それはっ！」

「そう、姫がマリン王子と結婚すると騒いでおった時のドレス姿だ」
「よ、よこせっ！」

姫から伸びてきた神速ともいえる手をかわし、にやりとして続ける。

「もうノースの民は皆持つておるわ。複写士に複製を大量に作らせ
たからな」

「くそっ！だれの差し金だ！」

「姫がこの姿を広くノースに広めよと言ったと聞いているが？」

「やはりマリンは殺しておくべきだったか！」

「物騒な……」

ウエストの王子が何とか姫をなだめる。

「で、なぜじいがここにいる？」

「そんなことよりも同行者殿をまず紹介するのが先じゃないのか？」
「ぐっ……」

アマテラスの紹介時には全く年寄りに見えない優雅な動きで一礼し、お目にかかれてうれしいとやっぱり年寄りに見えない魅力的な笑みを作った。

「で、なぜここにいる？」

「今後の予定を聞こうと思いましたが。ウィルス王から魔王のところにいくと聞き、ノース王も困りましてな。玉砕覚悟で臨むのか？生きて帰る気がどこまであるのか？同行者様の實力は？色々確認したかったので。それから姫には是非ノース城まで来てもらってウエスト王子と付き合っておったのを別れ、マリン王子と婚約、破棄してウエスト王子とよりを戻した理由をその口から民に伝えていただかなくてはならんのですよ」

「めんどくせえ」

「いくら浄化前のコオにマリン王子が汚染された、それが原因だとしても、元気な姿を民に見せて欲しい」

「考えておく、その内な」

「……、ワシを怒らせるつもりか……？」

「ふん、いつまでもじいの庇護の下、ひな鳥のような感覚でおってもらってはこまるな」

「止めなくていいの？」

「いつものことなのです」

ため息をつきながらウエスト王子が言う。王がいて王子や姫がいる。王とて暇ではないから教育係をつける。ただしその教育係は教育に関してのみ王と対等に話すことができ、王子や姫が戴冠したとき、初めて王子や姫の臣下となる。これはウィルス内ではどこも同じで、そのような大役は結局、王にですら友人感覚で話ができるほど心身ともに強い人物に限られる。そしてすでに喧嘩は場所を移し広場でどこからかじい様の出した木剣と盾による大立ち回りと化していた。

ウエスト王子も安心していうようで、広場に向かうすがら、話は魔法のことに移っていった。

「昨日初めて魔法を見せてもらったけど、基本としてどんな感じ？」
「最初の数語にて魔法がどのように発動されるかしっかりと想像します。そして魔法言語を魔力を放出しながら発音します。想像も大切なのですが、一番は魔法言語の発音と言われています」

「それは魔族の魔法に近いな」

首をかしげるディスクにアマテラスは説明する。

「ボクの雷撃やケルベロスの炎などなのだ」

「ああ、なるほど」

「膨大な魔力さえあれば想像のみで発動する。ミカドの魔法は違った方向からいかに簡単に来るかを考えて発展したもの、ウィルスはボクたち魔族の方法を人なりに精錬させたものだと思うのだ。どちらが優れているとかではない。同じ魔法という結果をウィルスは精神力で、ミカドは知識で発現させているのだ。どちらにも長所も短所もある。ウィルスは移動型というべきかな、ミカドの設置型と比べてだが。あのように1対1になっしまえば魔力をこめて想像して発音する、もしくは魔力の文字を書くなど出来ぬから1対1は双方の弱点なのだ」

多少の野次馬に観戦されながらもまだ大立ち回りをしている2人をみながらアマテラスはそう言った。

………
………
………

えらく晴れやかな顔の姫と落ち込んだ風なじい様。聞けば負けなかったのが初めてだったらしい。老化とか言ったらぶっ飛ばされそうだとディスクは内心思った。

ウェスト王子はノースとウェストにほど近いここでの大立ち回りはうわさとなりノースの姫への評価も元に戻るだろうと考えていた。

「では、じい、帰ってきたら城に寄るからオヤジに伝えといてくれ」
「うむ。気をつけてな」

「おう」

「アマテラス様、ダイスケ殿、よろしく願います」

「任せておくのだ」

……

……

…

ノースの町に入った。一応町と言っているが、ダイスケの知っている町はミカドとミナト、ウィルスではセントラルとマリンド。村のイメージの方が強い。それでも遠くに城壁のようなものが見え、あれがノースの城だと判断できる程度だ。そして時々見かけるあばら家を見て姫に聞いてみる。

「これ、人が住んでんの？」

「そんなわけなからう。ノースを何だと思っている？ 魔物との戦闘でなくなった人の家だろう。子供はウィルス城下の学校に例外なく行くから子供が被害にあいにくいのが幸いだ。その内取り壊され

新しい家が建つだろう。ま、血縁者や友人が思い出の品などを取りに来るまではこのままかもしれんが」
「なるほど」

遠くで畑仕事だろうか、働いている者たちですら全速で寄って来て姫に挨拶する。姫がこのような性格だからか、はたまたウィルス国はどこでもこうなのか、姫と一般民というよりも友人的な挨拶を交わしている。姫への挨拶が終わったのか、断りを入れて仕事に戻ろうとした1人をひきとめ、剣聖という人物について聞いてみた。

「セントラルに近いやつらや魔物に身内をやられた連中が色々言っているみたいですがね、ワシらにとっては大事な家族や畑を守ってくれた恩人でさ」

とたんにコトワリが泣きそうな顔になる。

「お？お嬢ちゃんすまねえ、なんかひどいこと言ったか？」

「い、いえ、気にしないでください……」

「そうは言ってもよ」

「……父を、そう言ってもらってうれしかったんです」

「え？お嬢ちゃんコトちゃんかい？えらく大きくなって。……おい、みんな、コトちゃんがけえってきたぞ！」

「本当かい？」

「まあ美人になって……」

「でもこんなにやせちゃっているじゃないか、ちゃんと食べていたのかい？」

「剣聖様は一時期ちょっと体調崩してたようだけどここ何日かはすごく元気だよ！」

ワイワイと囲まれているのを眺めながら姫に聞いてみる。

「戦士が畑仕事とかしてはいけないのか？」

「どうしてだ？畑仕事はその道のものがやるのが普通だろう？」

「いや、コトワリもいじめられながら戦士で稼がないで畑でもやればよかったのと思ってね」

「大怪我をおったりしても、戦士は戦士の教育者になったり、決められた役以外はしないのがウィルスでは普通だ」

「そうなんだ、変なことを聞いてすまない。ところで」

「なんだ？」

「ミカドでのウィルスの民の評価なんだけど、ずるがしこいとか聞いていたんでね。なんか拍子抜けというか……」

「セントラルやマリリンなど、裕福で比較的安全な所にいる人にそういう者もいるな。あと商人の中にも。ノースやウエストでそのようなことなどしていたらはじき出されてしまう」

「へえ。やっぱり伝聞は当てにしない方がいいな」

「うむ」

「これは魔王も何か収獲あるかも」

「だいいいが……」

……

……

…

「ここが私の家です……」

「何を困った顔をしておるのだ？」

「い、いえ、アマテラス様や姫様や王子様をお呼びできるような家ではないので……」

「気にするな。オレやウエストだって城から出ればこういう所に住んでいるしな」

「ボクたち魔族だっていつもお城のようなところに住んでいるわけではないのだ。アマの町のボクの住処だってこと変わらないのだ」

「そ、そうですか……？では、ただいま帰りました」

『剣聖』。剣に限らないが近接戦闘における類まれな能力を持ち、敵を倒し生き抜いてきた者。どんな大男が現れるかと思ったダイスケだったが、中に入った時にいた人物は比較的小柄で膂力というよりは敏捷なイメージを持つ人だった。多少疑問に思ったことは結構歳がいつているように見えたことだ。60歳くらいに見えた。10代のコトワリの親にしては少々歳がいつているように感じたのだ。

「ようこそおいでくださいました。姫もさらにお美しくおなりになられて。強さも一段と高みに上られたようですね。王子も姫に並ばれるほどお強くなったのを感じます」

「久しぶりだな、剣聖。それにしてもオレとウエストが並んだだと？」

「ええ、そのように感じますが……」

「ウエスト、今までの訓練は手を抜いていたのか？」

「え？いやだな、本気だよ、本気」

「本当か……？」

また喧嘩になりそうな雰囲気を感じた。剣聖もそう思ったのか、「姫の美しさに目もくらみましたな、すみませぬ」などと言ってい

た。そして、

「そちらのお二方は？妻と同じ感覚を受けますな、ひょっとして魔族の方ですか？」

「アマテラスなのだ。こっちはダイスケという」

「アマテラス：様というところのアマテラス様ですか？」

「どのアマテラスかは知らないが、ボクはアマテラスなのだ」

「そうですか。ささ、中にお入りください。何か最近予感がありましてな。今日はいい酒があるのでですよ」

「いただきます！」

「こりゃっ、ダイスケ！」

「あ、すみません」

「かまいませんよ。どうぞ中へ」

見た目、思ったより元気そうだと感じたが、アマテラスはそうでもないようで、燃え尽きる寸前のろうそくのようなと言っていた。事実、酒を出した後の剣聖はこう言った。

「私はもう数日、早ければ明日あたりでこの命が終わると感じています。そのときにコトワリがいてくれたのがせめてもの救いです。ダイスケ殿ありがとう。そして我妻の研究結果をお伝えしようと思います」

「研究結果？」

「ええ、コトワリにも言っていないものです。ある意味これは私たち夫婦の遺言となるでしょう。コトワリも良く聞いておいてくれ」

「……お父様の具合が悪いこと、は、感じることで、が、できま、した」

すでに泣きながら答えている。

「うむ、私の能力も多少は受け継いでいるようだな。アマテラス様のためにも少し込み入ったお話をいたします。姫様方には多少理解

できぬこともあるかと思いますが、のちにアマテラス様から噛み砕いていただきたいと思います」

「わかったのだ」

「では、妻の研究から私たちウィルスの人間の構造を聞きました。

妻は同属婚姻のため、血が濃くなりすぎ、体の欠損や精神異常で生まれてくる子供の体や精神を補うため、魔力というモノが使われていると言っておりました。そして運よく欠損のないものはそれなりの魔力を持って生まれてくるのだと。その中で私は心臓に欠損があり、それを魔力で補っているのだそうです。そのおかげで一般の人よりも速く行動が出来るのだと。体感時間の差がありすぎるそうです。そしてそのわずかな余剰魔力にて敵を含め相手の力を押し量る能力を持ったのだと。私の年齢はいくつに見えるでしょうか、実は今年で40なのです。体感時間が早いことは返って成長や老化も早いことになるそうです。そして妻ですが、魔物化の影響でつれてこられた者だったようです。魔物化からの回復の折、ほとんどの記憶をなくしてしまったようで、名前すら覚えていない状態でした。魔王の城に近づいた大戦の折、つたない字で浄化はすんだからつれて帰って欲しいと書いた紙を持って所在なげにたずんでいたのをつれて帰ったのです。名前もわからず家もわからない、そんな彼女を支えるうち、結婚と相成ったわけです。妻は記憶をなくしていても聡明な人でした。その頭脳から魔物化の研究をしていたようです。たくさん本や日記を持って魔王の城から出た妻は研究がひと段落し、出産のあとで結果を報告しようとした時に病に倒れました。瞬間に悪化し、セントラルからの医者が来た時にはすでに手遅れの状態だったのです。その最後の瞬間、記憶が多少戻ったのか、研究の成果はアマテラス様に直接渡して欲しいと。それまでなんとしても他人に渡らぬようにと」

「名は、名を何と言っていたのだ？」

「すみませぬ、そこまでは……」

「そうか、それが死ではなく眠りならいずれボクも会えるだろう」

「お母様に会えるのですか?!」

「魔族は厳密には死なないのだ」

「そうなんですか」

「うむ、すまない、続けてほしいのだ」

「魔物化の原因は魔王にあること、決して悪いわけではないこと。

2つ目の意味がさっぱりわからず困惑いたしました。が、それが理解できない者に研究成果を見せてもわかってもらえないだろうからアマテラス様に渡して欲しいと。実際私は一切手をつけておりません。それは厳重に保管してあります。まだ体の動くうちにアマテラス様にお渡ししておきます。……………これです」

「ダイスケ、ノルンに送ってくれ」

「わかった」

「剣聖殿、この研究結果は魔王も持つておるのか？」

「より、魔王の方が詳しいだろうと言っております。妻のものは仮説ではないからと」

「わかった、ありがたく頂戴するのだ」

「ちょっと待って、ノルンから1冊だけ私的な日記があったからお返しするそうだ」

「あ、ありがとうございます。今日一日だけ私がお借りし、明日コトワリに渡します。恥ずかしいことが書いてあるかもしれませんがね」

「青春を埋めるには足りないかもしれないのだが、いい思い出を持つていくのだ」

「ありがとうございます、アマテラス様」

「うむ」

そしてこっそりとダイスケと会話する。

「ダイスケ？」

「何？」

「コトワリの腕輪に通信をつけてやってくれ」

「いいのか？」

「今日明日が峠だ。ボクたちは宿にいることにするから通信できるように」

「わかった」

「ではコトワリ、ゆっくりしてくるのだ」

「はい、ありがとうございます」

「うむ。ダイスケ、行くぞ」

「はいよ」

「あれ、オレたちは？」

「城に報告に行けばいいのだ」

「行きたくねーよ」

「だが、姫の務めだと思うのだ。民の目の前で王子と熱く抱擁すれば万事解決なのだ」

「できるか！そんなもん！……とっ、すみません」

「ボクには言葉遣いを気にしなくてもいいのだ。まあそれで解決するなら安いものだと思うのだ」

「くっ……さらしものになるしかないのかっ……？」

「あきらめるのだ。ウェスト王子、頼んだぞ。関わってしまった以上結末までハッピーエンドで行きたいのだ」

「はっぴいえんどですか……？」

「いい結末という意味だ。もう他の男に取られるようなことがないようにしてくるのだ」

「そうですね。わかりました！さあノース、行くよ！」

「ちよつと待て！引つ張るな！あああああ……！」

「意外に強いな。剣聖の言葉も頷けるかも……」

……

……

…

4日目早朝……。脳内へのリーンという響とともに腕輪からコトワリの声が流れる。

「ダイスケさん。お父様が……」

「すぐ行く」

初めてアマテラスを起こしに行ったがその時の惨状は割愛する。
コトワリの件がなければ色々危なかった。割愛と言ったら割愛です！

「コトワリ！」

「はい、今朝方……」

「そうか。たくさん話はできたか？」

「日記を2人で読みました。その時の情景をお父様がお父様が加えてくれたりして……。いままで知らなかったお父様とお母様の姿が見えました。私は2人の娘でよかったです」

「そうか、間に合ってよかったな」

「はい」

「持つていくものは？俺が持つて行つてあげるよ」

「ではこれを」

そういつて箱を出す。

「うーん、微妙に大きいな、マジックで通るかな？中身をバラで送つていいか？箱に愛着は？」

「箱はその辺の箱だったので問題ないです。中身は少し恥ずかしいのですが……」

「下着とか？」

「そんなはずがありません！」

「失礼」

「いえ、お母様の遺品の中にドレスがありました……」

「それが恥ずかしいの？」

「結婚式に使ったものらしく……、日記で私にも使ってくれたらとかかれていました……」

「ふむ、年頃の女の子にはそれも恥ずかしいのか。勉強になったなあ」

「言わないでください！」

「申し訳ない。ところでミカド行きには何か行っていたかい？」

「いえ。お母様にまた会えるかもしれないと伝えた時に是非行けと、劍聖の娘としてではなく、ただのコトワリという人として生きて欲しいと」

「そうか。で、劍聖は？」

「こちらです。私もいくつかの戦争を体験しました。ですがこれほど穏やかな顔を見たことがありません」

「……よかった、のかな」

「はい！」

そういつて手を合わせる。次に生まれてくるときは戦争のない国でありますように、と願いながら。

ウィルスの巨星が落ちた日であつた……。

「アマテラス殿、ダイスケ殿！聞いてくれっ！ウエストが城に着くなり何をしたと思う？！民の目の前でくちづけなどしよった！あわてて逃げてきた！もう城にはもどらん！」

「おおーウエスト王子、よくやった！」

「これでほとんどの問題は解決なのだ！」

「あはは、しかし姫のご機嫌が……」

「それは恋人間の問題だろ？」

「そうなのだ」

「わかつてはいるんですが……」

「ふむ、ボクに任せるのだ」

「は……？」

「ノースの姫よ、将来はウエストの王子と結婚しないのか？」

「するさ！……いずれな」

「ではおぬしらは恋仲だときちんと証明できるのか？」

「出来るさ」

「どうやるのだ？」

「うぐっ……」

「単純なのだ。ウエスト王子、ノースの姫は恥ずかしがっているだけなのだ。気にしなくていいのだ。お主の愛できちんと包んであげるのだ」

「ありがとうございます、アマテラス様！」

「けっ！」

「まあまあ」

……

……

…

「いいのか？家ごと燃やしてしまっ……？」

「はい。すでに私の生家はありません。お父様とお母様の気持ちも全て持っていくために、ここはこうするべきだと思いました」

「そうか……、アマテラス、火葬頼んでいいか？」

「わかったのだ」

パチリとアマテラスが指を鳴らす。とたんに家ごと業火に包まれた。その炎が天をも焦がさんとする様子にコトワリたちは剣聖と、その妻の魂の安寧を願うのであった……。

第15話 魔王

「え？コトワリもついてくるの？」

「おねがいますっ！」

「とは言ってもなあ……」

「キミはどうやって自分の体を守るつもりなのだ？姫と王子は一応案内役として城の入り口までは許可した。それに2人の連携は1+1が3になる連携なのだ。コトワリはついてこられるのか？」

「そ、それは……。しかし母のことが知りたいのです！」

「ふゝむ……。では……」

そう言うアマテラスは髪留めのアメノトリフネを外し、コトワリに手渡した。編んでいた髪が手櫛だけできれいなストレートになるのはなんと言うか見とれてしまう。アマテラスの「どうした？」という念話に「なんでもない」と返しておく。若干赤面してしまっただが。

「これは？」

「アメノトリフネ。今はこの世界とひとつになってしまっているのであまり大きな力はないのだが、コトワリを守ってくれるだろう」

「後はアマテラスの言うことだけきちゃんと聞いてくれれば助かるね」

「分かりました、ダイスケさん。アメノトリフネ様、よろしくおねがいますっ！」

「ヨロシク……」

「わっ、しゃべった！」

「アメノトリフネを何だと思ったのだ？」

「いえ、何かのお守りかと」

「その姿はアメノトリフネの残滓なのだが、壊れはしないし、コトワリを守ってくれるのだ。安心するのだ」

「はいっ」

「よし、行くのだ」

……

……

…

「ここが城です……」

「ふむ、なかなか簡単だったのだ」
「だねえ」

「……」

「……」

「……」

「さて、……ん？どうしたのだ？」

変な顔をして固まっている姫、王子、コトワリ。と、姫が再起動をはたし、まくし立てる。

「どうしたじゃねえ！なんなんだ、あんたらの力？！魔物が敵にす

「ならんなんて聞いてない！」

「魔物と言っても野生動物からのものならあんなものだと思うのだ」
「だよねえ」

その通りと相槌を打つが、やはりウィルス勢は納得いかないようだ。

「普通は熊や猪でも2人がかり、猿やゴリラなんぞ、向こうが群れを成していたらこっちは最低倍は人数がいないと相手にならないんだぞ?!」

「そうなのか？」

「ボクに聞いたって知らないのだ。ウィルスの兵の実力も知らないのだし」

「そうなのか？」

「オレたちの常識としてそうだ！」

「ふーん、まあそうするとここで姫と王子を帰すより一緒の方がいいかな。ウィルス王にも説明しやすいだろうから。アマテラスはどう思う？」

「野生生物の魔物じゃないものが出てきた場合にどうなるか分からないのだ。帰り道も同じくわからないのだ。出来るだけ3人で固まって移動してもらった方が一番かもしれないのだ。アメノトリフネが守ってくれると思うのだ」

「それが一番かな」

「では行くのだ。3人はあまりコトワリから離れぬようにお願いするのだ」

「わかりました」

城門に近づく。入るにはどうしたものかと悩むまもなく、城門が開く、音も無く。開いた先には2人の人物がいた。

「どなた？」

特に危機感も持ってなかった自分が聞いてみる。男性に見える方が、口を開く。

「きゅわああふゅうううういいいいいん！」

「痛い！耳が痛い！」

「な、なんだこれ！」

「わわわわ……」

「アマテラス、大丈夫か？！」

「ノルン、解析せよ！」

こちらの世界には機械音など自然音でないものはあまりない。俺やアマテラスはそんなでも無かったが、ウィルス勢の3人にはきつかったようだ。スピーカーのハウリングに近い感じが。

まわりも落ち着いてきたのでさっきの声？を出した男性に目を向けてみる。姫など抜刀しそうな勢いだったので、それは制しておく。なんとなく申し訳なさそうな顔をしたようにも見えた男性は隣の女性に合図する。その女性は横に持っていたらしい、小型のホワイトボードのようなものを掲げる。するとそこに文字が浮いてきた。

“おどろかせてもうしわけない”

「それで意思疎通するわけですか？こちらの言葉はわかるんですか？」

“われらのこえはすこしきついううだ。ことばはわかる”

「どうしてここに？城門を開けたのはあなたですか？」

“まぞくのおうをおむかえに。わたしはまおうとよばれているもの。こゆうめいしょうはない”

「だそうだ、アマテラス、ちょっと代わってくれ」

何か念話でノルンと会話していたんだろう、アマテラスは少し待てと手振り以示す。

「すみません、ちょっと込み入っていて」

“かまわない”

「私の母のことを聞いていいですか？」

「いいよ」

「母を知っていますか？」

“はとはいでんしていきょうしゃといういみか”

「いでんしていきょうしゃ？」

「血をもらった人ってことだから、合っているんじゃないかな？」

「そうです、その人のことです」

“あなたのいでんじょうほうからさつするにけんたいばんごうせんにひやくごじゅうばんのものだろう”

「けんたいばんごうせんにひやくごじゅうばん？」

「検体番号1250番か、で、分かりますか？魔物の研究をしていたようなんです」

“あのものはほかのけんたいともあいしょうがよく、やくにたった。もんだいはひとだんらしくしたし、そろそろもとのせかいにかえすつもりであった。ぶかのはらんによりおくりとどけることができなかったが、ひとがつれていったようだ”

「それがコトワリの父さんだね。しかしこれは読みづらい」

「待たせたのだ。ダイスケ、マジックで受け取ってくれ」

念話でどういうやり取りをしていたかなんとなく分かったのでお

となしくマジックから道具を出し魔王に近づく。正直いきなり襲われたらどうしようかと思ったが杞憂だったようだ。2つのわっかを渡す。

“これは？”

「その金具を外して広げ、首に巻くようにつけるのだ」

魔王とその傍らの女性も困ったような、危険を冒したくないような顔をしていたが、アマテラスの

「危険では無いのだ。魔族の父として保障する」

という一言でそれをつけた。

「人にとって耳障りでない周波数で、思ったことを発音してみるのだ。いつものようにたくさんの情報をこめる必要は無いのだ。ボクたちの会話の速さと文字情報程度でいいのだ」

「オ、オオ？オオ。コレハスバラシイデスネ」

「ア、エエ、コトバガデイマスネ」

抑揚の無いマシンボイスが響く。

「もう少し、言葉の単語に音程の上下をつけるのだ。それなりにこちらの言葉も聞いているだろう？それから女性の方は少し全体の音程も上げるといい。女性は男性よりも声が高い方が違和感が少ない」

魔王をそのとなりの女性はしばらく何か考え込むようにした後、口をあけた。

「このような感じでどうでしょう？」

「私も少し調整してみました」

「いいと思うのだ。ではまずはコトワリの話の続きを話すが良いの

だ」

「そうでしたね。コトワリさん、でいいですか？先ほど書いたとおり、その後のことは分かりません。それに魔物化してここに来た時には会話すらできる状態ではありませんでした。彼女は己の記憶を代償として魔物化から抜けたのです。というより、正常化の際、記憶が消えてしまったという方が正しいでしょう」

「そうなんですか」

「申し訳ないですね、コトワリさん」

「いいえ……」

「写真みたいなものは無いんですか？」

「ああ、そういえばまだ情報が残っているかもしれません。ただナンバー4525が暴れた際に情報室も被害を受けましたから確実とは言えませんが」

「ナンバー4525とは？それからあなた方が敵対し、今すぐにも攻撃しようとしないうちに疑問を覚えますが？」

「それは私たちの成り立ちからお話しないといけないでしょう。そして現在攻撃しない理由としては4525がいないからです。半変化していたようです。ただいきなり信用してくれというのも虫が良すぎるとは分かっています……」

「ボクは信用してもいいと思うのだ」

「アマテラス？」

「ただ、本当に信用するかどうかは話をきちんと聞いてからなのだ」「じゃあ、お話を伺いましょうか」

「大丈夫なのか……？」

「アマテラスが大丈夫といえは大丈夫だろ。それにやる気ならもうやられているだろうし」

「そうですか」

「私はお母様のことが聞けるならかまいません」

「じゃあこちらへどうぞ。実用のためのものしかないのであまり潤いはありませんが」

通された部屋は小規模の会議室のようだ。10名位の会議にはもってこいの広さだった。

「では、まずは私たちの成り立ちからお話しないといけませんね……」

地球外生命体。端的に言えばこれに尽きる。そして彼らの一族は肉体や頭脳をより高度に人為的に発展させてきた一族だ。彼らに特に名は無く、ナンバーで管理されている。魔王と名乗った彼はナンバー7210。隣の彼女はナンバー7211。彼らの星の寿命により、乗せられるだけの命とデータ、もろもろの機器を月型宇宙船に乘せてきた。そして大昔、この地球からの救助要請電波を受信、近づいたところ、捕縛電磁場により身動きができなくなってしまったらしい。

「ちよつと待った！君らの宇宙船は赤い方の月の事？」

「いいえ、普通に見えるほうですね。赤い月の方はもともとこの地の月です。ここに来た時に調査した段階では、1つの月の大きさに倍以上の密度を持っていたようです。捕縛された我らは何とか脱出しようと試みていた時です。ぎりぎり単体用宇宙船が航行可能だと分かり、赤い月の調査を行いましたから、間違いはありません。そして内部に施設があったのも確認しています。人用の住居スペースと人口知能でしょうか。ただ生きた人はいませんでした。そのの

人工知能のデータを何とか閲覧保存して解析した折、中の人々、すでに大部分機械化で人といえるかは分かりませんが、その中の数人の反乱にて全滅したと思われます。ここから月が赤く見えるのは彼らを生かしていた装置などの鉄の破片が酸化、赤く見えているだけでしよう。そして人工知能を破壊しても捕縛電磁場は1000年ほどは消えないことが分かりました。我らは月にこれだけの施設、技術があるのなら月に戻るのは難しくないと考えました、それに正直、食物用などの植物も遺伝子操作をしすぎたのか徐々に変質しており、このままでは自分たちの命も危ういと思いこの地に降り立ったのです」

「では赤い月がもともとこっちの月なのか……」

「密度が上がったことで酸化現象が出るほどの大気をもてる重力が発生したようですね」

「では赤い月に惹かれるというのは……」

「赤い目に変化する現象のことでしょうか。あれは私たちのシステムです。私たちの遺伝子研究の成果ですが、犯罪者、特に殺人を犯す者を判別するためのシステムです」

「なぜそんなものが……」

「罪のないものが死んでからでは遅いのです。特に宇宙空間で単体で生きていけないような人類にとって、宇宙船内の事故や殺人はそれこそ全員の生死に関わるのです。赤い月にいた人々がいなくなつたように。ですが、その特定遺伝子を持ちながら発動しない人も当然いるのです。理性の強い人といえますか。遺伝子が発動したら目が赤くなりだすのです。けっして月からのシステムが犯罪者の発生を促しているわけではありません」

「自業自得というわけか？」

「その人が犯罪を犯さなければ、そのシステムを作った私たちが完全に悪でしょう。ただ、システムが発見した人の犯罪率が100パーセントでそれが出来ない人は0だという結果を見れば間違いではないでしょう」

「人を殺そうと思ったわけではない犯罪はどうなるんです？」

「例えば機械操作を間違えそうな人、そういうあいまいなことをするものは私たちの同族にはおりません。そういう遺伝子を持って生まれてきていますから」

「なぜ、ウィルスの民や魔族などをさらっているのだ？」

「もともと犯罪発動の遺伝子は人に個人差や人として生きていく上で必要な遺伝子で無くてはならないものです。感情を持つために必要なのです。ナンバー4525はそれに目をつけたのでしょう」

「なぜ目をつけたのだ？」

「私たちが月へ帰るためです」

「月へ帰る？」

「あと100年ほどで捕縛電磁場がなくなる計算です。我々は月に帰るために色々な策を講じてきました。ですが圧倒的に資源が足りません。ここから宇宙船を射出するための推進力すらいまだ構築できていません。あなた方がマシンと呼ぶ存在も金属を集めるためのプログラムがなされています。私はその方向で資材を集め帰る用意をする予定でした。ただ4525は変化したこの地の人々を使い、より多くの人々を従え準備をしようと考えたのだと思われます。そのためにはこの地の人が変化したらどうなるのかと研究していたようです。しかし彼も変化しはじめました。結局彼はこの地を自分で治め生きたいように生きると考えてしまったようです」

「それをマリンの王子が斃したわけか」

「そうです。そしてその研究を引き継いだ、というか尻拭いをした私は人によって、特定の教育を施すことでシステムの呪縛から復帰することを発見しました。わずかな確率ではありますが」

「コトワリの母はその数少ない復帰者というわけか？」

「そうです。まだ4525がいた時から唯一の復帰者だったようです。記憶の変わりに復帰したようですが。検体1250番の残したデータはかなり役に立ちました。彼女の倫理の教えで復帰した子供たちもいます。復帰した人々はそれぞれさらった場所と同じ所へ帰

すようにしたのです。そして4525が斃れたときについてに元の生活に戻ることができるようにはかいました。彼女の研究により、新たな復帰システムが構築されたためでもありました。4525の作った変化者をつれてくるシステムはまだ解除できておりませんが、それなりの数の者がそろそろ戻してもいいレベルまで復帰しております」

「ウィルス王に連絡をしなかった原因は？」

「戻ったものが王に説明できるほどの知識が無かったのが一般的でしょうか」

「コトワリの母は？」

「この地の者ではないと判断いたしましたし、今までの記憶がないのなら無理だと。海を隔てたミカドの大陸の極少ないところまでは変化者を連れてくるためのシステムが伸びておりましたが、その地の者は皆異形というべき者たちで、アマテラス様と同族であるとは今の今までアマテラス様を見るまでは理解できておりませんでした」

「そうなのか」

「一応月からのリンクでその遠い地がミカドと呼ばれており、魔族という者たちがいることも分かっておりますし、変化を起こすものが同様にいたのも分かっています。ミカドの王に近い者が変化していて近いうちに王自身か血族のものが害されるのではないかと懸念していた所でした」

「そんなことまでわかつていたのか」

「失礼いたします」

先ほどの彼女だ、ナンバー7211と呼ばれていた。彼女は紙と角のようなものをトレイに入れて持ってきていた。

「7210、言われたものを持ってきました」

「ありがとう。アマテラス様、コトワリ殿、これが検体1250、コトワリ殿の母上のデータだ」

コトワリには母の記憶がない。しかしどこと無く自分に似たその容姿に涙が溢れそうになった。

「この角は？」

とアマテラスが角を持ってみる。すると

「ハトホル……」

「知っているのか？」

「ああ、魔族の中に研究だけに命をささげる連中がいるのだ。ほとんど外界と接触しないので今まで魔物化していたなど知らなかったのだ。彼女はハトホル。かなりの力を持った魔族なのだ。彼女が魔物化したとなれば魔族の者への対応も少し変えなければならないと思うのだ。コトワリよ、お主の母はハトホルという。これを見て分かるように、角が生えており、それが弱点なのだ。魔族の者の角は存在意義まで持ったものもあるから角をとられたなら記憶がなくなつたのも頷けるのだ」

「お母様……」

手渡された角を胸に抱きながら涙を流すコトワリ。

「ハトホルならばおぬしにコトワリと名付けたのも理解できるな。彼女はこの世のあらゆる真理を研究しておった。故に娘にコトワリ、理と書く名前をつけたのだらう。ウィルスでは珍しい名前と思っていたのだが」

「で、いまいちあんたらの話が理解できないんだけど、あたしたちはどうなるんだい？」

少し忘れ去られた感のあるノースの姫がそう言う。

「目が赤くなつて、さらわれた者は、将来の犯罪者になる可能性があるから魔王に更生させてもらっていると伝えたらどうなの？ かばってもかまわんが、かばうなら自分の一番大切な人が殺されてもかばい続けるようにと」

「ふーむ」

「魔王つて言い方も完全に悪く聞こえるから困るよね。7210……ナニ……ナフジ……ナフト。そう、ナフト王とかにすれば」

「ナフト……。今まで個体を名称で区別することはありませんでした。しかし番号ではなく固有名称ができるのはなんとなくうれしいですね」

「適当でごめん、これ語呂合わせだから」

「語呂合わせとは？」

「7は『なな』、2は『に』、や『ふたつ』。10は『じゅう』や『とう』。頭文字をとってナフト。7211さんはナファイとか。他にもいろんな語呂合わせがあるんだけどね」

「面白いですね」

「まあ簡単にはウィルスとの友好が回復するとは思えないけど、直に危害を与えるわけではないと理解していつてもらわないとね。そうそう、ウィルスとの戦争って、どうやってたの、こっちは？」

「調べた所に寄ると、変化した野生動物をある特殊周波の音で操っていたようですね」

「それであたしらの国を襲っていたのか?！」

「変化したものをさらってしまっていた以外はこちらから攻めたことありません。ただ変化した自然動物がよろない様になっていますから自然とそちらに向かったものと。単体や少しの集団がそちらの町を襲うようにとけしかけたわけではないのです。攻められた場合のみ対応してただけです」

「そうなのかそれだけ聞いてもそれが本当だとした場合、ただの行き違いになってしまう」

「喧嘩や戦争なんて突き詰めればそんなものだとかは思うのだ」

しばらく雑談が続いた。ナフトさんとこっちのつながりはコトワリしかないわけだから自然とそういった話が多くなる。アマテラスはコトワリの母、ハトホルの残したデータとのすり合わせもしたようだ。

ふと疑問になったことを聞いてみる。

「最初に会ったときのあの声は何なんでしょう?今でこそ戦闘の意思がなかったと分かりますが、あれはびっくりしました」

答えたのはアマテラスだった。

「あれはなんというか分かりやすく言えば、コンピュータ言語なのだ。音の振幅や倍音、一つ一つに意味を持たせ、一瞬で多くの情報を伝えることのできるものなのだ。あの一瞬で今まで話をしてきたことの数倍の意味を持っているのだ。その中に彼らの言語の根幹ともいえる情報もあったのである。そのような道具を作ることができたのだ」

「その通りです。宇宙を旅するに当たり、できるだけ一瞬に多くの意味をこめた指示などを伝えるために必要なのです。その一瞬に自分たちの生死が関わるならなおさらです」

「へえ、なるほど」

「ですが、この地の文明レベルでこのような翻訳機を作ることができるとは思ってもいませんでした。アマテラス様、あなたは他にも何か技術を持っていると感じます。違いますか？」

「どの技術がおぬしらに有用かも分からないのだ。なんとも言えないのだ。だが、月にいた連中。彼らはボクと重なった折にいたある意味反逆者たちだろう。危機が1つなくなったなら多少手助けしてもいいかと思っているのだ。というわけで、ダイスケ、マジックで出すのだ」

なにを？とも聞けず、マジックで最初に触ったものを出してみる。メディアプレイヤーのようなものだ。再生を押してみる。

「ききやああああきゅううおおおおおん！」

「痛い！耳が痛い！」

「な、なんだこれ！」

「わわわわ……」

ノース姫、ウェスト王子、コトワリはさっきと全く同じ反応だ。オレはそうなんじゃないかなと思っていたのでなんとか叫ばずにすんだ。

「そういうわけなのだ、ナフト殿」

「こちらとしても逆にお願いたいくらいですね」

「アマテラス、説明してくれ」

「ちょうどこの地の地下にあったコンピュータをここに接続、プラ
スしてノルンたちとも接続することにより、ボクたちは魔物化のシ
ステムと、魔族及び魔法にて手助けできるのである情報。ナフト
殿からは魔物化に関する情報を。まだまだウィルスとは友好を結べ
ないかもしれないが、ミカドと言うかノルンとのリンクを持たせる。
これによりお互いに有益な情報が得られるというわけなのだ」

「ふうん、よくわからんけど、仲良くなれるならいいや」

「ダイスケ様にはお礼の言いようありません」

「どうして？ナフトさんにお礼を言われるようなことはしてないと
思うけど」

「ダイスケ様がこの地にこれなければ今回のように話し合いには
ならなかったでしょう」

「そうなのかな」

「ええ。アマテラス様も地下にこもりきりで答えの出ない問題にさ
らに落ち込んでいたと言っていましたよ」

「そんなものなのかな？」

「ええ、この星、太陽系第3惑星にも私たちの前世代の者が接触し
たはずです。あなた方が宇宙人と呼ぶ存在。当時の地球の科学とい
うものはまだ太陽系から出るか出ないかというレベルのもだった
と聞いています。私たちの先祖はそんな大きな技術の差にもめげず、
研究を重ねていた当時の人々にはある種の感動を覚えたと言ってお
りました。超高寿命、そして高性能な体や知能を持つ私たちは命を
かけるほどの熱意という物を持たないことが多いのです。祖先のさ
らに祖先、まだ私たちの一族が星から出られなかった昔話に似た世
界。そして彼らの熱意。とても素晴らしいものだと思いますよ」

「そうなんだ。でも過ぎた技術の提供だけはかんべんしてほしい」

「分かっています。徐々に荒廃していく世界は見ていてもおもしろ
くありません」

「そう、よかった。なんにしてもお互い助け合っていきましょうか」
「こちらこそよろしくお願いしますよ」

だいぶ時間がたっていたこともあり、食事をいただいでここで1泊していくことになった。だが、無駄を省きに省いたナフトさん一族は食べるということに喜びやおいしさといったものを見出す一族ではなく、その食事は味気ないものだった。ついでだからとマジックでレトルトではあったが豪華な食事を出し、食という芸術を説き、アルコールの利点、欠点も説き。惑星単位で考える、自分の未来のことはよく知らないが、自分にとって初の隣人をもてなした。

武芸に秀でたノース姫は宇宙人、このナフトさんの一族をそう表現するが、と酔った勢いで演舞など始めてしまい、さらに宇宙人の肉体的な技能の高さを感じることができた。

生きていく上で全てを合理化した彼ら。宇宙を生きるとはこういうことか。

最終的には離れていってしまうだろうが、いろいろ宇宙に関して話しが聞けたらなあと思い、ナフトさんを質問攻めにしてみる。と言っても自分の宇宙の知識などナフトさんたちにしてみれば常識以下のことなんだろうけど。

事実、説明されたことの半分も理解できなかった。しかし知的欲求というかそういったものはずいぶんと満たされたようで。アルコールもあいまってあてがわれたベッドで気持ちよく眠りに落ちていった。

翌日。「魔王の城に突入して五体満足で帰ってくるなんて輝かしい武勇伝だな!」「ノースは将来王になるんだからナフト王と友好を築くのが第一だろう?」「しかし今まで一人としてなしえなかったことだぞ?」「それはアマテラス様のおかげだろ?」「でもなあ……」

などというウィルス勢の言葉を聞き流しながらナフトさんと向き合う。

「有意義な時間でした、ありがとうございます」

「こちらこそだ、ダイスケ殿。昨日の食事のあと、いかに栄養価を変えずにおいしいものを食べるかといった研究を始めた者もいる。このたびの会見は私たちにとってもとても有意義なものであったんだよ」

「そういつていただけるとうれいす」

「あ、あの!」

「どうかされたか、コトワリ殿?」

「ナフト様、色々母のことを教えていただいて、ありがとうございます!」

「検体……失礼、ハトホル殿の研究は我々にも多大な恩恵を与えている。こちらこそお礼を言いたいほどだ」

「そ、そんな」

「詳しく調べてみたのだが、ハトホル殿は変化してももしかしたら人を殺したりしなかった稀有な例であるかもしれないということだ。4525やその部下たちの拷問にも等しいやり取りにも『父のため

なら』と全て耐えたと記録されていた。今なら分かるが父とはアマテラス様のことだろう。あれほど力を持った魔族が変化したということはアマテラス様はおどろくべきことだと言っていたが、変化してもなおあれほどの意思を持ったものはその後はいなかったらしい。結局それをくじくために角を折ったらしいのだが、それで元に戻ったということは父、アマテラス様への強すぎる忠誠がそういう結果をもたらしたのかもしれない。アマテラス様にはそれは伝えてあるので今後は大丈夫であろうが。そのものの血を半分継いでいるコトワリ殿はもしかしたら気をつけねばならんのかもしれないな」

「私も魔物化するということでしょうか……」

「ハトホル殿の変化はその後と同じ例のないある意味特別なものだ。あまり気にする必要も無いのかもしれない。少しでも気になるのならアマテラス様に相談するのがよいであろうな」

「分かりました。ありがとうございます」

「うむ、健勝であられよ」

「はい」

「さて、ウィルス王への報告はノース姫をウェスト王子にお願いするのだ」

「はあ？」

「必要ならちゃんと補足するから大丈夫なのだ」

「それなら……」

「では先に城に向かうのだ」

「わかりました」

「で、どうするんだ、オレたち？」

「うむ、コトワリ、母の墓所へ案内するのだ」

「……？わかりました」

「ここです」

「どうやって葬ったか聞いてもいいか？」

「そのまま埋めたと父に聞きました」

「ならば好都合なのだ。コトワリ、角を貸すのだ」

大事に布に包んであった角を出すコトワリ。少し躊躇したようだがアマテラスに渡す。

「魔族は厳密には死なないのだ。その肉体は眠りをもって再生し、また復活するのだ。ハトホルの力ならばどの程度か分からぬも無いが、角を失っていた間の記憶のことも考えれば、体の近くの方がいいと思うのだ。ここに角の力を解放し、土に返す。融合した体と角の記憶は上手くいけば混ざり合い魔族の町の社にて復活するのだ。いつになるかは分からないのだが」

「お母様がよみがえるのですか？！」

「コトワリとの記憶を持つているとは限らないのだ。それにコトワリが生きている間に眠りから覚めるとも言い切れないのだ」

「でも、お母様がよみがえるのですね？」

「ああ、それは魔族の理なのだ」

「ではおねがいします」
「わかったのだ」

アマテラスの手の上で角は光の粒となり地面に降り注ぐ。埋められたであろう体の部分がそれに反応してか地面も薄く発光する。しばらくするとその発光も収まる。もとのただの地面へと戻る。

「これでたぶんいいのだ。詳しくはアマの町の社にて調べなくてはならないのだが、それはまたミカドに戻らないと分からないのだ」
「なんにせよ、あとはコトワリがミカドについてからだね。じゃあ行こうか」

「……はい……」

ノルンたちの力を借りつつ来た道に戻り、無事城へ着いた。アマテラスが威厳を持って説明するよりも、身内であるノース姫やウエスト王子の説明の方が理解できることもあったのだろう、アマテラスの説明は最低限で済んだ。サンカイさんやツバキさんたちの無事でよかったとの言葉と、泣きそうな顔をしながら無言で胸元へ飛び込んできたユリカさんを受け止めやっと1つ片付いたと大きな息をつくダイスケであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6632p/>

魔と生きる国

2011年7月7日07時19分発行